
栗の変化

レモナー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

栗の変化

【Nコード】

N9778I

【作者名】

レモナー

【あらすじ】

都会の一角に存在する洋菓子店には毎日多くの人が訪れる。その店さえなければ顔を合わせることなかった人々が集う。それは店内だけでの関係のはずだった。その中でつながりを持つことになってしまった4人の男女。

運命が狂った時彼らはどこへ向かうのか。ラトルの引き起こした変化の正体とは…

チャプター1 彼女は・・・

地下鉄の構内で人は川のように絶え間なく流れてゆく。

その川の中で一人流れに逆らうように堂々と歩く一人の女がいた。夏に向けて軽くした髪が、肩のあたりで揺れている。

時計を確認しながら歩きなれたルートをたどり外に出ると、青空が広がった。人の群れから解放されると、早速携帯をとりだす。

スリーコール以内に出るのはただ一人。

「福原部長、太陽の所為か姿が見えないんですけど」
相手が出る早々名乗りもせずに話すのはただ一人。

「片桐瑠衣、いつになつたらお前は人の話をまともに聞くんだ。
今回の企画はお前ひとりだろう」

「そうでしたか？ そうでしたね。ではアイデアだけでも頂きます」

「何で上から目線なんだ、まあいい。そこは何処だ」
一瞬あたりを見回す。標識が目にとまる。

「十一丁目ですね」
「ならお前の得意だろ、スイーツを探せ」

口をあげて笑みをたたえる。菓子に関しては自信がある。
「絶対に通る企画にしますよ」

「期待はしない」
「部長の結婚ほどじゃないですよ」

相手が言い返す前に携帯を閉じる。瑠衣と福原はお互い未婚であり、年齢が五つ下の瑠衣は未だ優位な立場にいる。今年瑠衣は四分の一世紀を迎える。

青空まで響く小気味よい音がした。

ファッションでただ一つ自慢のハイヒールを鳴らし目的の場所まで脇目を振らずに歩く。

かけたポーチが赤い残像を残しながら揺れる。通行人は少なからず彼女の威厳に道を開けるだろう。

目的の看板を見つけた。誰もが一度は読み返す奇妙な名が特徴だ。

『ラトル 一歩先 洋菓子店』

夏の陽光を避けてか今日は人が多いようだ。

「うむ、まさか売り切れということも」

一筋の不安を背負いながら店内に足を踏み入れる。企画書を書く前に、部長に実際食べてもらい許可を得ねばならないのだ。

風鈴の涼しげな音がして洋菓子とともに店長が迎えた。

ショーケースに並ぶケーキだけでなく中央のテーブルに一台ケーキが置かれている。

真上のライトの光に照らされ、店内で唯一の赤を魅せつける。瑠衣は眼だけでそれらを楽しみながら、カウンターに近づいた。

「いらっしや、あんたか。またうちの菓子達をあんたらの商品のおまけにすんのかい」

「それ以外で来たことありました？」

「初めて来てくれたときだろうな」

同時に二人は頬を緩める。三十前半であろうこの店長は瑠衣が唯一認める男だ。無駄を省くように整えられた黒髪、彫が深く影のある顔には短い髭が生えている。

年季を感じる白い服に身を包み、クリームの付いたタオルが横のポケットから顔を出している。

名も特技も知らないが料理の腕と思考力、舌のまわり具合は確かである。

それを知ってか常連客はかなりの数だ。瑠衣もその一人。

軽くショーケースを眺め、馴染みのものに決めた。

「ロ・シェ・モンブランを三つ、カラメルチーズケーキを二つ下

さい」

生クリームを感じさせぬほど濃い紫のモンブランは、この店一番の売れ筋らしい。カラメルチーズケーキも、目だちはしないが長い人気を誇る。

店長は予測していたようにケーキを包んだ。値段は告げられない。瑠衣は正確な金額をカウンターに置く。まるで定められた儀式のように二人は滑らかに動いた。

袋をつかみ取り店を出ようとしたとき何かが体を貫いた。鋭く店内を見渡したとき事は起こった。

中央のテーブルが倒れゆく。無音だった。

机上のホールケーキは重力に逆らえず、白い後を残しながら滑り宙に舞う。

薄暗い店内にクリームが映え、ただバニラの香りが鼻をかすめる。それだけだった。

水のはねた音がして完璧な円は崩れた。

周りの人々も理解出来ない顔で立ちつくしている。ふと我に返り瑠衣は外へ出た。明るい日差しが心地よかった。

たった今見た現実味のない映像がよみがえる。店内には何人か人はいたが、誰もテーブルには触れなかつたはずだ。

「何が起こったの、いや、何が起こる？」

答える相手もないまま瑠衣は街へ滑り出た。手にかかるケーキの重みが頼もしかった。

腕を振りたい衝動を抑え、瑠衣は駅へと歩いて行った。この夏は会社から新商品が三つ出ると聞いている。瑠衣の所属する企画部は、既に企画書を製作し始めている。企画部と言えども仕事は不定期であるため、横の繋がりから仕事が流れてくることも多い。

お陰で瑠衣は会社内の事情に精通している。今回も夏第一段の商品を人より早く聞きつけ、外へ出たのだ。

人通りが多くなると駅はもう近くである。奇妙な感覚を払えぬまま、瑠衣は券売り場の列へ溶け込んだ。

これからの夏自分の身に何が起こるかなど一人を除き予想もしなかつただろう。

チャプター2 彼は・・・

愛車を走らせながら会社に向かっていると、奇妙な店が眼に映った。洋菓子店であろうが、何か独特な雰囲気を持っている。

時間に余裕があったため、車を止めると背広を折らぬよう外へ出た。宇本和人は有限会社に九年間務めている、三五歳の妻帯者である。普段は会社に向かう途中に寄り道などはしない。

改めて見てみると、外観は美しい。ヨーロッパを切り取ってきたようだ。和人世の出勤時間は十時と遅めであるので、既に店は空いていた。好奇心が勝り、入ってみる。

「いらっしやいませ」

深みのある声と共に挨拶をしてきたのは恰幅の良い、店長らしき男だ。

店内はまさに、少女が夢見る森のケーキ屋だ。木造りの動物とギフトが色鮮やかかなりボンに包まれ並んでいる。

買う気はないので、店内の人の多さが逆に助かった。

(そろそろ出なくてはな)

しかし、和人世は足を止めざるを得なかった。

今まで袖が触れていたテーブルの感覚がなくなると同時に、ケーキが飛んだのだ。束の間不思議な光景に目を奪われ、崩れる音と共に現実が帰ってくる。

「俺：俺がやったのか？」

寄り道などするのではなかった。中央のテーブルに置いてあったからには店のシンボルなのであろう。弁償となるだろうか。

焦ってめぐる思考を落ちつけていると、男がカウンターから出てきた。

「あのっ……私が……」

しゃがみ込みケーキを一瞥すると、彼はクツと顔をあげ笑った。

「気にせんでください。それより出勤ではないのですかい？」
時計を見ると自然と目が大きくなった。店内に三十分近く居たらしい。急いで車に戻ると、店に向かって謝りながら発進した。

暑い。

今年の夏は例年より陽光が強く突き刺さる。もしくは妻がシャツを間違えたか。

軋む音が鳴る椅子にもたれ、和人世はため息をついた。大急ぎできたおかげで遅刻はしなかったが、熱を持った体が不愉快だった。

「コーヒーが飲みたい」

いつも通り独り言で流されると思った矢先、コーヒーカップが目の前に現れた。

丁度いい加減に氷がとけている。差し出された手をたどると新任の女性だった。

「あ、ありがとうございます」

カップを受け取るが彼女は動かない。仕方なくコーヒーを飲み干す。

会社のを飲むのはこれが初めてだと気がついた。

味はまあまあだが香りは上に入る。女性が小さく笑う。

「こんな暑い日には目が見えなくなればいいのに」

何か耳に残るセリフを置いて彼女は去った。

彼女の笑みを思い返すと妻が浮かんだ。

彼女のそれとは異なり、素朴な笑み。

何かと記念日にこだわる妻は「一年で十四記念日作るの」と叫んだ。

普通なら記念日ごとに歳月を感じるので嫌にならないだろうか、と考えたものだ。お互い三十五に差し掛かる。

バレンタインとその対極、クリスマスしか思いつかない私に

「告白記念日は？ 婚約記念日は？ 初キスの日だって。妊娠記念さえ出なかったわね、そうよ結婚記念日は？ ねえもつと思いつ

くでしょう」

正直ついでいけなかった。ただそんな彼女がとても愛しかったのは覚えている。

初めて見せた素顔のように純粹な言葉だった。

その後私の出した新年初日と誕生日が加わった。

結局残りの三つは知らない。妻いわく『その日』に教えてくれるそうだ。

用意はできないが。

軽い満腹感を感じながら背の窓を眺める。

磨かれたガラスは夏の日光を全く弱めはしない。むしろ強めてい
るだろう。冷房では太刀打ちできない。

太陽を目で追っていると笑みがこぼれた。確かにこんな日には目
が見えなくなればいいかもな。そしたら少しは涼しくなるんじゃない
か。

机に戻り書類をにらみつける。

日の残した青い光でよく見えないが、残業確定だろう。

その中の一枚を手に取りゆっくりと頭を働かせる。

妻は怒るだろうな。

そうだ、ケーキでも買って帰るかな。

最近一緒に食べてないしな。

向かい合って話すのも悪くないな。

一つ予定を決めると後の作業は早く感じられるものだ。

半時間ほど早く終わった書類を見直し、肩を回すと音が鳴った。

あまり音を鳴らしすぎると全身マヒに繋がるんだっただか、最近見
たテレビの情報に寒気を覚えつつ肩を優しく押さえる。

同じ部の社員もまともに向けて作業を切り上げていた。若手が汗
をにじませ、何度も仕事をチェックし恐る恐る端を整える。年配の
方々は鋭い眼で書類をさっと読み返す。この風景が和人は好きだ

った。

何人か中の良い同期は、和人世の視線に気が付いて手を挙げて見せた。それに応える自分の顔が笑っているのは気持ちが良い。

同じく仕事を終えたらしい彼女に声を掛けた。

「比坂さん、お勧めの洋菓子店はないか」

今朝の洋菓子店を思い出しながら、返事を待つ。先ほどの女性が机の前に帰ってくる。

歩く度に揺れるスカートから、慌てて目をそらすと同時に声が聞こえた。

年齢を惑わせる、不思議な響きが込められた声。

「良い店を知っております」

彼女の髪からは淡いラベンダーの香りがした。

チャプター3 青年は・・・

目を開けるとカメラがオレを捕えていた。

そうだ、昨日は仕事から帰って外さないまま寝てしまったんだ。携帯を見てアラームに裏切られたことを知る。床についた手がジワリと湿っていた。

「暑い。三八度とかマジねえ」

チエックのシャツを脱ぎ捨て『ユウゴ』のTシャツを被る。一瞬の蒼の世界の後、天井が見下ろす日常へ顔を出す。

まだ日の目を見ないこのブランドはオレの好みにはまっている。自分の名の圭護と少し響きが似ているのも誇らしい。

パンの袋をつかみ取りカメラ用のバックを肩にかける。家具より多いコンビニの袋を足で脇に寄せながら、思考力の目覚めない頭を掻いた。

視線を投げかけてくるアズを無視して、玄関へと向かう。

目を軽く押さえ眠気を追い払っていると、アズが腕の間から顔を出した。

「太ったな、のろま猫」

地の底から絞り出したような声で鳴き、アズは肩へよじ登った。

「悪かった、オレが悪かった。だから髪はくわえんな」

濃いブラウンの体と黒い縞模様のこの獣は、未だ主人を理解していない。

1DKの部屋はこいつの世界へと化している。

何度表面を片付けようと染み付いたものは変わらない。毛が散らかっているとかではない。

部屋中からアズの気配がする。猫ってこんなすごい動物か。

やっと降りたアズが出ないようにドアを開ける。

正午の空気はむせかえるほど湿っていた。それでも大きく息を吸う。

「じゃあな、アズ」

一声聞こえた気がした。

今日の相手はケーキ屋らしい。相棒の拓と裕也からは連絡が入っていない。

(情報なしってことか、そりゃいい)

高校卒業して、進路をすべて無視し三人で始めた記者まがいのこの仕事は、すっかり板についた。

すべてのバイト代をつぎ込み買ったカメラを片手に、この二年調査をしてきた。

もちろんスポンサーはいる。拓の父親だ。

どこかの雑誌のトップという彼はオレらの為に一ページも提供してくれただ。

ここまでなら涙ものだが、週一ネタを探すのは容易じゃない。それにそろそろ仕事で上へあがりたいところだ。

いつまでもコネを使ってるんじゃない。

『オーク』と名付けたマウンテンバイクにまたがり、駐車場の一角を蹴飛ばす。

名前通り力強い自転車が、足のリズムより早く街を駆ける。

口笛を吹きながら走っていると目的の場所が見えてきた。

アパートの八丁目から十一丁目まで一時間もかからない。難点と言えば、高い建物の無い所為で影の恩恵を授けられないことだろうな。変な名前の看板が見え、『オーク』を止める。煙を立てながら地面に新たな黒い跡を刻んだ。

白を主とした外観で欧米風だ。一枚フィルムに焼きつけチェックする。しっかり看板も入れて、周りの花壇を暈し、店を際立たせた。「洒落てるって言うか」

目の前でガラスのドアが開き、愛想のよい男の声がした。

「いらっしやいませ」

少なくとも三百円は財布から消えてもらわなければならないだろう。

店長の雰囲気からして「冷やかし」は不可能だからな。

なるべく呼吸を浅くする。肺まで侵されないように。勿論ケーキ屋の中でそれは不可能に近い。

バナラとイチゴと、後はよくわからない甘いにおいが次々とオレの努力を無にする。

何気なくショーケースを眺めながら、拓と裕也が好きなモンブランを探す。

「すみませんね、さっき売り切れてしまったんですよ」

オレは何も言っていない。しかし店長はオレを見ている。他に客もいるのにオレを見ている。

「は、ああ、どうも」

（笑顔作るだけでも嫌なのに、なんで赤の他人に笑わなきゃいけない。）

とにかくモンブランがないなら仕方ない、チーズケーキに狙いを変えた。

財布を見ながら、「カaramelチーズケーキ」を選ぶ。質よりも値段が大切だ。一つ一九〇円は偉大だ。

注文しても値段は告げられなかった。舌打ちを我慢し暗算で小銭を出す。

（アンケートがあれば、即効苦情を書くんだけどな）

「すみませんね、うちはそういうの置いてないんで」

独り言体質の自覚はないんだが。なんでオレを見てんだ。他に客もいるのに何でオレを見てんだ。

男は何も気にせぬように笑っている。見方を変えれば見下しているようにも思える。捻くれた捉え方の好きな自分は勝手に気分を損ねた。

では、考え方をもつと変えてみればどうなるだろうか。

(こいつがエスパーってことも…狂ったかオレは)

「はは、何のことです」

なんとなく返事は聞きたくなくて、急いで外へ出る。逃げているようにさらに苛立つ。

下げた袋から漂う香りが胃を刺激した。

(だから嫌なんだよ、ケーキとか。バニラの香りとか。)

飛ばそうと考えながら、オークに跨った。忠実なオレの足は、何も言わずに主人に従った。

ドアを見つめて男はつぶやく。

「わかるんですよ、私はね」

陽炎の中に青年が消えてからも、その声は夏の太陽の下漂い続けた。

チャプター4 少年は・・・

ため息をついて鉛筆をノートに転がした。

くだらない、何でこんな授業を受けなくちゃならないんだ。

小学校など世間から見れば困われた世界でしかない。行事のたびに生徒を巻き込む熱い先生などうっとおしいだけ。

黒板に並んだ文字が将来役に立つとは思えない。

「先生、昨日母が倒れて早く帰るよう言われているんですが」

担任は国語の教科書を持ったまま振り返る。全く動じずに笑顔だった。すらっとした彼は、妙に灰色の背広を着こなしている。

「そういうことは家から連絡が来るものです。授業がつまらなくても、そんな嘘は酷いですよ。誠矢君」

こういう人間って本当に腹が立つ。何でもわかっている顔をしている。

そう言えばぼろが出ると思っている。勘違いもいい加減にしてくれ。

「先生、母は倒れたんですよ。その母が苦しみながら電話してくるのを待たなくちゃいけないんですか」

クラスの目線などどうでもいい。かばんに荷物を積みドアに手を掛ける。白い金属が軋みながら空間を開けた。

「先生はね、君が心を開いてそういう嘘を言わなくなる日を待っていますよ」

(やめて欲しい)

担任の言葉が残ったまま学校から出た。本当に後味の悪さだけは褒めたくなるほどだ。

正午近いこの時間は人通りが少ない。まして学生がいるわけが

ない。

そう、こういう時に限って声をかけてくる人がいる。間の悪い人間と言うものだ。

「あら、誠矢ちゃん。学校どうしたんの」

掛けられる言葉がわかっていれば、答えるのは造作ない。笑顔を作るのも慣れた。

「母から連絡があつて、僕もよくわかんないんです」

美容院帰りの整った髪をなでながら、見覚えのない女は言う。あまり健康を感じない体は細く、顔は上下さかさまの二等辺三角形と言ったところだ。高い鼻からして、気は強い。

「ああら、そう。後で尋ねてみようかしら」

勝手にしていいよ、くだらない好奇心。

大体十歳だからって男に「ちゃん」はないと思う。「栗野」と呼んで欲しい。

名字のほうが入っている。

(さて、家に帰るわけにもいかない。散歩するかな。)

顎に手を当てる女を置いて、足早に歩き出す。見知らぬ女性を置いていったからと言って文句をつけられるいわれはない。

誠矢の趣味は人間観察である。歩き回りながら通行人を目で追う。

本人いわく、学校の授業よりも為になるらしい。

大体にして、これからの社会は人との間の駆け引きが重要となってくる、ならば相手を見抜くことができなくてどうするのだ、後付けだが彼の意見である。

特に最近「変化」が多くみられる。昨日と同じ人物が「らしくない」行動をしたり、だ。

もちろん、気にかけることもないことだろう。だが彼は変わっている。

どんな小さなことでも原因がわかるまで耐えられないのだ。だから

ら追いかける。

ヒトの不思議な行動の真実を知るために、すべてを観察したいのだ。そうすれば、過去の不可解な事件も理解できる気がするから。誠矢には父がいない。その理由を彼は知らない、いや、理解ができない。

毎週水曜に通う洋菓子店が、中でも「変化」に富んでいる。

それが見たくて通っているのだ、学校を抜け出しても。

ランドセルは通りの公園に投げ捨てた。葉が揺れる音が耳を通り過ぎる。

(なくなっただっていい)

教科書など、限られた期間しか使わぬものほど不要なものはない。誠矢は迷いなく目的地へ歩を進めた。

店につくと一人の男が出てきた。背が高いのが目立つ。見たことのないデザインのTシャツが、体系に似合っている。

神経質そうに歩き、手に持つ袋が気に入らなそうだ。髪は光を良く反射する漆黒で、肌はあまり焼けていない。年齢は二十前後だろう。手足が長く歩幅も大きい。

装飾品は皆無、付き合っている人はいない。ポケットに手を入れる癖がある、それも左手を。

一度だけ店を振り返り、マウンテンバイクへ向かった。観察は終了。

また見たい男だと思った。こう思う人物はあまりいない。

店内ではまた変化が起こっているだろうか。気持ち先動き出す。

風鈴の音と共に甘い香りが体に広がる。甘いものは好きではないが、この感覚は気に入っていた。

まるで、日常なんて遠のくような夢の香り、非現実の香り、架空の世界の香り。日々のつまらなさが消えてゆく。

店内に客は四人。一人はメガネをかけた中年で、髪を黒く染めて

いる女性と来たらしい。女性の方は気の毒に、濃い化粧が逆に年齢を浮きだたせている。五七、八と言ったところか。

健康に異常はなし。しかし足元が安定しない。迷う時に右手の甲を口に当てる、優柔不断。男の方は彼女を気遣いつつも、足をリズム良く床にぶつけているところをみると億劫らしい。

少女が二人。四歳と五歳。大方園が休みで来たのだろう。財布を懸命に睨みつつもお金が足りていないのは明らか。姉らしい一人は店内を見回すが、妹は帰るよう腕を引いている。

二人とも偏食で、腕が異様に青白い。背は低く、最近怪我をしていないきれいな肌。

こんな客達に興味はない。

あるのは彼らが辿る運命。

さて、今日はどんな変化を見せてくれるだろう。

チャプター5 予兆

東京の中では小さな部類に入るであろう瑠衣の会社はレンガの七階建て。

雰囲気を選んだといってもいい程、瑠衣は気に入っている。ヒールを鳴らしドアを開ける。

電子音とともに広がるドアを抜けると我が家に帰宅したような安心感が広がった。

自然に歌を口ずさみエレベーターに入ると、最も会いたくない人物が脇に立った。

「ああら、またケーキなの。芸がないわあ」

気味の悪い赤い唇から澄んだ声が発せられる。つんとあげた顎の上から見下ろしてくる。

松園由良、気に食わない女、心の中で瑠衣は毒づく。

「こだわりですので、あなたと違い。そちらこそ企画は？」

今回の夏はキャンペーンをするらしい。

「宣伝」の為に人気の出そうな商品を探している。

「一台買ったら付いてくる」というキャッチフレーズでもつけるのだろう。

よくわからないが。

「誰かさんと違ってもう企画は完成してるの」

手を振りながら、丁度止まったエレベーターを彼女は降りて行った。ブラウンの艶やかな髪が背中で揺れている。

今回のキャンペーンは彼女との一騎討ちとなるだろう、瑠衣は肩を怒らせた。毎回そうなのだが、冷静な心の声が聞こえる。

彼女の背中を扉が消した瞬間、思いつく限りの悪態を吐く。

ついでに肺の中の空気をすべて追い出すと、袋を口元に拳げ息を吸った。

バニラと栗の香りが松園の香水を打ち消した。

見慣れた部署に着くと、一つの机を目指し瑠衣は歩く。

「片桐瑠衣、嬉しいのはわかったからそれ置け」

突き出していた袋を下ろしケーキを広げた。甘い香りが空気を彩る。

部長は絡まりの無い前髪を掻き上げ、今まで見ていた書類を脇へ寄せた。

「夏はこのモンブランですよ、絶対宣伝になります」

菓子的事になると瑠衣は信じられないほど熱くなる。

それが勢いとなってか入社半年である松園と肩を並べたのだ。会社内では有名だ。

福原も彼女の企画を後押ししている一人である。

「食べて感想言うから、書類まとめてこい」

自分が感想を言う立場も彼は悪く思っていない。そんな福原へ、彼女は席へ戻る代わりに一枚のメモを取り出した。

「九百八十円です、ありがとうございます」

「たまには自分で払ったらどうだ、給料すべて菓子につき込みやがって」

「では」

「聞けオマエ」

自分の席に戻りつつ、瑠衣は笑みが広がるのを感じていた。

あれほど反応の良い人は部長くらいだろう。あまり質の良くない椅子に腰を下ろす。

机の上の書類は朝の半分になっていた。隣の女性が顎で部長を示す。

福原は本当に気が利く男だと瑠衣は思っている。

キーボードに指を滑らせて、ケーキでチャラになるか考えた。

神経質な顔立ちをしているが、案外性格は抜けている部長は女子

社員に人気がある。こだわりのネクタイのセンスは、毒のある女性達の笑い種だ。

持ち物は人を表すというのが瑠衣の場合は人を混乱させる。

外国のキーホルダーに各地の限定のペン、写真の山。その上にバツクが乗せられた。

半分となった仕事に気が軽くなる。マウスの音が可愛く聞こえた。企画の書類が仕上がり、頭を机に預けると不思議な視界となった。厚く重いパソコンが並んでいる。隣の紗枝さんのイヤリングが見える。机の振動を感じていると足音が近づいてきた。

「堂々とサボってるな、片桐瑠衣」

部長を眼だけで見上げる。改めて整った顔だと思った。

あと五歳若ければ恋に落ちたのかもしれない。にやりと上がる唇の端を無理やり押さえつけた。

「サボりの後は上司無視か。ちよつと来い」

「私は休んでるんです」

突然腕を引つ張られて部署を横切る。廊下に出てから瑠衣は口を開いた。

「セクハラですよ福原部長、奥さんとなる人だけにしないと」

「黙れ」

販売機の前に着くと腕が解放された。瑠衣は腕を軽くさする。

部長は小銭を探していて存在を忘れられている気がした。それが気に食わず、瑠衣はコインが入ると同時に飛び込んでミルクコーヒーを押した。

瑠衣のベージュのスカートが黒いズボンを通り過ぎる。

落下音が沈黙を破った。部長は予期していなかった動きに反応が鈍ったようだ。

「このくらいはおごって下さいよ、休みにつきあつたんですから」
瑠衣は既に冷たい缶コーヒーを両手で包みこんでいた。

「片桐、お前って…いや、いい」

「ごちです」

「どもです」

部長がブラックを買い沈黙が下りてきた。何故かホットのコーヒ―に部長は顔を赤くしている。ただ自販機の不気味な音だけが辺りを支配する。

「どうでした、ケーキ」

両手で持った缶を見ながら瑠衣は尋ねた。一瞬間が空く。

「美味かった」

暑さが蘇る。缶を傾け一気に飲み干すと、喉が浄化されていく気がした。火照る体はまだ足りないと言わんばかりに、清涼飲料水を求める。

「なんで私を連れてきたんですか」

「あのまま空調の中にいると眠ってしまいそうだったからな」

「…そですか」

「…そうです」

さつきと違う居心地の良い沈黙に包まれる。言葉を発さずに二人は缶を捨てた。部長の後ろから投げた瑠衣の缶は、奇跡的にも小さな穴に吸いこまれた。

部長の隣を歩きながら、瑠衣は眼を閉じる。

（ああそうか、風邪をひいたのだ。熱があるのだから。目眩がするの。部長も風邪なのだ。だから…納得した）

チャプター6 男は・・

物思いにふけっていると小さな子を連れた女性が入ってきた。店内に風がそよぐ。

男は身を起こしカウンターの中で、笑顔を作る。

五歳ほどの女の子は目の前のケーキに顔をほころばせた。店内のすべてに心が奪われはしゃいでいる。母親の女性が軽く会釈した。

「あの、モンブランありますか」

男は笑みが漏れたのを悟らせまいとする。

照明を暗くした隠れ家のような店で、彼女の声はよく通っていた。女の子は母の腕を引き、訴えている。

「モンブランないのぉ、ねえモンブラン」

男は客を帰したくなかった。口調を柔らかく心がける。

「さつき売り切れたのですが、後十分ほどで午後の分ができますよ」

女性は考え込むように立ち尽くしている。

数分過ぎて親子は店に留まる方を選んだ。甘い香りが二人を包んでいる。

「あつこのケーキかわいいよ。ママほら、アーモンドクリームつて。みーちゃんねえ、クリームたーっぷりが好きなの、ママ知ってたあ？」

小さな店内とはいえ、子供にとっては夢の国のようなものだ。

女性は子供を静かにさせようとするが、内心楽しそうだ。

ふと奥にいる少年が目に入る。少年は中央のテーブルの脇に立っていた。

今は正午であることを女性は確認する。なぜ学校のある時間に少年がいるのだろう。

灰色のTシャツと茶色の短パンをはいている、ごく普通の男の子である。

男も気になっていたのだが、十歳そこらの子供を訝しがっても仕方ない。

いや、違和感があった。

視線を感じる。見られている。

子供と思えぬ静かな両目が自分を捉えている。

気付かれたのか、そんなはずはないだろう。考えすぎだ。

男は汗をぬぐった。仕事の汗が異なる意味の汗か判断はつかない。

もう一人の従業員である女性がモンブランを運んできた。新任の割に要領がよい。

男は一人の職場が気に入っているが、人気が出てきた店の為募集を出し迷いなく彼女に決めた。

彼女の周りを取り巻く空気と、冷静な性格が際立っていたのだ。

白い従業員服が厨房で映えている。その長い黒髪がまた似合っていた。

彼女が近付くとラベンダーの香りと栗の匂いが混ざり合い、不思議な空気を生み出した。

ケーキはショーケースに並び、出来立ての艶やかさを魅せつける。男の自慢の作品だ。

「お待たせいたしました」

子供が歓声を上げ、母を見上げる。親子は早速注文し出て行った。出口で嬉しそうに話す二人の横顔が視界の隅に入った。

この瞬間が男の楽しみである。

もちろん単純な意味ではない。この後の事を考えて男は快感に浸っているのだ。

気がつけば二人を追うようにして、少年も出て行ってしまっていた。

鋭い眼が脳によみがえる。

何も買わなかった。何も言わなかった。

ただ観察していただけだった。

厨房へ戻り、冷蔵庫の側、壁に張られた誓いを前に目を閉じる。

血液の流れが遅くなるのを感じ、ドアの向こうの風の音を聞いた。

ファンが空気を裂く鋭い音を聞き分けた。

深呼吸をひとつして、男は眼を開ける。体は自然にカウンターへ戻る。

「気付かれはしない」

つぶやく男はドアを見ていた。

チャプター7 開始

待ち合わせ場所を間違えたことはない。待たされるのも、時間を間違えて気まずくなるのも想像だけでたくさんだから、オレはそこところはかなり慎重だ。

だからこそ、今丸いテーブルに一人で座っているこの現状に血管が浮き上がる。

四つの椅子のうち一つにはケーキがその座を占めている。

対角線に置きはしたが、その存在自体気に食わない。

ケーキ好きの人間は何が嬉しくてあんなものを食べるんだ。

これから尻尾を振って食べるであろう、好青年に訊いてみるか。くだらない時間つぶしの考えごとの後、ようやく待ち人来たり。

「遅え」

「悪い、悪い。拓が寝坊してて」

「人の所為にすんなよ、二時間も遅れたくせに」

来た早々言い合う二人に内心圭護は安心していった。自分の寝坊がばれなかったから。

このまま二人を眺めていたかったが人気のない店内、かなり目立つ。

「なあ、お前ら。待ってたのは誰だ」

一言で充分だった。二人は言葉を飲み込み込み口の端を少しだけ上げた。

喫茶店内では去年人気になった曲が流れている。

落ちて着いたのを確認してオレは一枚の写真を取り出す。あの店の写真だ。

「情報が何故か来なかったんで、写真とケーキだけだぜ」

すでにケーキに手を出していた拓は軽快に話した。裕也は黙って

顔を扇いでいる。店員が、通る時にケーキを睨んだが何も言わなかった。

持ち込みぐらいで騒いだところで、さらに陰湿な騒ぎが引き起こされるのは面倒だろう。

「まさか圭護がこんなに早く動くと思わなかったんだ。それに情報もあんまりない。一度集まっただけから話そうと思っただけだよ」

長い割に意味のない言葉だ。だがこれが拓らしい。

「いいから話せよ」

写真に指を置き拓は真剣な顔をする。そうはみえないが。

「この店ラトルでは怪奇現象が起こるんだ」

三回は瞬きしたと思う。

「は？」

店内の客はいつの間にかオレらだけになっていった。なおさら目立つ持ち込みのケーキを拓は幸せそうに突きながら、話を続ける。

「信じられないけど、この店のケーキを食べると人生が変わるんだ。変な言い方だけど、金持ちが失敗したり平凡な人がテレビに出るようになったり。その変化の背景に共通したなにかが存在するらしい。なんか面白そうじゃない？」

「拓、圭護聞いてねえよ」

もちろんオレは聞いていなかった。と云うより一言目で充分だった。

人生が変わる。

凄い言葉だろ。やっと上へあがるチャンスが到来したってことか。頭はすでに記事の配置で埋め尽くされていた。オレは聞いてから書くんじゃない。

書いてから確認するんだ。変わってるだろ。

裕也と拓はただ見守るしかなかった。瞑想に近い状態の圭護に何を言っても無駄だ。

右手をかすかに動かし頭の中で設計していく彼を二人は尊敬して

いる。

拓が飲み終えたメロンソーダのストローで遊び始めた頃、圭護は元に戻った。

「出るぞ」

二人の顔も見ずに圭護はレジへ向かう。

「二八〇円になります」

拓のメロンソーダと店のものでないケーキで二十分居すわったのが気に食わないように、店員はそっけなく言う。目を合わそうともしない。

圭護は気にも留めず、五百円玉を置き外へ出た。店員が呼び止めたことさえ耳に入らなかった。

置き去りにされた二人が追い付く。

「お釣りっ」

「やる」

走ってきた拓をはねつけオークへ足を運ぶ。駐輪場に目を向けながら完成した記事をオレは見ていた。

見出しは中央に大きくその周りに円を描くように文が並ぶ。一番好きな配置だ。

まだ情報が足りないが、オレはこの記事が大きな一歩になると予測していた。プロに入るための。

「明日は三人でその店行こうぜ」

裕也の言葉で現実に戻った。黒で統一した服は夏の光を吸収し裕也の発汗を促している。

その汗が美しく見えるのは裕也の整った顔とスタイルの影響だろう。

悔しいがオレの目標でもある人物。

「圭護一人で行っても三人にはかなわないって」

拓は子供のように素直な言葉で言った。

白いTシャツとジーンズというシンプルさが拓をよく表している。

ガキっぽ、とは言わないでおこう。

深緑のカメラバッグをかごに入れる。思い出して二人に尋ねてみた。

「チーズケーキどうだった」

「すげえよ」

「うまかったあ」

同時に言ったがこんなところだろ。何か引つかかる。

「なあ、信じてねーけどそのケーキ食べたなら人生変わるんだろ、お前らいいの？」

二人はそれぞれリアクションしてくれた。

「確かにな、まあそしたら俺らが記事になんだろ。死んでもネタになるなら本望」

「えええ、やばいじゃん。おれ死ぬよりテレビに出ちゃうかも」

一瞬の心配は無駄だったようだ。

「言つとくが二度と甘いもんには金はださねーからな」
ペダルに足をかけてオレは笑った。

拓は小学生顔負けの純粋さからこう言ってくれた。

「キーが入ってないけど、圭護」

チャプター8 夏の夜

すっかり遅くなってしまった。

昼の陽光が温めた街は不快な湿気を帯びている。

道の脇に浮かぶ看板以外は闇に沈んでいる。

十一丁目の飲食店街に差し掛かったところで和人世は足をとめた。この辺は通勤で毎日通る。

「比坂が言っていたのはやはりあれか」

三件ほど奥に小さな洋菓子店が浮かび上がって見えた。夜であるため、今朝とは印象が違うが確かに今朝の店であった。罪悪感が蘇る。

軽く金属音を鳴らして時計を見ると八時を回っていた。

「和人世、これは多少危険だぞ」

和人世は夏の夜に寒気を覚えた。妻は時間に何よりも厳しい。

記念日を気にするのと関係があるのかもしれないが、あの剣幕には耐えられない。結婚当時は帰りが八時を過ぎただけで、食器の半分を投げつけてきたのだ。

「浮気でしょう!？」

あのつんざく一言が忘れられない。総額は二万だっただろうか、すべて弁償したのだった。薄給だった自分には身を切る思いだった。あれ以来、会社で昇級するたび変わる勤務時間に意識を集中させている。持っただけでも携帯を使わぬ和人世は、とにかく早く帰っている。

速足で店に立ち寄ると、奇妙な看板が明らかになった。名前は知らなかった。

「ラトル一步先…？ 不思議な名前だな」

一瞬躊躇ったが妻の顔を思い出し脚を動かした。

入店してケーキ屋に来るのは今朝を除き、随分久しぶりだと気がついた。

店内は妙な湿度を保っている。人気なのであろう、ケーキは数えるほどこしか残っていないかった。

中央にテールがあるのは珍しい。何も置かれていないのは自分の所為だろうか。

「昼に倒れてしまいましたね、ケーキが一台のつてたんだが」

顔を上げると頭をかいて話す男が立っていた。顔が赤くならぬうちに和人世は口を動かす。

「あ、あの今朝は申し訳ありません。大丈夫でしたか？」

「ああ、あんたでしたかい。なあに、私の気まぐれで作ったものでね。気にせんでください」

ホツとするのもどうかと思うが、和人世は胸をなでおろした。しかし、気まぐれで作るとはどんなケーキなのだろうか。

「何かお求めのケーキはありますか」

「はい？ あ、ええと」

妻が好きなケーキの名前が出てこない。比坂に店を覚えてもらってから、頑張つて思い出したはずなのだが。

「あと五分で閉店ですし何でも作りますよ」

矛盾という言葉が浮かんだ。中学に習ったと思う。何となく居づらくなり急いで注文する。

「モンブランを二つください、そのショーケースの」

値段が告げられなかったが、常に店員が伝えるより早く代金を出す和人世にとっては、気にならなかった。

きっかりお釣りなく小銭を支払う。

店長の顔がほころんだ。手際良くケーキを二つ包むとこちらを向いた。

「私の一番のお勧めです」

「妻と二人で楽しみます」

店長の視線が寒気を呼び起こし汗が流れる。

初めからおかしかったが、今すぐ店から出たくなる。足はまるで急かすように震え始めた。

袋をつかみ外へ向かおうとした途端、胸に激痛が走った。

息が荒くなる。体が前に曲がる。床が目の前に広がる。茶色い床が近づくとつれ黒くなる。

「どうしました」

軽く深呼吸をするとおさまってきた。背広の袖で汗を拭きとると、普段のように体が機能し始めた。

「大丈夫ですよ、仕事の疲れでね」

ふらつく足を操り街へ出た。後ろに感じた視線は気の所為だと思ふことにした。

ふと夜空を見上げると赤い星が目に入った。どちらかと言えば都会のこの地域では、これほど星が見えるのは珍しい。

近くに工場がないおかげであろうか。

「そっか、さそり座の時期だったな」

赤く光る星に照らされながら、十一丁目の街を和人世は歩いた。

お気に入りの靴が煉瓦の地面を楽器に帰る。

リズムよい音の連続に、ゆるんだ笑顔が生まれる。

下げた袋からいい香りがする。何故さつきはあんなに苦しかったのだろうか。

虫の予感と云うものだろう。何かが起こる気がする。

ふいに祖母が言っていたことが思い出された。

「サソリの時期にあんたはよく、いろんなことに勘強かったよ。

いいかい、その時期には自分を信じなさい。災厄も防いでくれるさ」
歯切れのよい低い声が耳元で響く。あれは確か死が近いときのことだった。小さいころに両親を亡くした和人世にとって、祖母は人生を教えてくれる唯一の存在であり、優しい母であった。

祖母のことを思い出すほどだから、ますますこれは何かが起こる

前触れである気がした。

愛車の前に戻り、慣れた手つきで鍵を開け、クッションに身を任せた。エンジン音が夜の真ん中に鳴り響く。

時刻は九時。

このモンブランは何分間の罵声を和らげてくれるだろうか。

そもそも妻の眼にこれが入るのは何分後であろうか。

優しく箱を抱き、ただ妻のことを考え目を閉じた。そして、助手席にそつと置くと、レバーを引き車体をうならせる。

ここからなら家までは三〇分とかからない筈だ。

一度自分を揺らした車は、暖かい家へと運び始めた。

チャプター9 小発見

昼に観察した親子がテレビに出ていた。

誠矢はリモコンで音を大きくする。階下まで聞こえない程度に。部屋に自分用のテレビがあるのではない。

家に一つしかないテレビは、母が見ないため置き場所が誠矢の部屋となったのだ。

それは、あの明るい二人からは想像できないニュースであった。

「汚職」「倒産」の文字が画面を埋めている。

母のほうが会社で法を犯したらしい。なかなかの重罪に当てはまる。

モンブランを楽しそうに見ていたあの女性が本当は悪だったらしい。女は暗い表情をしているが、その裏に読み取れない感情を秘めて見える。

何かがしっくり来ない。何だ、この不快感は。

誠矢は様々な人間を見てきた。その人生の変化も見てきた。

人間が一生の中でどれほど多くのことを経験するのか感じてきた。それによつてどれほど馬鹿な過ちを犯すかも見てきた。だから、大概の事では驚かないつもりだった。

だが、いまは納得ができない。さらに、納得ができないものは納得するまで許せない。

「あのケーキ店……」

口から自然に言葉が漏れる。

あのケーキ店が何だ、何をいま思いついたんだ。自分の思考すら獲物の如く誠矢は追いつめる。

パソコンを開きキーボードを弾いた。自分でもわからないほど速く。

『ラトル 洋菓子店』

検索にはこの文字が現れた。何故だかわからないが無意識に出た文字。

これだけでは邪魔な情報が多すぎる。珍しい言葉ではあるが、千件近くヒットした。

だが普段から機械を駆使する誠矢にとって、後は容易だった。

この辺の地域情報から潰し歩き答えを求める。検索の間あの親子の笑顔が頭から離れなかった。

夏とは言え太陽が沈むと涼しくなる。しかし、誠也のTシャツは汗で湿ってきていた。

キーボードは絶え間なく音を鳴らし続ける。久々に感じる強い知識欲に誠矢は夢中だった。

この空間は自分だけのものだ。この時間は独壇場だ。

嬉々とした眼で画面を捕え、サイトを飛び回る姿は、傍から見れば遊びながら獲物を食い散らす肉食動物さながらだった。

二十分後誠矢は激情のままキーボードを投げた。コードがブチブチと音を立てて外れる。

隙のない強固な城は何処からも入ることができなかったのだ。

そう、情報がない。鍵穴すら埋められている。何故だった二十分で判断できたか、誠矢はそれほど速く千件を確認したからだ。勿論関係の無いものに時間はとったりしていない。

まずは思考の整理から始めよう。

何故コンワードを検索し始めたのだったか。

あの親子を見たのはあのケーキ店だけだったから。

何故あのケーキ店に疑問が湧いたのか。

「誠矢ー、何してるの」

物音に気付いた母が上がってくる。のどの渴きを感じる。だが、何も口にされたくない。入れてしまえば集中力が落ちるのは目に見えている。水が体にいいなんて嘘だと誠矢は日ごろから信じている。

時刻は九時過ぎているから親としての心配は当たり前だ。自分が小学生であることを十分ではなくとも少なからず自覚はしている。だが中断するとしても原因が母なのは許せない。

「何でもない、下行って」

顔がのぞく前に言い放ちドアを閉めた。母の顔は心配そうであったが瞬時に記憶から消した。淋しげな足音が階下に消えてゆくのも、意識から追い出した。

振り返るとパソコンの画面は何も言わずにただ光っていた。横のマウスは照らされて陰影を深めている。

ふとあたりを見るとずいぶん散らかっていることに気がつく。

母を入れてない所為だ。いまはどうでもいい。インターネットに部屋は関係ない。あるのは頭脳と両手だけだ。

べたつく床を蹴飛ばしキーボードを拾う。ベッドに飛ばしたから無傷に近い。

これを投げたのは、生まれてから四回目だ。一度目は何度変換しても「チェコ」が漢字にならなかった時だ。丁度学校で外国の名は漢字に変換されていると、本当かどうか今も判らないことを聞いたせいだ。

(二度目は、父が：くだらないことを考えてしまった)

短気なことは確認済みなのだから、こんなことを考えても仕方がない。

キーボードを置き座り込むと、誠矢は冷たい声を発した。

「再開」

真夜中に近づく暗い世界で誠矢はコンピュータと向かい合う。確か六歳の頃からの馴染みの相手だ。機能は熟知しているし、コンピュータも期待に応えてくれる。今までは応えてきた。

第二ラウンドは得意のステージに決めた。

そもそも、簡単なキーワードで出るような相手ではないと予感していたはずだ。だからこそ、滲み出る期待にこの身を抑えきれなかったのではなかったか。

久しぶりにやりがいのある遊び道具が手に入ったようだ。

外は暗闇、風は南、街はまだ眠ることを考えず、人々の思考は鈍り始めたことを知らない。

五畳半の小さな部屋にキーボードを叩く音だけが響いた。

チャプター10 夜が唸る

仕事が終わって入った喫茶店は閉店間近だった。

迷惑だったかと怖気づいたが、開いている時点で客は歓迎なのだと言い聞かせた。

瑠衣は奥の席に腰をおろしバッグを椅子に掛ける。

若いウェイターにコーヒーを注文すると、頬杖をつき目を閉じた。心が落ち着く。

部長とはあの後話することができなかった。風邪だったから仕方ない。

店内に流れる音楽は何か懐かしかった。

去年のヒット曲だと気がついたとき、コーヒーが届けられた。静かに置いたその動作が妙に美しく思えた。ウェイターを見上げてふとケーキを注文しようかと迷ったが、宙で止まった手を下ろす。

「美味かった」

部長が言ったそのケーキしか食べられない気がした。

携帯が震える。机に振動し、ウェイターが視線を送ってくる。申し訳なさを込めて目配せをし、手を伸ばした。

開くと紗枝さんからだだった。隣の席の憧れの人だ。メールボックスを素早く開く。

「夫が帰ってこないの」

「今日何かあるんですか？」

短く返すとすぐに返信が来た。紗枝さんは知人の中でも返信の速度はば抜けて早い。

「大切な日なの。でもまだ十時にもなっていないものね。彼氏のいないあなたにはのろけに近かったわ、御免なさい」

紗枝さんの夫婦仲の良さはよく知っている。羨ましいほど素直す

ぎるメールも見慣れたものだ。

携帯を閉じると部長の顔が浮かんだ。「彼氏」の文字が重なる。紗枝さんは何時出会ったのだろう、ふと疑問がわき出てきた。いつ出会い、いつ恋に落ち、いつ結婚を決意したのだろう。

一度だけその話を聞いた覚えがある。幸せな顔で熱を持って話す紗枝さんが思い出される。

「彼と会ったのはね、学生時代だったの。初めて見たのは、バイト先に向かう駅だったかしら。一目ぼれだったわ。でも、もう二度と会う訳ないって諦めたのよ。そしたら、もう一度出会うチャンスがあったの。それだけで本気になった」

長い話だったから後半はあまり覚えていない。

それでも、きらきらとしてとても鮮やかな日々の連続であったことは間違いないのだろう。

それがすごく羨ましいのだ。

コーヒーは人肌程度になっていたが、瑠衣は気に出ず飲み干した。

空いた両手が勝手に携帯をもてあそぶ。ストラップの小さな音がリズム良く鳴る。

喫茶店の空気は何処とも異なっていて、人を静かにさせる効果がある。

その中で熱が上がってくるのは、自分だけではないかと瑠衣は思った。

昼に掴まれた腕をさする。さつきよりも強く、長くたださする。

今まで二十二年間付き合うことすらなかった。男と手を握ったことも中学以来ない。思えばあまり心を出さない自分は関わりにくかったのだろう。

行事の時も協力こそはしたが、男子を引っ張る女子をただ眺めていただけだった。昼休みも延々とドイツ文学の本に没頭していたものだ。

そんな私にも勇気を持って声を掛けてくる男子はいた。読書の中
断されたと不機嫌な応答しかなかったっけ。

過去の窓を閉じメモ帳を開くと明日は水曜日、仕事は休みである。
虚しさが広がった。

閉店のメロデイが流れ始める。目の前でウエイトレスが掃除をし
始めた。

（色々なことが始まる夜に、自分も何か始まったんじゃないだろ
うか。この胸の鼓動は始まりの鐘の音じゃないだろうか。）

今朝ケーキが落下していった映像が目の前に現れる。
何かが始まる予感がしたあの気持ちに戻る。手に汗が滲み出てき
た。

バッグを掛けて立ち上がり、会計に向かう。いつもよりヒールの
音が耳に響く。

「悪くない気分だ」

外に出ると涼しい風が吹いていた。曆の上ではそろそろ秋だろ
う。

駅に足を運んでいるとタクシーが猛スピードで通り過ぎた。

一瞬だったけど紗枝さんの旦那さんだったと思う。「よかったです
ね」打った文字は送信せずに保存した。

秘密ができたように気持ちよさが心を満たす。

（明日はケーキ屋に行こう。部長がほめたケーキを食べて買い物
でもしよう。木曜になったら…）

瑠衣は足を止めた。駅が目の前にそびえたっている。

風が唸るように耳元をすり抜けた。髪が巻き上げられる。それを
追うように瑠衣は顔をあげた。

空気が止まると、乱れた髪が舞い降り視界を縞縞に狭めた。その
模様の中で駅がネオンに光る。人々が通り過ぎる。

（木曜になったら部長は風邪が治っているかもしれない。また「
片桐瑠衣」とあきれがちに呼びかけてくる、いつもの部長がいるか

もしれない)

それでもいいじゃない、心で元気づけたいつもの自分に瑠衣はなぜか返事ができなかつた。

返事を胸につかえたまま、瑠衣は見慣れた券売機へと足を進めた。

チャプター11 12個目の記念日

和人世がケーキを提げてドアを開けると、腰に手を当てた妻が待っていた。

明らかに不平を訴えるような眼で睨み、口を開ける。

おおよそ千回は聞いた言葉。

「おかえりなさい、遅かったのね」

千一回目の切り返しをする。

「ああ、仕事が多かったんだ」

リビングのテーブルには二人分の食事が用意されていた。

手はつけられておらず冷えていた。なぜか涙がこみ上げてくる。誤魔化すように袋をテーブルに置く。視界がぼやけている。目をこする。

「温めてくるわ」

妻が戻る前にケーキを広げる。二つの紫がショーケースの中のと、きよりも鮮やかに映える。妻はそれを見て笑い出した。手に持つ食器が音を立てる。

食器は普段使わないきれいなものだった。

体が曲がるほど笑って彼女はこう言った。

「何でわかったの、『その日』だって」

偶然とは時にすばらしい。

向かい合って食べる夕食は最高だった。紗枝は料理がうまい。

イタリアンが得意で和食は作ったことがない。今日も得意料理のカルボナーラと、ピリツとするドレッシングであえたサラダ、手作りのトマトスープが並んでいた。

もちろん私も和食が好きだというほど野暮ではない。時々食べたくなるが。

「ふふ、今日はあなたが父さんに殴られた日よね」

記憶が断片として蘇る。同時に頬が痛むのは気の所為だろう。

「紗枝の両親に挨拶に行った日って言ってくれ」

紗枝は美味しそうにサラダを食べると、艶のある唇で笑った。

八年前のこの日、交際一年の紗枝の実家へ訪れた。我ながら生意気だったと思う。

簡潔に言うつと結婚の申し出に行つたのだ。たった一年のお付き合いで、初めて実家を訪れた要件が結婚の申し出なのだから。

紗枝の母は喜んだが父はそういかなかった。他の者を追い出して私と向かい合つた。今の日本には珍しい、緑茶色の和服を着ていたのだからなおさら威厳があつた。

あのときは心臓が壊れるのではないかと思つたほどだ。職業等を聞かれ、最後には結婚の理由を尋ねられた。あの瞬間はよく覚えている。

「紗枝さんと一生共に居たいと、この一年暮らしてきてはつきり思うようになったからです」

顔が熱くなる台詞だったが、堂々と言えたと思う。自分の人生の中で最も勇気あるシーンだと刻みこんだ。

だが、その勇気ある言葉は拳によつて打ち砕かれた。

全身に響いた衝撃は忘れることができない。何処を殴られたかさえ分からなかつたのだ。

「今の痛みを一生覚えている。紗枝を裏切つたら千発いれてやる」
優しい亭主とは思えぬ凄みを利かせた後、静かに付け加えた。

「紗枝を頼む」

彼が父親になつた瞬間だつた。

あのあと、新たな家族で机を囲い、イタリアンの料理を食べたのを覚えている。

何故か紗枝の母親はフランス料理を添えていた。隣を見ると父親は微笑んでいたから、今の紗枝のように毎日フランス料理を作つて

いたのだろう。

何を話したかなど覚えていないが、団らんと呼べるものについての間にか仕上がっていたと、実感したのだ。

あの日を記念日にしていたのか。思いつけなかった自分が信じられない。

「今日で八年、あなたはずっと守ってこれたよね」
抱き締めたくなる笑みで紗枝は答えた。

「まあな、長らく紗枝の実家には行っていないな」

「良いのよ。きつと元気だから」

紗枝はフォークを宙でまわし、ふいに席を立った。

しばらくすると、甘い香りとともに紗枝は花を抱えてきた。

ゼラニウムとペチュニアのブーケで空気が明るくなる。花言葉は尊敬と信頼、真実の愛情というゼラニウムは記念日ごとに紗枝が買ってくる。一度も欠かしたことがない。やはり、この結婚生活には欠かせない要素が詰まっているからなのだろう。

ペチュニアは初めてだった。

大体この花はブーケに適していないと思うのだが、紗枝が選んだのだ。訳があるだろう。

机の真ん中に紗枝はそれを置いた。にんまりとして眺める彼女は天使みたいだ。照明の当たり具合がまたとてもいい。

妻のことだ。それも計算に入れて花を配置したに違いない。

「こつちはなんていう花言葉なんだ？」

愛らしくウインクをして、紗枝は巻き返す。

「ケーキを食べましょ、遅れたから花言葉は教えない」

「はは。なんだよ、それ」

そういうところが彼女らしいのだ。自分が優位に立つことに悪びれなく、相手にも不愉快を与えない。だから尚愛おしくなる。

小さな金属音を鳴らしながら、妻が買った花を囲みながら、ケーキを食べるこの時は、ただ幸せしか感じられなかった。

この先もこつとして記念日が続いて行くのだろつと思っていた。
このときは、ただ。

チャプター12 調査二日目

昨日と打って変って涼しい日だ。風も吹いている。ユウゴの薄いTシャツが丁度良い体温を保たせる。拓と裕也が目の前で座り込んだ。

「やっぱさあ、開店前に来たのは間違いじゃないの」

拓は三人が共有している後悔をあげすけと言った。

「お前が言いだしたんじゃない？ 朝が気持ち良いって」

今度は裕也がオレの気持ち代弁してくれた。流石憧れの人だな。オレらは今例の店の斜め向かい側、小さな公園のベンチにいる。店が開店しないことには特にすることがなく、既に三十分が経過した。

「だってそれはほんとじゃん。暑いのおれ嫌い」

「ガキかよ」

オレは油断して禁句を言ってしまった。気付いたら時既に遅しつてな。

数分後オレは激痛とともに目を開けた。まあ俺に時間の感覚はなかったが。

「大丈夫か、圭護」

裕也がやさしく状態を起こすのを手伝ってくれた。拓は見かけによらず体技の達人である。そして何より嫌いな言葉が、さっきのだけ。着火させちまうんだよな。

多分今回は足をはらわれたんだろう、後頭部が痛い。砂の地面じゃなかったらどうなってたんだろうな。

「圭護は言いすぎなんだよ」

「お前はやりすぎなんだよ」

今のが合図となったのか店が開店した。

「行くぞ」

店に近づいたのは拓。一番怪しまれないだろうという予想だ。爽やかな夏の朝、爽やかな青年が洋菓子店へ入ってゆく。

それと共にオレと裕也は位置につく。早速客がやってきた。

オレは先ほどの公園にいるから、その人物がよく見えた。若い女性だろう。

三軒先の角にいる裕也に欠伸を送る。

気がついた裕也が店内の拓にサインを伝える。朝だから怪しまれない合図だ。

女性は従業員だったらしく裏手へ入って行った。

「オレが見てくる」

裕也が動きで示して、持ち場を離れた。

そのまま張り込みのような状態が半時間続き、客が来た。

拓が怪しまれる頃だったからかなり助かった。結構年配の男性だ。馴染みらしくすぐにケーキを決めたようだ。

さりげなく男性の後から拓が袋を持って出てくる。

足取りが小学生にしか思えないほど軽い。オレもバカではないから何も言わない。

裕也が戻ってきていないのが気になったが、ひとまず拓と合流し公園に入る。

「拓、呼んでくれ」

歯を見せて笑い、拓は鋭く口笛を吹いた。

鳥の声のように耳触りのよい音が空気を震わせる。悔しくもないけど、オレには真似ができないんだよな。

「来た、来た」

三人が揃ったのを確認して結果を伝えあう。

「あの女は従業員だった。間違いないんだが、なんか場違いだったんだよな」

「あのおじいさんはモンブラン買って行ったよ。どういうこと裕也?」

「なんか目の奥に裏がありそうな顔してて、美人だったし」

「調査に必要ないことはいつてね?」

「ねえよ。なんか怪しかったんだよな」

「客は一人だけだった、通行人は二人くらい通ったな」

「まあ置いといて、あと一つ仕事あるじゃん」

拓の言葉で全員が道の向こうを睨む。

「第二調査、だな」

た。
じいさんが向かったほうの道には小さな人影が見えるだけだった。

ここからが本番だ。怪しまれずに爽やかな青年らとして、ストーリーキングするんだからな。

チャプター13 長い朝

「誠矢、目が腫れてるわよ」

母親の不愉快な言葉で昨夜のことがよみがえる。

あと少しでつかみかけた糸は幻のように手から消えていった。

株市場では自分のほうが上回っているかと思っていた。

だが店長は痕跡を残してはいなかった。何度キーボードを叩き壊そうと思ったか。

(とんだ思い上がりだな、栗野)

母の作った暖かい朝食を一瞥する。

健康を考えた野菜と卵の彩り豊かなきれいな配ぜん。

一瞬母を誇り高く思い、すぐに自分の愚行を思い出す。

「朝食いらない」

自分への悔しさに腕を強くつかむ。何も口に入れる気がしない。

手を動かす価値もない。

価値があるのは、「チェンジ」の首を絞めるボタンを押すことだけだ。

「送つてく？」

母親の優しさも誠矢にとっては障害物となる。

エプロンを脱ぎ、車のカギを手にする温度の無い眼で母をみつめる。

「いらない」

家を出て、しばらくして鞆がないことに気がついた。

全教科入れてあるから、家で確認することはない所為だ。

昨日投げ捨てたままだ、ああ面倒だ。

遅刻など気にも留めずに十一丁目へと足を運んだ。

今日は水曜日だ、あの店をのぞくのも悪くはない。

「今となつては宿敵だけど」
無意識のうちに呟いた口はそのまま閉ざされた。
それでも、無言の足は軽い足取りで自分を運ぶ。

公園に着くと反対側の入り口に男が見えた。昨日観察した男だ。背が高いだけで解るのだから苦勞しているのだろう。だが何故此処に。

デザインの变化のないランドセルをつかみ、そのまま男に近づくともうランドセルのことなど意識の外だった。

目の前の男を隅から観察する。

例の店のことを知っているかもしれない、他人に聞くのは癪だけだ。

「呼んでくれ」

甲高い口笛が耳を刺激した。もう一人男がいたのか。

背が低く幼い顔をしている。誠矢にとってはそれでも大人に見えるはずだが。

その彼のTシャツの中の体は優れた運動神経を示している。

着やせしているのだろうが、強靱な筋肉が浮き上がっているのだ。

耳にはピアスの跡があり、髪も純粹な黒には思えない。

靴のサイズは背の割に大きい。たぶん二十八あたりだろう。

指輪は二つ。両手のなか指だ。口笛を吹く時邪魔そうだ。

唇は少し乾燥気味である。

あの口笛は吹いてみたい、久しぶりに人を羨んだ。

やがて三人目が来ると彼らは道の向こうに消えた。

「どうしようか、一つしかないか」

学校と彼ら、比べるまでもない。

『ストーキング』という気になる単語も聞こえたし。

拾ったランドセルを、また茂みに捨てると誠矢は歩きだした。
学校とは反対の方向へ。彼の知識欲にこたえてくれるほうへ。

一瞬ラトルの店長が窓に見えた。誠矢は昨夜の屈辱を思い返す。

（絶対に変化の元凶、お前の正体は暴く）

男はすぐに消え、バニラの香りが鼻をくすぐった。

誠矢は店長の視線に捕らわれた感じがした。

小さな路地に入る彼らを追うと、十一目から出られた。

何故か安心感が広がって、誠矢は慣れない動きで歩き続けた。

ズボンのポケットの中で眼に見えないものを転がす。

常に持ち歩かねば油断できない、必須のUSBカードだ。

口の端が持ち上がる。僕は弱くない。

夏の朝の目覚めは早い。すでに高くなった太陽が人々を照り付ける。

それはゴミ出しの人であり、出勤の者であり、四人の調査人であったりする。

三人の記者志望の後ろには、彼らよりはるかに店に執着を持った少年が続く。

夏の日は長い。彼らの調査を支えるかのように周りを明るくする。それ以上に夏の日は熱く彼らを照りつける。

ラトルでは毎日多くのものが集う。

その店が無ければ出会うことさえなかった者たちが顔を合わせる。人生の中で小さな刺激を生み出す。

それは店の中でだけの関係のはずだった。

だが関わりをもった彼らはどこに向かうだろうか。

その関わりの深さはどこまでいけるのだろうか。

ドアを見つめる男にも、その最後は、その変化の行く末はきつと
…。

チャプター14 広い街

目覚ましが鳴り響き夏の朝が迎えてくれた。

時計を見ると午後突入している。瑠衣は驚かなかった。

「休み……」

仕事好きだと自覚はしていたが、これほど仕事恋しく思うのは初めてだ。

瑠衣の髪が朝日を受けて、艶やかに輝く。一DKの狭い部屋の中。立ちあがって外に出ようと思うが体が重い。風邪ではないと自分に言い聞かせる。

世間では夏にもインフルとかいう風邪が流行ると言う。かかりたくないものだ。

彼女は久しぶりにエプロンをつけ、キッチンに立った。

得意の料理は肉じゃがである。だがしらたきも入らなければ、玉ねぎもなしだ。

まさに肉とジャガイモだけが入る料理、それが瑠衣の得意料理だ。鍋を熱しながら、暇な頭で部長のことを考えた。

入社したての頃、厳しい上司と有名だった彼の部署に決まった時は怯えたものだ。

実際は部下に言葉で勝てない、柔らかな人格の人であると今は理解している。

手に痛みが走り、鍋が沸騰していることに気がついた。火を弱める。

切ったジャガイモを移しながら、企画の仕事について考えた。

初めてそれを聞いたときは、天職だと思ったものだ。好きな菓子のことを調べ、まとめるだけでいいのだ。幼少期から母の忠告を守らず、数多の失敗作を生み出してきた瑠衣にとって、店に売ってい

るケーキは至上の傑作達である。

それらと関われる仕事のどこに不服があるのか。

後のライバルとなった松園の企画書を見て、闘争心を燃やしたことが記憶に残っている。

彼女も新任の私の追い上げに啞然としていた。考えれば可笑しいことだ。

繰り返し湧いてくる過去の記憶を一つ一つ眺めるうちに、料理が完成した。いつ肉を入れたのか覚えていない。

「ジャガイモが固い」

素直な友人ならだれもが言いそうだ。だが、瑠衣はこの堅さでなければ食べられない。

「成功、成功」

また次の記憶の波が来る前に食べ終え、外に出た。頭の中は鍋のように煮たっている。

まぶしい太陽の光が街に降り注いでいる仲、瑠衣は歩き出した。
(今日はどこに行こうか)

あてもなく歩いていると、いつもとは違った風景が見えてくる。存在を知らなかったレストラン、アクセサリーショップ。活気のある商店街。

仕事で急いで駆け抜けなければ、こんなにも街は広く感じるのだ。どこか新たに入ってみようか、楽しくなって足取りが弾む。途中ワゴン型の店でクレープを購入した。

チェリーカスタードと言う見たことのないもので、瑠衣はその舌触りと濃厚な甘さを堪能した。その店長と三十分ほど話し込む。瑠衣の細かな感想と的確なアドバイスを、東京で修業したであろう若い男は眼を丸くしていた。

きつと、次に見る時はチェリーと黄桃のレモン風味生クリームという新商品が並んでいるはずだ。

そこから離れるとまた、瑠衣は赤いポーチを揺らしながら街を眺

める。ふと眼が止まった。

ポーチと同じ存在感のある物が落ちていたのだ。黒いランドセル。あのケーキ屋の前だった。

ここで誘拐だの事件だの考えるほど、瑠衣の頭は動じていない。ただ鞆があるだけだ。

好奇心が先に動き、ランドセルの持ち主を確かめる。

開けると整った文字で『栗野 誠矢』と書かれていた。教材が無造作に詰められている。

目線を感じる。直感のままに振り向くと女性が立っていた。

「それ、栗野って書いてある？」

小学生の子供など持ちそうにない若い女である。強気な眼で、礼儀など構わず瑠衣を眺める。

「そうですが、なにか」

瑠衣も冷静に返した。女性はカールした髪を触りながら睨んでくる。ブラウンの混ざった、二重で大きな眼。

「誠矢のこと知ってるの？」

勿論ランドセルの持ち主のことだろう。ランドセルを持ったまま瑠衣は思案して、止まらずに答えた。

「小学生で黒のランドセルを持ち、字が整い学校が嫌いなことは知ってます」

女性は吹きだした。あきれたというように眼を和らげる。

「面白いね、あんた。そこで話さない？」

指で示した方向は、見た覚えのない喫茶店があった。

答える前に彼女は歩きだしている。瑠衣はランドセルを持って迷い結局持って追いかけた。これは窃盗ではないと思いつながら。

会ってすぐにその人の指示に従うのは得策ではない。しかし、瑠衣はこの時ほかの選択肢を思いつかなかったのだ。前を歩く女の細工の細かいサンダルを見ながら、ただついて行く。

店に入る寸前女性は足を止めた。黒い髪を風に遊ばせながら振り向き、謎めいた事を言った。

「この中は異世界かも知れないよ」

意味が読み取れず戸惑うと、彼女は口の端を上げた。日差しを反射して赤い唇が光る。

「あなたの頭ならその住民にだってなれるわ」

見上げると喫茶店の名前は『foreigner』だった。

チャプター15 狂気の数値

静かだった株市場に爆弾が落とされた。

和人世も株を持っている「青橋製菓」の株価が大暴落した。表示ミスかと思うような値まで。一株六十五円。

昨夜まで八千円台を保っていたとは信じられない数値だ。

和人世は、パソコンを凝視したまましばらく動けなかった。

こんなときに限って頭は冷静に損害額の計算を始める。千株持っていたから、八百万程の損失だ。

今の給料から考えて笑って済ませられる額ではない。

力なくマウスから手を離し、頭を抱える。爪が頭皮に軽く食い込む。

株市場に手を出す前に随分勉強したはずだ。伸びる株の見分け方も学んだはず。

なら、この画面は何故だ。

「あなた、今日の新聞」

妻もただならぬ気を察して早足で持ってきた。

ほとんど奪い取るような形で和人世はそれを広げる。焦るあまりに上手く開けない。

やっと姿を見せた欄は想像を絶するものだった。

「なん…蕪崎製菓も、三大企業がすべて百円を下回る…だと」

手が震えるのを感じる。見慣れた会社名の隣に見たことのない数字が並んでいる。

世界恐慌か、いや日本恐慌到来か。

妻がいち早くテレビをつける。チャンネルを合わせるまでもなくそのニュースだった。

「……して、今朝の株市場の状況の原因としては、昨日の汚職事

件、また大きな力を持った株主が株を売り払ったことと思われず。諸企業では対策を……」

原因が後者だとしたら悲惨なことだ。株主に裏切られたようなものだから。

和人世は、ボタンに指を掛けテレビを消しかけた。

「速報が入りました。株市場にチェンジという会社が現れ株価が一萬二千、一萬五千八百、えっ、二萬二千……。株価が急上昇しています。どうやら株を売り払った株主たちが買いつけているようです。今四万を超え……」

今度こそテレビを消した。

(チェンジ? 四万? ふざけている)

「あなた一時になるわ」

会社に向けて出発する。車の中は太陽に蒸され、不快指数の記録に挑戦している。

窓を開けるが湿った空気しか流れ込んで来なかった。全ての信号が赤だった。

自分の前の車が丁度黄色の光の下を行き、和人世は止められる。お陰で二十分のロスをした。

(どうなってんだ……)

会社の中では、事情を知る者は狂乱に近い状態だった。友人の山岡が背広のしわを正しながら声を掛けてくる。

「知ってるよな、今朝のニュース」

いつもの明るさが微塵にも感じられない重い声だった。

「ああ、おかしいじゃ済まない問題だからな」

「おいっ、山岡。五万を越したぞこの会社」

山岡が声のしたほうへ走る。和人世も後から歩く。背広をはためかせてブレーキをかけた山岡が叫ぶ。

「宇本、やばいぞこれは。相当」

画面を見た瞬間理解した。三大企業どころではなく次々と株価が

下がってゆく。

崩れる塔を眺めている気分だった。まるで突如現れた社が食い荒らしているようだ。

「何者なんだ、チエンジって」

「それがわかれば苦労しない」

課長の声だった。振り向くと青ざめた年配の男が立っている。

通常の怒りに満ちた赤い顔が恋しくなるほどだった。

「わが会社も危機にさらされている。株主に連絡して、被害を防げたが、それでも一株千円は優に下っただろう。この状況を速く理解してくれ」

株に興味のない社員も全員が寒気を覚えた。この異常な空気の中で山岡が叫ぶ。

「六万を超えました！」

ああ、紗枝きいてくれ。この国は狂ってしまったようだ。

今は目に見えなくてもこれからの被害を考えるとおかしくなりそうだ。

それも一つの会社「チエンジ」によってな。

ふざけたネーミングだろ。

「全員仕事に全力で励め！ このままの状態が続けばわが社も潰されるぞっ」

その声を合図に空気が変わった。

奇妙な熱気と活気、そして不安に支配された。和人世も机に着く。

「働くことしかできないのか」

つぶやきはキーボードを叩く音にかき消された。

チャプター16 絡まった陽光

株市場の事件などつゆ知らずにオレ達は歩いてた。

「あの爺さん、どこまで行くわけ？」

裕也が明らかに不快な声を出す。同感だ、もう四十分近いからな。見慣れない四丁目の入り組んだ路地を通ってきた。帰りが心配だ。三人のシャツは汗で濡れ、その重さが負担を掛ける。

「疲れたあ」

解決策のないことを拓は言葉にする。二十を越した今も少年気分が抜けていない。

アスファルトは自ら熱を発していると錯覚するほど、灼熱を放っている。

陽炎が揺れ、ビルは太陽に競う光を反射させている。

それらは容赦なく生物の水分を奪い、空气中に蓄積する。

「熱くて湿っているって最悪だよな」

「わかりきっていること言うな、圭護」

前の男性も焼かれながら歩き続けている。生もののケーキは早めに保存しなくては。

歴史がありそうなこじんまりした商店街にたどり着く。見たことが無い。

男性は立ち止り、オレ達の心臓を一瞬爆発させた。それは錯覚かもしれない。

アイコンタクトで自販機に向かう。以心伝心に感謝する。

「あの爺さん、いつになったら情報くれるわけ？」

さつきから語尾が同じ気がするのも錯覚だろうな。

拓の皮肉に応える者はいない。

裕也は本当に小銭を入れて、黒い炭酸を買った。飲み物はすぐ室

温に追い付く。

喉を鳴らして飲む裕也に顔を向けながら男性を監視していたオレは、奇妙に思った。

「まさか…いやでも」

「なんだよ」

「あの爺さん迷ってるんじゃないね」

確かにその男性は首をしきりに動かし、数メートルおきに立ち止っている。

オレ達は狐に包まれたように、なにもできなくなってしまった。

本当ならば、あの男性の行動を詳しく調べて変化が起きるか見るとは思えなかった。

「あれって、河潟製紙の社長だね」

幼い声でしたのでまた心臓の鼓動が大きくなる。寿命が縮む。

「兄さんたちは何であの人つけてんの？」

小学生にしか見えない少年が冷やかに話していた。

外見の幼稚さは拓と良い勝負だが、内から滲み出る気迫は子供とは思えない。

陽光の下、彫りの深いその顔から二つの光がオレを捕えた。何て眼だ。

「兄さんたちもケーキ店調べてるだろ。変化に目ざといね」

口調が年上に対するものではないが、オレ達は威圧されて口になきなかった。

近い存在である拓が口を開く。男性に聞こえないように声を落としている。

「誰だい、君は」

あきれ質問だが核心を突いている。かすかに風が吹き体が冷えた。

少年はまずオレを、そして裕也を、最後に拓を見てゆっくり答える。

「栗野誠矢。人間観察が趣味。ラトルは宿敵だ」
二人が硬直したのをオレは感じ取った。オレも固まったから。

この訳知り顔の少年は誰なんだ。何故此処にいるんだ。
ラトルについて何を知っているんだ。疑問が順を待たずに噴き出す。

「兄さんたちは情報不足だ。あの人は機械といわれるくらいに何でもこなしている。道に迷った時点で変化は始まっているよ。まあ、今日の株がショックだったんだろうけど。あの会社も一応景気を迎えたばかりだったし」

オレたちは目を合わせる。三人とも気持ちは一つだ。

「栗野、俺たちに協力してくれないか」

ここまで頼りになりそうな子供は見たことが無い。

オレは今までにないくらい緊張して言った。裕也の炭酸が欲しい位喉が渴いた。

汗が伝う音が聞こえ、心臓の鼓動を感じた。世界が静かすぎる。
オレはこの感覚を知っていた。あれは中学の頃のテニス大会だった。

ラストサーブの瞬間、全身の神経が騒ぎ出し足の先、髪の毛、すべてを感じ取れた。

世界は自分と相手しかおらず、体の中以外の音はすべて消えうせた。

あの、快感とも感動ともいえる感覚がまた蘇ってきたのだ。考えもしなかった場面で。

少年は予想外でいて望んでいた返事をした。

冷ややかだが、熱意が隠された太陽の声であった。

「そのつもりで付いてきたんだけど」

見知らぬ少年は、勝利を確信したかのごとく微笑んだ。

チャプター17 夢の狭間

小さな店の店内は全てに焦点が合わない奇妙な空間だった。ぼんやりとしたランプが夢と錯覚させる。ファンの回る軋んだ音がする。

瑠衣の目を引いたのは、アンティークな置物たちであった。

笛を吹く童子がくりくりと見返してくる。エプロンに似た民族衣装の娘が見つめる。

手に持ってみると、馬の銅像は命を持ち足を動かそうとした、それほど迫力があつた。

「それ、友人がこだわっているから場所変えないで」

瞬間瑠衣はそれらを置いた。しかし数センチずれたという不安が残る。

気配が消えたことを感じ、見回すとだれもいなかった。

急に広くなつた世界に体は対応できず、瑠衣は突っ立ってしまった。

「紅茶しかないけど」

心臓が鷲掴みされる。振り向くと女がローズティを差し出していた。

「ありがとう」

声は震えていたかもしれない。瑠衣はカウンターに腰かける。

ローズの香りに落ち着きを取り戻しつつも状況が理解できない。やっと気がついてランドセルを脇に置いた、窃盗ではない。

「さて、話を始める前に聞きたいことがある」

カウンター越しに女が言う。カールした髪が年齢を諭させない色気を醸し出している。

「ラトルについてどう思う?」

予想外を過ぎ、返事が遅れた。

「どうって…ケーキがすごくおいしく、店長が特別…」

「店長が何だっつてっ」

突然立ち上がった女は顔を赤くしていた。

「て、店長の性格が特別で…舌の回り具合と思考力がよく……」

女はすくと腰を下ろした。息を吐いたのが感じ取れた。

「わかった。あんたは何にも分かっつてないのね」

クエツションマークが浮かぶ瑠衣を置き去りにし、女は話し始めた。

「ラトルについてなんだけどね」

「あたしの母が一月前に自殺したの。死因は不明。遺書もない」

「…」

「母は、明るくて何の心配ごともなくふるまってたから、あたしも死因は分からない。だから調べ始めた。死ぬ直前に母が会った人をすべて尋ねた。だけど死につながることは何も見つけられなかったの。もしたら、この間一週間前に母の日記を見つけてね。そりゃ、面白いことがたくさん書いてあったよ。でも、自殺の前日、母の文章はそれまでと変わらなくなるとりよめのないことばかりだった」

瑠衣は今自分がそこにいるのかさえ忘れて聞き入った。

「だけど、ひとつだけ気になることがあって。あるケーキ屋に行つたの、母はね。それが」

「ラトル」

「そう。もちろんそこに死の原因があると考えたわけじゃない。ただ、母の死を調べるうちに母が何を思い過ごしたのか興味が出てね。直接ケーキを食べてみようと思った。まさかよ、そこに知り合いがいるなんて。それも、それが比坂だなんて」

「比坂…?」

「比坂は、一昨年くらいにあたしたちの近所に引っ越してきて、」

仲良くなった女性。でも、二か月前に比坂は街を出て行ったのよ。なぜか、母に聞くと少々言い争いをしたとか。引越すほどの言い争いよ、少々なんて……。まあ、ともかく比坂を見たとき直感が働いてね。この店が原因なんじゃないかって、ね」

「それって推測の域を出ていないですよね」

「ああ、もちろん。だから警察になんか相談せず、その店を見張ることにした。そしたらよ、その店のケーキには愉快的な評判がついてるじゃない、運命が変わるって」

「聞いたことないですよ」

瑠衣は必死でお得意の洋菓子店を思いだしていた。

「そうかい。ま、見張っていたらわかるけどそれは真実だった」

女は過去を見るようにグラスをみつめた。氷が涼しく音を立て崩れる。

「いい音ね。で、もうひとつ面白い発見があった。それが、これ」

ランドセルを指さす手は美しかった。よく見ると中指には金細工の指輪がはめられていた。

「栗野誠矢。この子は小学生のくせに人間観察が趣味でね。よくケーキ屋で会ったの。ま、相手はあたしなんか覚えもしなかった。それでよかった。でも」

「本題ですね」

目の前で女性が目を細めた。

女はためらいがちにグラスを置く。瑠衣は自然と動作を追った。

「誠矢はね…ラトルを相手に勝負を始めたのよね」

「はあ、…はあっ？」

店内のファンは変わらず静かに回っていた。

オレ達の調査は奇妙なものとなった。

なにしろ小学生と最後に話したのは思い出せない位昔なのに、協力してもらっているんだからな。

「それで、ラトルはどこにも存在しなかったてことか」

「違う、確かにラトルの株主は存在しているんだ。だが、会社が明らかじゃない。名前すらつかめてないし。だからチェンジの黒幕だつて証明できない」

さらにこの口調。どちらが年上かわからなくなってくる。

あの後、爺さんをつけるのはやめてファミレスに入った。店内は客が多い。

ウェイトレスは男三人に囲まれている少年を心配そうに見ている。仕方ないだろ、説明もできないし。

「兄さんらは何でラトルを調べているんだ？」

オレは記事のことをかいつまんで話した。人にはらすようなこと、嫌だつたけれど。

誠矢とやはらは、一言も挟まずに最後まで聞いていた。少年らしく頷くこともなく、相槌を入れることもなかった。まあ、話しやすかつたな。

話が終わるとたつぷり十秒黙つてから、口を開いた。

「ふうん、兄さん達はラトルについてまだほとんど知らないってことか。変化すら見ていないんだ。じゃあ、今朝の株市場の騒ぎも知らないつてわけか」

それから栗野は今朝の異変について話し始めた。オレは株に通じてはいなかったが、興味があつたので聞き入っていた、専門的なことはよくわからなかったがな。

（ふむ、株が四万を超えると異常なのか、そういや株は千単位で買ったんだっただけか。いや、違うか…確かそうだった気がするが、そうすると四千万か。ほう）

「じゃあ、何かっ。ラトルは伸びがすごい会社で力を持っていて変化おこしまくりです、危険ですので眺めるだけにしておいてください、って教えに来たのか」

裕也はそのニュースを知らなかったことが気に入らぬように言い捨てた。

（そういや、裕也もどつかの株を持つてるんだっただか）

少年は一度うつむき、顔をあげるとはつきりした声で言い放った。

「僕はラトルを負かしたいんだ」

オレ達は三人同時に固まった。多分同じ情けない顔だったと思う。その空気の中で少年は淡々と続ける。

「僕は株については自信があるんだ。百円から初めて、何百倍にも増やせられるし、ある会社を倒産寸前に追いやることだってできた。なのに、なのに今回ラトルの正体すらつかめないだなんて…」

世のハッカーたちよ、この恐ろしい少年をどう思う。

コイツはラトルを倒したいからオレ達と情報交換を求めてきたっ
てことか。

オレは心の記事を広げた。空所の多いこの記事は、大きな広がり
を予感させる魅力的なネタだ。改めてオレは高ぶってきた。

「どうしてラトルが株価を引き上げられるかわかるかい。ラトル
のオーナーはあれだけ株を使いこなせる想像できない富豪だ。ただ
同然で建てた会社に資金をつぎ込めば株価が上がる。株主はどう思
う？ 買いあさって、さらに株価が上がる。群がる、上がる。そう
いうことさ」

ようやく事態がのみ込めてきた拓が、疑問を投げた

「それって犯罪になるんじゃないの？」

この難しい話の中でよくそう純粹になれるな。

「マスコミすら正体がつかめない相手を逮捕できるかな」
拓を含めて切り返せるものはいなかった。

栗野は突然メニューを手に取り、カレーとサラダを注文した。
呆気にとられたオレ達を見た少年は笑って言った。

「朝、何にも食べてないんだ」

オレはこの不思議な少年が理解できない。会って二時間ってこともある。

だが、一生付き合ってもこの少年を理解できることはないと思う、
誰も。

なぜか、さつきまで熱く株を語っていたのに今はぱくぱくカレー
をほおばっているんだからな。

かき集めることなく皿をきれいにし、スプーンを置くと再び目を
向けてきた。オレに。

冷たくも惹き付けられる、熱い意志を宿らせた眼に呼吸を忘れる。
軽く前髪で隠れた眼は陰影を持ち、存在感が大きい。

(何だ、こいつは)

少年の瞳の奥に深い蒼を見た。瞬間心の中に入ってくる異物を感じた。
網の如く広がっている今までの記憶、自分のすべての人格像、
温めてきたアイディアや記事達、すべてが見透かされてしまう。

オレは必死で隠そうと抵抗する。自分では気が付きたくないもの
まで引つ張り出されそうだったから。

ついに核まで伸びてきた目線から、手で包みこんで微かに残った
秘密を守りぬいた。

その瞬間に、誠矢の顔が蘇ってきた。隣の裕也が自分を心配そう
に見ている。

そしてスツと目線が外れた途端、責めるように肺が激しく働きた
した。悪いな、臓器たちよ。

誠矢は満足したように、怪しく微笑むと水を一口飲んで話を再開
した。

「さて、本題に入ろうか。『チェンジ作戦』と名付けるかな。その内容は……」

数十分後店からでたオレ達の顔は、通行人にどう映っただろうか。

少なくとも、オレは狂気じみて見えたかもしれない。

これから起こることへの高い期待と不安の入り混じった、快感に似た感覚に支配されていた。

そこから離れた喫茶店では、大同小異の話を聞いて顔を赤くした女性が、同じ感覚を味わっていた。

チャプター19 新たな手段

さほど、いや全く後悔していない。無論、軽はずみだったかもしれない。

計画まで話す必要はなかっただろう。だが、自分は話した。

「ごちそうさま」

サラダのフォークを転がし、誠矢はため息をついた。ドレッシングがきつかったせいか気持ちが悪い。外を歩けば直に良くなるだろう。

しばらくして、きれいになった皿をみつめると胸に衝撃が走った。何故疑問に思わなかったのだろう。

（この、この料理の代金は僕が…）

そのまま何もないポケットに手を入れ、惚けているとウエイトレスが声を掛けてきた。

先ほどから、ちらちらと視線を送ってきた女性だ。うっとおしいとは思ってたけど。

「あの、先ほどの男の方々が代金のお支払いは済ませましたよ」
瞬間彼女を見る目が変わった。黒いベストの服を着こなし、優しげな空気を取り巻いている。母に似ている点が癪だが、感謝をするべきだろう。

「どうも、過ぎたお気遣いありがとうございます」

呆氣にとられた女性を残し、誠矢は二時の鐘が鳴る街へと出て行った。

昼の町は夜以上に活気がある。それもこの七丁目独特だが。

胃の中の油気が飛んだことを確認し、公園へ戻り始める。誰にも会わぬことを願った。

知り合いならば尚更。声をかけられれば、つまらない現実を引き

戻されそう。

「誠矢ちゃん、またこんなところうるうるしてんの?」
空気読んで欲しい。見た覚えのない女だ。

甘く香ばしい香りを漂わせながら近づいてくる。誰とも話したくはない。

避けた先にはきれいな手が伸びていた。指輪もしていない。

「ちよつと、聞きたいことがあるのよね」

「母にどうぞ」

今度は腕をつかまれる。振りほどこうとすれば怪しまれるだけだ、ただ相手を睨む。

「そんな怖い顔しないで。簡単な質問なの」

「何故学校をさぼっているのか、だったら答えません」

「違うわよ。あなた、大きな作戦を始めるんですよ」

胸が衝かれた。相手は口の端をあげた。花の香りが襲ってくる。

あの三人以外にはだれにも話していないはずだ。ならば、何の作戦だろう。

日光が頬を照りつける中、女は優しく囁いた。

「あるケーキ屋さんに手を出すつもりでしょう」

手がしびれてきた。だが、思考に痺れは届いていない。

「何を言ってるんです?」

声は震えていない。顎さえコントロールすれば震えないことは知っている。

女は首を傾け、ぞつとする声を発した。

「子供で済まされることじゃないのよ。怖いもの見たさもほどほどにしたほうがいいわ」

冗談じゃない、誰だこの女は。何故邪魔しようとする。

心の中の強い言葉も口まで達しはしなかった。周りに満ちた香りのせいかもしれない。頭がくらくらとしたが、悟らせないように気を正す。

「見当違いの注意もほどほどにすべきですね。人違いです」
今度こそほどけた手をはらって歩き出す。いつの間にか呼吸が乱れている。

背後から耳元へと声が伝わってきた。鳥肌が立つ。

「貴方の素性は知ってるのよ。店に観察に来ていることも、ね。」

店長はまだ気が付いてないふりをしているけど、あなたが誤魔化せる相手じゃない。それよりも……」

先が聞きたくなくて、足を踏み出そうとする。目眩が抵抗力を削ぎ、立ちつくす羽目になった。生まれて初めて恐怖を感じる。

肩に重みを感じられるほど、危うい声。先は続けられた。

「私の仲間になり、願いを叶えない？」

日光が見せた幻覚だったのかもしれない。振り返ると女は姿を消していた。違う、消したんじゃないなかったのだ。すがろうとした思いも辺りの香りによって打ち砕かれた。

「願いを叶える……？ 知りもしないのに」

悪寒が全身を駆け上がる。そうか、知らないわけがないんだ。

店のことを話していた。宿敵とみなした店長のことも話していた。あれをすべて幻覚に変えては、意味がない。面白くもない。

青空を真正面から見上げる。視界がすべて空で埋まった。

「願い……」

思えば、あの三人に打ち明けたのもそれを望んだからだ。それを見たいのだ。

この眼に刻んで、納得したいのだ。父の不可解な行動を暴きたいのだ。

残像に支配された顔を下ろしたとき、誠矢は奇妙な感覚に浸っていた。

今日、三人をつけたが為に人生で最もかなえたい望みが手に入るかもしれない。

だけど、どの手段で。

公園に着くと、ランドセルが無かった。構いはしない。

今日一日の体験は、ランドセル一個で崩されるようなものじゃない。

誠矢は向きを変えると、家へと歩き出した。誰とも組むつもりは毛頭ない。

利用できるならばしてやるだけだ。

まずは計画を進めなければ。

チャプター20 会社の一角

不意に彼女の姿が無いことに気がついた。

「比坂は今日はどうしたんだ」

大きなキーボード音が鳴り響く中、叫ぶに近い声で尋ねた。比坂の隣の席の女性が、手を止めず顔も上げずに答える。相手もまた甲高い叫びであった。

「この騒ぎが起こる前に電話で休み取りましたっ」

和人世もまた、手を動かしながら唯一自由な頭で考えた。

一度も休んだことのない彼女が、今日に限って休む、偶然だろうか。偶然だな。

終わりのない仕事の中でこの考えは、消えていった。

十日分ほどの仕事を半日でやり終えた社員皆は、机に寄りかかっていた。肩で息をしている者や、パソコンを見続けたせいも、目をこすっている者もいる。新米、古株の誰もが初めて体験する忙しさであった。

和人世も疲れ切り、椅子にもたれて脱力していた。

突然コーヒーが飲みたくなって、開きかけた口を慌てて閉じる。

今は誰も命令されたくない筈だ。

立ち上がると、使っていなかった足が元気に休憩室へと運んでくれた。

すれ違った社員は、部署関係なくあからさまに疲れを見せていた。何人かなどの部下は会釈すら忘れていたほどだ。まあ、今は責めるまい。

ふと、和人世は会社の脆さを感じた。たった一社、あの会社が株を荒らしたあの数時間でここまでぐらつくとは。そして、働くことしかできなかつたとは。

コーヒーポットを掴み注いでいると、妙なものが視界の隅に移った。

しゃがみ込んで拾うと、散薬の袋の一部に似ているアルミのかけらであった。何も付いていない。

無意識に周りを見回したが、他には何も落ちていなかった。気にする方がおかしい、ただのゴミだ。

奇妙なわだかまりを覚えつつコーヒーを口に含む。

「まずい…」

一人でつぶやく恥ずかしさに勝って味が悪かった。比坂が淹れたのはまるでこんな味ではなかった。

携帯しているチョコで口直しをしていると人が入ってきた。

和入世は出て行くときに、自分でも気づかぬほどの一瞬であのかけらをかすめ取っていた。

自分の席に戻った時、既に帰り支度をしている人が半数だった。空席も増えてきた。

「死にそうだよ、お疲れさん。今度飲み誘うからな」

山岡がコンと机を叩いて去って行った。朝よりも元氣に見えるのは清々しさだろうか。

伸びをして帰り支度をはじめかけた時、あのかけらが目に入った。

「何で、此处に？」

手に取って眺めていると、かすかに粉末が残っているのに気がついた。

「風邪薬には見えないし、ビタミン剤でも…ないよな」

「どうした？ 宇本」

松園が声を掛けてきた。同期の親友だ。格好良いの一言しか表わす言葉のない、整った顔の少し影のある男。藍色の背広を専用であるかのように着こなしている。

「ん、ちょっとな。休憩室に落ちてたんだが」

差し出した物を受け取ると、松園は顔をしかめた。

「妙だな、銀色なだけで薬品名さえ書いてない」

「端だから、じゃないよな」

「多分な。まさか危険なもんじゃないだろうな？」

「さあな。拾っただけだが、どうも気になって」

二人の男が小さなアルミを凝視している様は実に不自然だったのだろう、横河まで寄ってきた。

「何見てるんすか？」

まだ三十になって間もない彼は、年齢に似合わず幼さを持っている。そばには、交際している女性社員の三島がいた。小さくカールしたサラサラの髪を持ち主で、横河の二歳年下だ。

「おいおい、大したことないのに、なんでこんなに集まっちゃったんだ？」

和人世が軽く言ったが、三人は真剣に紙を調べ始めた。

電気が自分のまわりだけになり、暗闇に残された気がする。だが、周りの同僚達は気にしない様子で喋り続けていた。

「あたしの友達に薬剤師がいるんです。調べてくれるかもしれないません」

「おお、三島冴えているな」

「茉莉、やってくれんの？」

三人の男の視線が集まり、顔を赤らめながら彼女は答えた。

「おもしろそうですし、頼んでみましょうっ」

会社から出ると、四人は自然に店に入った。まだ七時だから、二時間くらいはゆっくりしていいだろう。周りで賑やかに話す友人達を見ていると、今日の疲れも幾分か消えてゆく気がした。

頭上では赤い星が光っている、和人世は胸騒ぎを感じたが振り払った。

今は、楽しいことだけを考えよう。飲むのも久しぶりだ。

明日からは今日の騒ぎによる被害が、公に各地で起きてくるだろう。

そのニュースをまだ見ぬ今は、何も気にせず飲んでもいいだろう。
無知がもたらす安心にたまには頼ってもいいだろう。

チャプター21 メールの訪れ

久しぶりにショッピングモールに買い物に行ったが、あの目まぐるしさは苦手だ。

やはり店は一つ選んで、ゆっくりするのが一番だろう。静かさが購入意欲を起こさせる。

帰宅した瑠衣は、三千円の帽子を外すとソファに突っ伏した。

「疲れたー…」

十秒目を閉じて、ガバツと起き上がる。首を三回転させて伸びをする。

体をほぐした後、唯一買った即席麺を作り始めた。調理時間は二十秒である。

塩ラーメンが好きな瑠衣は、目にした瞬間買わずにはいられなかった。一つ二百六十円という、迷う値段であったが五個買った。本場の味が楽しめるそうだから、だ。

「美味しい…」

スープを一口含んだだけでため息が出る味だった。

音を立てずに麺を食べ終え、スープも飲み干すと体にじんわりと汗が出てきた。

瑠衣の部屋にはテレビが無い。あえて言えば、普通在るべき物がほとんど無い。

エアコンもなく、扇風機も在らず、写真立てが一つもない。

理由は一つ、無くても困らないからである。母親譲りの性格だ。ベッドと引き換えの広い空間に足をのばし、眼を閉じる。

一日働いた体を休め、頭だけは鞭を打った。昼間の会話が思い出される。

あの実態の？めない喫茶店、ファンの回る音が響く店内が浮き上

がって来た。

「名前を聞いても？」

尋ねた瑠衣はそのまま返された。

「あんたが先に言うならね」

「片桐瑠衣です。瑠璃色の衣と書きます」

女は髪をとかしながら口笛を吹いた。赤く染まった口が目に存在感を訴えてくる。

「良い名だねえ、瑠璃色か。あたしは榎原トキ」

「えのはら…トキはどういう字ですか」

「漢字はないよ、片仮名しか貰えなかった」

瑠衣はどうしても決めておきたかった。

「時間の『時』でもいいですかね」

トキは顔をあげて、前髪で隠れた眼を睜った。美しい褐色の瞳だった。

「いいね、今までつけてくれる人はいなかったから。良い名だね」

一つ一つの言葉が心に沁み、瑠衣は不思議な感情に包まれた。

誰でも心の中をはつきり口にする人には、このような感情を抱くものだ。感銘としか表わす言葉を知らない、尊い感情を。

それから店を出た。二時間話しこんでいたようで、太陽は頂点を過ぎ降下を始めていた。

瑠衣は誠矢という少年の考えた計画を思い返し、眼を細めながら歩き出した。

もう一度計画を整理して考えてみたが、完璧すぎて現実味がなかった。少なくとも瑠衣はそう感じた。もともと株が関わる話にはついていけないのだから、当然であろう。

「はっ」

今になって思い出した。少年のランドセルを置いてきてしまったのだ。

時を信用していない訳ではない。しかし、取りに行くべきだと判断した。

気付かぬうちにあの店に行きたかっただけかもしれない。とにかく瑠衣は走り出した。

履き替えることを忘れ、ヒールのままだったが体がぐらつく前に瑠衣は足を踏み出していた。

光が際立つ夏の街を駆ける。生暖かい風が気持ち良く吹きぬけてゆく。

瑠衣は地面を蹴り続けた。迷いのない走り、正にそうとしか呼びようがなかった。

付けたままのクロスのネックレスが音を鳴らしながら跳ねる。時々手で押さえた。

公園が見えてきて瑠衣は速度を落とした。息を整えながら歩く。いつの間にか肩で息をしていたようだ。心臓も騒がしく動いている。

ぼんやりと『foreigner』の文字が不規則に点滅していた。その所為か周囲に馴染んでいない。

(ここは異世界かも知れないよ)

時の言葉が耳に蘇る。あのときわからなかった意味は、今尚理解できない。

ドアに手が触れる瞬間携帯が服の中で震えた。再び喚きだした心臓を抑えつけて開く。

メールであった。短い文を送ってきた相手は、部長だった。

「俺を探してくれないか」

読み間違いだと判断し、五回読み返す。小さな画面を何度も見回す。

部長にアドレスを教えたのは二年前であること、相変わらず絵文字と件名が無い、等くだらないことを考え終えると瑠衣は固まった。お陰で携帯は落ちなかった。

何度も心の中で短いメッセージを繰り返す。

これは冗談だ、とか、ただのいたずらだ、とかは全く出てこなかった。

何かが起きた、それだけは確信していた。部長に何かが起きた、と。

何もかも忘れて、瑠衣は立ちつくした。

気がつけば先程と同じように足を伸ばしていた。どう帰ったのか覚えていない。

手には痕が付く位強く握りしめられた携帯があった。画面も先程と同じだ。

「探してくれって…どういう意味ですか、部長」

外と同じ温度の部屋で、答える者はいなかった。瑠衣にはペットもない。

一時間呆けて、やっと意識を取り戻すと明日の準備を始めた。

独り言をつぶやきながら、手を動かし続ける。

「明日になれば部長がいるんです。また私に企画の文句言ってくるでしょうね。そんな部長がいるんです。大体こんなこと起こるわけないんだし、私が何をするといいんですかね。そうですね…」

布団をかぶるその瞬間まで口は止まらなかった。

不安だった。寒気すら覚えていた。ただただ、早く夢に逃げたかった。

偶然か必然か、その夜ははっきりとした夢を見た。

部長が机にやってきて、腕を引っ張る。そのまま休憩室を通りぬけラトルへ至る。

店内にはオーナーが笑っていて、部長は顔を赤くしていた。横顔がリアルに見えていた。

彼らは瑠衣と話をするが、内容は流れ去ったように記憶に残っていない。

ただ、最後に部長が言った言葉は覚えている。ケーキの箱を瑠衣に差し出しながら、俺を探してくれと。そこで目が覚めた。

時刻は五時半で、外は丁度日が出るころだった。重い色のカーテンを開く。

予想もできない一日の始まりを、夏の太陽は無言で教えてくれた。

現実逃避をしたくなるほど暑い日がやってきた。

そしてオレは愛猫アズと現実から逃げて遊んでいる。前足を持つと確かに体重の増えを感じる。地球温暖化を意識してはいないが、オレの部屋にエアコンはない。

お陰で為す術もないオレに、灼熱が襲いかかっている。

狭い部屋であるが、オレの性格上部屋はさっぱりしている。一日一回の掃除が日課だ。九時とも決めている。

猫じゃらし代わりの毛糸を投げ捨て、日課を始めようとした途端に邪魔が入った。

九百八十円の机の上で鳴るオレの携帯、メールの送り主は勿論拓であった。

「証言者が手に入った！ 三丁目へ^^」

うっとおしい絵文字は視界にも入らず、オレは愛車オーク目指して飛び出した。

三丁目は東京で言う銀座のように高い建物ばかりだ。お洒落なのだろうが、この暑さでは一層暑苦しく思えるのは主護だけではない筈だ。

絶え間なく流れる汗に、水分補給も無駄な抵抗と感じてきた頃二人が見えた。拓の黄緑色のシャツと裕也の紺色のタンクトップが、くつきりと二人を分けていた。

主護は慣れた動作でオークを急停止させる。錆びたブレーキ音がこだました。

「流石、十五分で到着だね」

「それは十五分も待たされたという皮肉にしか聞こえないが」

「お前ら、今日は客がいるんだぞ」

裕也の叱咤で圭護は、後ろに立つ若い男性に気が付いた。

よく声が掛けられたな、と圭護は第一に思った。オールバックは初めて見たとも感じた。

「長谷大翔さん。ラトルのケーキについて話してくれるんだって」と、圭護は何度か頭で繰り返した。裕也が話を促す。

「この暑さだし、俺の部屋で話すことになった」

こうして男四人は六丁目へと向かった。何のために三丁目に来たのか圭護は尋ねなかった。

裕也の家は特徴を掴みにくい。周りの家と屋根の色は黒で統一され、太陽パネルの位置もそろっている。庭は三坪ほどで、几帳面な裕也の父が野菜を栽培している。

壁は灰色で煉瓦模様すらなく、玄関も最近のデザインが重視された一般的なもの。

「失礼します」

「お久しぶりでえす」

「お初に失礼します」

一番礼儀正しかったのは、オールバックの大翔であった。

今一度大翔を観察してみると、白地にバイクが描かれたTシャツ、その上に緑チエックの上着を羽織り、黒に近いジーンズをはいている。意外にもピアスはしていなかった。

せわしい足音と共に、エプロン姿の裕也の母が現れた。

予想していた訪問らしく、軽食程度だと食事を出してくれた。ホウレン草のポタージュに、厚いハンバーグのサンドウィッチ、有難くも冷えた麦茶が用意されていた。

驚嘆の声をあげながら一番に食べ終わった拓が、経過を話し始めた。

「昨日男の子と別れた後、もう一度裕也とケーキ屋に行ったんだ。大して面白いことはなかったんだけど、帰り際に店から出てきたのが大翔さん。声を掛けてみたら、あのケーキ屋さん変わっているで

しよう、と返されて何か知っていると置いていくつか質問してみたら、今日また会って話そうということになったんだ。三丁目に住んでて今日は迎えに行く形になったんだ」

まとめてみると、大翔さんは何か知っているとということだろう。

オレは三杯めの麦茶を飲み干すと、潤った声で調査を始めた。

「大翔さん、知っていることを話してくれますか」

同時に脳内の記事とペンを持つ。一言一句聞き逃さないつもりだ。「そうですね、わたしはイチゴタルトが無性に好きで、近くにケーキ屋を見つけたから行ってみたんですよ。そしたら、モンブランに噂があつて、運命が変わるとか…それで買ってみたんですよ。あ、これメモしてないなら敬語やめるか。買ったんすよ、そしたら何か違和感つうか変わったんすねえ」

十三秒の沈黙が流れた。少なくともオレの体内で流れた。

「えっ、で？」

「ん？」

何でも無いような顔でコップに口をつけ、大翔は止まった。

「どんな変化があつたのか調べたいんだけど」

何があつても相手は恐そうな年上である。大きな口はきけない。

「んああ…大雑把でいいすかね。俺はあれから幸運が上がったんすよ。仕事で昇給して、信号も青が多くて。だけど一つ、誰かに付きまとわれてる感じがするんだよな…不気味でね」

「誰かつてことはわからないんすね」

大翔は首を掻いて困った顔をした。少し親近感がわく仕草だった。背後の柔らかく光って揺れるカーテンの効果かもしれない。

「俺も何度が突き止めようとはしたん…すけど。なんつうの、あれ。実態がつかめなくて気味悪い…幽霊的な。ちげえっ、そんな目で見んな。俺も体力あるから見つけたらただじゃおかねえっての」
とにかくオレは真っ先に目を伏せた。

「つまり、モンブランの所為でそれが起こったのは間違いないってこと？」

珍しく拓が的確な質問を発した。それがわかればようやくペンが動かせる。

「あのな、俺がそんな者に付きまとわれて気付かないと言うのか」
拓のピンクの顔が青に染まる。勿論この場の全員が大翔の性格を
いまだ把握していないが、誰だって彼に睨まれればそうなるであ
ろう。

「じゃあ、詳しく聞かせてくんね？」

一番落ち着き、一番クールな裕也がバトンを受け取った。さすが
俺の憧れの人。

「俺の周りにもケーキを食って変わったやつがいるんだ。一人は
俺みたいに誰かに付きまとわれてるってのと、最近まで株が上がり
続けたってやつ。二人目はばかばかしくて相談もしねえけどな、ケ
ーキが原因なんて。そいつは不明の病気にかかってとつくに亡くな
った。寒気がしたね。健康体だったんだよ、それまでは」

裕也の家の空調が効き始めたらしい。

チャプター23 強豪の衝突

男はテレビを見ながらほくそえんでいた。

カナダから取り寄せたワインを傾け、ソファに身を沈める。

「現在チェンジは株価を上げ続け、たった今十万台に達しました。信じられないことです。恐ろしくも、ほかの会社は圧力を掛けようにも掛けられない混乱状態であることです。多くの専門家が正体を突き止めようとしています。結果は得られておりません。前代未聞です。世界的にもこの会社がトップに立ちました。アメリカでは大規模な調査が行われていますが、まだ連絡が入っていないところを見ると、はい、掴めていないのでしょうか。」

焦っているアナウンサーが哀れに思えてくる。やっとここまでの力を持ったのだ。世界を驚愕させるほどの力を。男は快感にぞくぞくした。

テレビを眺めるのにも飽きてきて、スイッチに手を伸ばした途端、アナウンサーの声質が変わった。新たな驚きを含む声は、初めて男を動揺させた。

「たった今チェンジの価格が止まりました。十万二千三百四十です。代わりに猛烈な勢いで株価を上げるもう一つの会社が現れました。今名前を確認した所：ラトル：ラトルだそうです。千円台から始まったその会社は現在四万八千七百円：五万を越しました。いったいどうなっているのでしょうか。昨日のチェンジをもう一度見ているかのようです。ラトルは順調に株価を上げ続け：チェンジに迫っています。何処から資金が生まれているのでしょうか。」

男は無意識に立ち上がった。グラスが手から離れ、重力に従いその身を回転させる。一瞬先に赤い模様が絨毯に広がり、グラスが飛び散った。男の足に痛みが走ったが、気付くことはなかった。

「何：だと」

早歩きで扉を開けコンピュータ室へ滑り込む。そこは淡い青の光に満たされ、五台のパソコンが株市場の情報を知らせていた。一番遠いパソコンの前に座り、キーボードを弾く。袖が腕に落ちてくるので脱ぎ捨てた。

すると腕の古傷が目に入り、余計に男の心を騒がせた。

脚を伝って行く何かの感触がし、見下ろすと血だった。無造作に拭き取るが痛みはしつこく残る。

慣れた株市場が今朝とは違う賑やかさで満ちていた。男の背中に悪寒が走る。臣下の陰謀に落ちていく王のような感覚であった。

「違う、違うっ。ラトルは私だっ。何者なんだこの会社は」

ニュースの通り、その会社「ラトル」はのし上がってきていた。

先日の自分を見ているような、奇妙な映像だ。だが、一つ男の手口と違う点がある。

その会社は男の会社以外に何の影響も与えていないことだ。

「あり得ない……」

ほかの企業から株主を引っ張らずにしようやって、この状況で株価を上げるのだ。血と共に汗が足を伝った。咄嗟に頭が働かない。男は窮地に陥っていた。

メールが入り、一日の始まりを知らせた。仕事場に行く時間だ。男はそれまで一度も動けなくなっただけではない。この時は別だった。

時計の音にただ焦るばかりで、無力さを感じていた。この男を驚愕させた会社の背景にいる人物を知った時、男の顔は何色になるだろうか。

やっと脚を動かし玄関を出た時には、遅刻が確定していた。凡人ならば。

男の車は青色に光る信号のもとを走り抜け、開店時間五分前に間に合った。

停めた車の中で、手を緩やかに動かし両肩、額に円を描く。男とある人物しか知らない、感謝の意の動作だ。終わると三秒目を閉じ、呼吸を一拍置いて車から出た。

店には髪を後ろに束ねた女性が先にいた。後姿だけで畏敬の念を感じてしまう、不思議な空気の持ち主だ。そばを通る時、またラベンドーの香りがした。

スツと振り向いた女は微笑をたたえていた。

「今日はいくつ御作り致しますか？」

一瞬答えるのが遅れた。だが、気が付かないほど短い時間であったらう。

「そうだな、二十個ほど頼むよ」

「かしこまりました」

颯爽と仕事場へ向かう彼女に男は強い安心感を抱いた。と同時に思考が音を立てて働き始める。「ラトル」のトリックが少しずつ姿を現し始めたのだ。

「負ける訳はない」

つぶやく男は客の入ってくるドアを見つめた。

チャプター24 実行された計画

暑く勉強のやる気の出ない日だ。相変わらず担任はうっとおしい。Yシャツの襟元までうっとおしい。窓から差し込む陽光は、普段より明るかった。

「昨日は何故休んだんですか。君のお母さんに連絡したら学校に行ったと言っていましたよ。ふらふらしていると危険だって言っているでしょう」

「母にどうぞ」

「君の話だ」

体育の時間だと言うのに、生徒一人残らせて何をやってるのだ。体育着に着替えた誠矢は、けだるそうに話を受け流し続けていた。昨日何をしたか教えても理解できないであろうに、本当放っておいてほしい。

「今日は根競べですよ。君が何をしていたか言うまで帰すわけにはいきません」

「今の録音していたら裁判沙汰に持ち込めたかもしれませんね」

「いつまでそうやって年齢にそぐわないこと言っつて、反抗するんですか」

「……あなたに教える筋合ないです」

担任の眼がふつと影を差した。それを見ても何も感じはしなかった。

校庭からはクラスメイトの叫び声が聞こえる。何を盛りあがるのだろう。

教師と戯れ、名ばかりの友人と遊ぶことの何が楽しいのだ。そんなことに時間を潰すくらいなら、株の世界を飛び回り情報収集していた方がどんなにいいか。

考えたことが読まれただろうか。担任が突然口を開いた。

優しくも鋭く、柔らかくも強い声だった。

「いつ、いつ君は心を開くんですか？」

気が付いたら家にいた。どうやら学校を逃げ出してきたらしい。担任の言葉がよみがえり、頭痛が走る。頭を支えるように押さえ、座り込む。

何も知らないくせに、何もわかっていないくせに。人を煩わせることしかできないのか。過去の記憶が頭の奥深くをえぐる。

それが時間の浪費とわかって立ち上がり、パソコンの前へ移動した。IDとパスワードを軽く打ち込む。見慣れた画面が浮き上がると、頭痛を忘れた。

「今日から始めないと」

傍らに置いてあった鉄の箱から、一枚の紙を取り出す。そこには十二桁の番号が書かれていた。ラトルのオーナーの口座番号に近いものだ。

思い出したくないが、あの奇妙な女と別れた後に、手の中に押し込められていたものだ。

その番号からエンジを暴く、もう手の中に入ったようなものだが、安心はできない。

誠矢はキーボードを睨み、ミスの無いよう打ち進める。一瞬の間違いが破滅を呼び起こしてしまう。

こめかみから汗が生まれ、顔に赤みが増す。反対に眼は輝き、少年らしからぬ笑みを演出していた。

長いパスワードを解読し、奥深くへと侵入する。

慎重な作業が終わり、後は結果を待つ身となる。肩を回していると、画面の色が変わった。始まったのだ。グラフが上下し、事情の知らぬものには異常を感じさせただろう。実際異常なのだが。

計画は荒く、しかし大規模なものであった。ラトルのオーナーがチェンジの正体であることを調べた誠矢は、そのオーナーの資金を

利用できないかと考えた。あれだけ株を伸ばす会社、資金だけでも頂ければ株価を莫大に伸ばせられるだろう。誠矢はその時点では、何も武器を持っていなかった。

そして昨日のあの出来事である。計画のピースがはまった瞬間だ。先程資金の横流しを設置し、ただ同然で作った会社につき込む。名前は「ラトル」にした。オーナーもこれならば焦りを感じるだろうね。

勿論、幾つもの法を犯す行為だ。何度も接続を切断されそうにもなった。だけど、マスコミも正体を知らない会社が訴えたとして何になる。早速効果が表れ、株価が急激に上がり始めた。

予想していなかったことだが、そこでチェンジの株価が止まった。多分、株主がこの会社の出現に不安を感じたのだろう。好都合だ。

「ははは、一株五万？」

ぞくぞくとした快感がわきあがってきた。周りの企業が後押しするように、わずかな資金を「ラトル」に注ぐ。これも予想外だった。元々はチェンジに並ぶことが目標だったのだ。これなら、追い越すことも可能かもしれない。

圧力をかけようとしてくる会社もあったが、その力は心配にも及ばなかった。今や二社が市場を支配しているようなものだ。

テレビをつけてみると実況で今の戦いが報道されていた。数字が絶え間なく動く。

アナウンサーの驚きに満ちた声が栗野をくすぐる。

次の瞬間、栗野は眼を見開いた。この混乱の所為で職を失った人が大勢いることを知ったのだ。倒産へと追い込まれた数多もの企業が、為す術のない社員の叫び。

初めて罪悪感を感じた。それは一瞬のものであった。原因は間違いない。オーナーの方だからだ。栗野は前に進むことだけを意識した。

三時間の時が流れ、流石に疲労を感じた誠矢は寝転がった。

頭上へ腕を伸ばし伸びをする。頭痛は消え去っていた。清々しさ

しか感じられない。

人生で唯一の大勝負だっただろうが、やりきったのだ。

誠矢は眼を閉じた。母が帰ってきてきて何を言われようが構いはしない。

第二の勝負、オーナーの逆襲に備えて誠矢は頭を眠りへと導いた。

妻の目覚まし鳴り響く中、和人は呆然としていた。

予想はしていた。だがそれは予想以上のものであった。

「昨日から世界を混乱させているチェンジ、そして今朝現れたラトルの二社はいまだ動きを止めていません。この騒ぎによって、多くの企業は資金不足と共に倒産に追い込まれました。不景気をさらに押し進められたかと思えます。記者会見は報道が追い付かないほどであります。ひきつづき…」

「あなた…？」

やっと妻が目覚ましたようだ。昼から出勤である和人は、軽い昼食を食べていた。だが、食べている物の味さえ分からぬほど、意識はテレビへと向けられていた。

「なあ、これは第二の世界恐慌到来かもしれないな」

「私の友達も昨夜から大変みたい…。メールがたくさん届いてね。その多くが旦那さんの失業についてだったわ」

「敢えて紗枝は失業した人数を教えなかった。余計な不安を抱かせたくなかったのだ。」

「そうか…俺の会社もどうなるかわからないな」

夫婦の表情は、けして明るくなかった。

会社へは余裕持って出た。けれどももまたすべての信号が赤となり立ちふさぎ、結局いつも通り、五分前に着いた。心なしか、社員の数が少なく思える。

「よう、宇本」

松園が遅れて入ってきた。昨日と同じように紺色の背広を着こなしている。

雑談している暇はなかった。時間丁度に副社長がやってきたのだ。「諸君も知っているだろうが、今わが社も窮地に立たされている。株価が三百を下回った。社員を減らすことも検討されているが、私も社長も反対している。今日も懸命に働いてほしい」

誰もが疲れを共有しているはずだが、みな活気づいた。瞬く間にオフィスはキーボード音に包まれる。

和人は高く積み上げられた書類を整理しながら、昨日のアルミについて考えていた。三島に確認したいが、彼女は部署が違う。

この忙しさのなか別の部署へ行くのは至難の業だ。和人は諦めて溜息をついた。

「ふう…やつと半分か。…ん？」

書類の山が低くなったおかげで開けた視界に、比坂の姿が無かった。

二日続けて休むなど誰も思わなかったに違いない。彼女の机の上にも大量の書類が積まれていた。隣の女性は気になるようで、何度も比坂の机を確認している。

「連絡、あったのか」

その女性はすぐに自分だと気が付き、声だけで返事をした。

「今日は無断ですよ。まあ、有給使ってませんからね」

今日も戦いが終わり、肩を回していると昨日のメンバーが集まってきた。三島も横河の側にいる。

「茉莉が面白いことが分かった、つうんすよ」

横河が笑顔で言う。松園も期待していたらしく、今日は言葉遣いを注意しなかった。

「何だ」

我ながら疲れた声であった。いささか勢いがそがれた様子の三島は、それでも目を輝かせながら答えた。中高生が持つ無邪気ささえ滲み出ている。

「これは事件になりますよ。江梨花：薬剤師の友人が調べてくれ

たんですけど、薬品の名前がどの教授も答えられなかったんです」

「じゃあ、結局わからなかったんだな」

少し残念そうに言う松園に、急いで三島は付け足した。

「違うんです、終わりじゃありません。微量ですが付着していた粉は…毒性があつたんです。それも命にかかわるほどの劇薬だったんです」

人が少なくて助かった。こんな会話が聞かれたら、まず誤解されてしまう。

「どういうことだ」

三島は考えを整理するように俯くと、すぐに顔をあげた。さらさらと髪が空を舞う。

「麻薬だと考えて下さい。飲み続けなければ苦しくなるような。それに近いのですが、今回の薬は持続的ではなく、断続的に当事者を苦しませるそうです。効果ははっきりしませんが、巧妙にできて心臓病等に非常に似ている症状らしいです」

昔サスペンス小説が大好物であつたろう横河は、興奮した様子で捲し立て続けていた。

「これは、この株騒ぎを乗じた何かの陰謀じゃないかな。誰か重役を殺そうとしたとか。いや、それだともっと単純なことをするか…そうだ、その人に異変を起こさせて周りの人間から怪しませ、仕事を続けられなくするとかかな」

次々と生まれてくる推理を全て彼女に聞かせる、またそれを頷きながら聞く彼氏思いの三島、なんと微笑ましい。だが事態は全く笑いごとではなかった。

「それが、休憩室に落ちていたことからして、社内の誰かに盛られたということだよな」

「多分な、いや確実にな。盛られた本人は気付くかも知れんが、作為的なものとまでは、考えが至らないだろうな」

松園と冷静にかわす言葉も、日々使うことはない恐ろしい内容で

あることは自覚していた。

会社を出てからも話し続ける横河に苦笑しながら、携帯を見ると九時前であった。

流石に今日は飲む時間はないだろう。この件について話したかったが仕方ない。

「悪い、帰るな」

「奥さんか？」

「まあな」

「これって社長に知らせるべきっすかね？」

「だめよ、私達で解決するんだからあ」

「松園、お前に任せた」

「なっ、一番の当事者お前だろう」

騒ぐ彼らの中は居心地が良かった。けれども別れを告げると、夏の暗闇が織りなす圧迫感に包まれた。

会社の駐車場に行き車に乗ると、ふと思い出した。今日は三六歳の誕生日であることを。

一人の車内でふっと笑みを漏らすと、慣れた手つきで曲がり我が家を目指した。

「こんな時勢に誕生日ねえ」

今日も妻が花を用意しているのだろう。

家に着くといつもより暗い気がした。時計を確認すると十時は回っていない。

鍵を開けドアを開けたが、妻はやってこなかった。

「何かあったのか…？」

心配は不要だった。妻は寝室で眠っていたのだ。だが、和入世は違和感に襲われる。妻の安らかな寝顔も安心感にはつながらない。

妻は、どんなに疲れていようと記念日の日には必ず起きていた。

しかも朝遅くの妻は、夜は一時まで起きていることが多い。今日に限ってなぜ眠っているのだろう。

とにかく、用意の無い夕飯にうら寂しくなりながら、おにぎりを作って食べた。

冷蔵庫に埋まっていたビールを開けテレビを点ける。

相変わらず、株市場とその被害についてが報道されていた。

窓から蠍座の赤い光を浴びながら、和人世はテレビを眺めていた。

チャプター26 男の行方

会社に着くと、エレベータでまたも松園と乗り合わせる事になった。

相変わらず香水の香りが鼻につく。松園はいつものように薄い笑みを浮かべていた。

「企画書見せてもらっただわ」

「職権乱用ですね。上司だからって」

「よかつたんじゃない」

空白の時間が流れた。たった今褒められた気がしたのは間違いだろう。

松園は何もなかったが如く、階数の点滅をみつめている。その横顔が以前よりも老けて見えるのは気のせいではないだろう。松園は八歳は年上なのだから。

機械音と共に松園が出ていくと思っていたが、松園は下りなかった。

「どうかしたんですか」

「…そうね、どうかしたかも。今日は忙しくなるわよ」

深刻な顔でそれだけ言うと、松園は閉まる寸前の扉をすり抜けていった。

大きな違和感と、微量の優越感が瑠衣の胸に広がった。

「いつもの調子じゃなきゃ、狂うじゃないですか」

上昇するエレベータの音に、その声はかき消されただろう。

部署に入ると、珍しく人が少なかった。瑠衣の属する部署は社員が全員休まぬことで有名のはずなのだ。

「瑠衣ちゃん、よかつた来たのね」

「紗枝さん、なにがあつたんです？」

先輩であり、憧れの人である宇本紗枝もいつもと違って見える。彼女の肩越しに見回すと、部長の姿もなかった。胸騒ぎがする。

「大変なのよ、あの株騒ぎは知っているでしょ？ あれの所為でわが社は足切りが行われるかもしれないんですって。ええ、私も驚いたわ。部長は反対してただけど、今日来てないってことは、嫌気がさしたのかもしれない。とにかくね、今日は忙しくなるわ」

松園と同じセリフで締めると、紗枝は机に行った。瑠衣はバックから携帯を取り出す。

カメラの機能を重視した落ち着いたデザインが瑠衣は気に入っている。開くと、新着のメールが届いていた。

「部長…？」

期待を裏切り、予想に従い部長からであった。

「俺は会社には出ることはないだろう。探してくれ」

昨夜と同じ状況に立たされた。瑠衣は何度も読み返す。だが、同じ文字しか頭に入ってこなかった。立ち止るのも不自然なので、一度机に向かうことにした。

見たことのない量の書類が積まれているが、それを無視して携帯を開く。

「瑠衣ちゃん、早めに始めた方がいいわよ」

紗枝が気遣うが、何より最優先はこのメールである。

「はい。私ちよつと出てきます」

「えつ、ちよつと瑠衣ちゃん？」

瑠衣は荷物を下ろしもせず、会社を出て行った。社員が忙しうに横を通り過ぎて行った。

今日は比較的日光が弱いけど、その分蒸すような暑さが襲ってきた。

体にはりつく下着も気にせず、携帯をみつめる。会社からゆっくり離れ、公園のベンチに座った。

部長のメールはやはり絵文字が無かった。つまり、本気が冗談か

つかめないのだ。

だが、瑠衣は自分がこれを本気だと確信していることに気が付いていた。

「何がしたいんですか、部長」

返す相手はいなかった。溜息をついて足を延ばす。

懐かしい砂利の感覚に、少し心が落ち着いてきた。ヒールで砂をもてあそぶ。

「お姉さん、こんなところで寝てたら危険だよ」

太陽の光をさえぎるように立ち声を掛けてきたのは、見たことのない青年だった。年齢似合わぬ屈託のない笑顔で、瑠衣は警戒することを忘れる。

彼は、会釈してから前に来た。見れば見るほど幼い顔である。

「会社時間に若い女がベンチにいたら、やはり変かしら？」

「そうでもないですよ。あ、連れがいるんで後ろに」

振り向くと、背の高い二人の青年がいた。二人ともシックな服を着こなしている。

「やめろよ拓、三人の男が困んだら誤解されちまうだろ」

「圭護が言ったんでしょ、あの人ケーキ好きそうだから聞いて来いって」

「お前ら、争う前に説明しようぜ」

不思議な雰囲気のある三人組だった。瑠衣は座りなおし、彼らを見る。握りしめた携帯は、そつとスカートのポケットに滑り込ませた。

だが気付いた者がいた。

「姉さん、なんか悩みがあるんでしょ」

影のある顔をした青年が、瑠衣の携帯を持っていた手をみつめていた。

「オレらはラトルについて調べているんだけど、何か知ってる？」

圭護と呼ばれた青年が質問する。瑠衣は昨日の出来事をすべて教えようかと思った。

だが、考えるほど現実味のない計画と思えてくる。十歳の少年が、あのようなことを実行するなど言えるものか。

「昨日オレらはませた子供に会ってさ。そいつから聞いたことが本当に起こっているんだよな。だから些細な、嘘みたいなことでも何かあれば教えて欲しい」

「まさか、栗野誠矢とか…？」

拓という青年が叫ぶ。

「何で知ってるの？ お姉さん誰？」

瑠衣は両者了解であると確信したため、昨日のことを話した。時が教えてくれた計画、そして時がラトルを調べていること。部長についてはまだ言わないことにした。

しかし、裕也と名乗った青年が深く追求する。

「じゃあ、さつき隠したものは何だよ」

「お前こそ誤解されるぞ、カツアゲじゃねえんだからよ」

瑠衣は一人で悩むのは耐えきれない性格なので、メールを開いて差し出した。

「男か…これがどうした」

部長に好意を抱いていることは言えなかった。だが、伝わっただろう。

瑠衣は自分の部署は誰も休まぬのに、今日は半数もそろわなかったこと、自分はラトルの企画書を作ったことをかいつまんで話した。

三人は熱心に聞いてくれ、瑠衣は不安が軽くなった気がした。

「じゃあ、その男が何か知っているかもしれないのかな」

「拓、単純には行かねえだろ。だけど探す価値はあるかもな」

「その男、ラトルのケーキで変わったの？」

裕也は核心を突いてきた。瑠衣もそれが気にかかっていたのだ。部長にケーキを食べさせた日から、何かが変わっていたと思う。それが何か、瑠衣はまだ言葉にできなかった。

「じゃあ、お互い協力しねえ？」

頭の上からの声は、瑠衣の思考を一瞬止めた。
「はい？」

チャプター27 交わした協力

「また何かあったら連絡しますね」

礼儀正しく挨拶して大翔さんは去って行った。後ろ髪がなびくのが、妙に夏の風景と合っていた。オレらは直角に体を曲げて礼を返す。

「この事件やばいんじゃないかなあ」

「だから、面白いんだろ」

「拓が怖がったら誰が聞き込み役になんだよ？」

裕也の玄関で軽く言葉を交わす。優しい裕也の母は、アイスクリームをガラスの器に盛ってくれた。だが、甘いものゆえにオレの手は拓へと押しやる。代わりに最上の笑顔をいただく。

「結局…大翔さんは記事に載せていいのか訊けなかったな」

オレの後悔は二人にとっては違うものへ変換された。冷えたスプーンを回しながら拓は言う。

「それでこそ、さらに凄いことのスぺースが余るんじゃない？」

裕也は三枚重ねのティッシュで口を拭きながら言う。

「あの人の話はまだ決定的じゃなかったろ？」

オレは本日四杯めの麦茶を注ぎながら答えた。これしか答えは思いつかないのだ。

「だな」

大翔さんからの話を要約すると簡単なものだ。それ故に不気味さが増すというものはあるが。彼の健康的だった友人は、ラトルのケーキを購入して以来具合が悪くなった。

そして重病と気が付いた時には手遅れで、先月亡くなったという。さらに、その奥さんも同じ日から心臓の痛みが気になるようになり、同じく先月夫を追うようにして息を引き取ったという。特別変

わったことはしておらず、原因はケーキぐらいなのだろう。

警察は相手にしないであろう話だ。だが、もしもラトルが原因と分かれれば立派な殺人事件となる。

現に圭護ら三人は、これまでもラトルについていろいろ聞いている。

つまり信じたというわけだ。ラトルのケーキが原因である、と。

「でもさー、これから更に人を探すたってそううまくいくかなあ。手っ取り早くラトルに押し掛けて調査すればいいんじゃないの？」

「なんの調査だよ？ ケーキに毒物が入ってないかって？ それともオーナーがケーキを買った人を殺していないかって？ 馬鹿馬鹿しいだろ。それに考えてみる、もしこの事件がすべてラトルが原因なら、オレ達が危険になるだろ」

飛んで火に入る夏の虫、だな。オレは確認するように憧れの人を見た。

しかしそこには誰もいなかった。慌てて周りを見渡すと、公園へ歩く裕也を見つけた。

「お前っ勝手にどこ行くんだよ」

裕也は公園から少し離れたところで立ち止まる。緩慢な動作で振り返ると、首だけで二人を呼び寄せた。

オレは勿論従わなかったが、トコトコ拓が歩き出したので仕方なく付いていく。

「どうしたの、裕也？」

「情報収集だろ？ こういう公園に何か知ってる人がいないかなってな」

「RPGで言う酒屋みたいな？」

裕也は無言でうなずいた。あきれんオレに構わず入ろうとした二人を止める。

「まずは、話しかける人決めてから行くこつぜ。うろろろしたら怪

しまれるだろ」

二人は素直に従った。こうだからこれまでやってこられたものだ。「あのベンチに座った女の人はどうだ？ ケーキが好きそうじゃないか？」

「見ただけで解るって圭護なんか怪しいー。まあいつか、俺が行けばいんだよね」

拓は爽やかな笑みを顔に張り付け、公園に入って行った。無論、小さな苛つきを起こす皮肉は聞き流す。オレと裕也は、なるべく自然に反対の入り口へと回った。

いきなり三人で行くと、それこそ警察に通報されるかもしれないからな。

「はい？」

当然の反応だろう。いきなり来た三人組と手を結ぶなんて、普通は考えられないからな。

だが、我らが好青年拓は言葉を継いで、説得にかかる。

「お姉さんはその男の人を探したいんでしょう？ 多分その人は市内にはいると思う。だけど、一人で探せる範囲じゃない。三人加われば心強いんじゃないかな。それに、俺：僕達は調査をあと四日で終わらせなくちゃならない。お姉さんも興味あるラトルについてのね。だから、お互い協力したら絶対プラスだよ」

下手だが純粋な長いセリフに、瑠衣と名乗った女性は微笑んだ。

しかし、それは心なしか淋しい笑みに見えた。

会社の制服であろうベージュの服に、赤いハイヒール。軽くうねった髪、オレは好みのタイプだと不純なことを考えてしまった。裕也は冷たい眼で後を続けた。

「大体にしてあんた一人じゃ無理だったの。警察に言えばいいのによ。それほど意地はる必要のある相手なら、とつくに告白してりや良かったんじゃないの？」

告白、という言葉に瑠衣は反応して顔を赤らめた。これ以上みて

いたら本気で恋に落ちそうな予感がする。

けれども、この女性は部長が好きらしい。失恋決定だな。

「あつあなた達に私の心を話す必要はないです…。部長だって一人で見つけて見せますよ。貴方達はラトルの調査をしてればいいんじゃないですか」

どうやらこういふ話題には苦手らしい。

裕也は飄々と返す。

「あんたの照れ隠しで俺達を見誤れても困るんだよ。まあ、探すのは一人でやってもいいから、ラトルについて知っていることもつと教えてくんね？」

年上に対してこの強気な態度はどこから生まれるのだろうか。だが、お陰で言いたかったことをすべて言ってくれたようだ。

瑠衣は俯いて考えこむそぶりを見せた。本気で悩んでいるようだ。何を悩むのかはよく分からないが、何か特別なことを知っているらしい。

「…多分私しか知らないと思うんだけど、オーナーに一度だけ厨房に入れてもらったことがあるの。気が合ったからね。…そこで少し怪しいものを見たんだけど」

オレは急いで心のペンを手に取った。拓は隣で眼を輝かせている。

「言つて良いのかしら…あの、張り紙が貼つてあつてね。なんかの宗教みたいなイラストと、誓いが書かれていたの。その誓いは遠目で少し見た程度なんだけど…見間違いじゃないければ、『この国を変えて見せよう。そしてあなたに誇りましょう』つて。宣伝文句でもないし、血文字に見えたのよね。もしかしたら何か恐ろしいことをやっていても変ではないと思うの…なんて、それだけよ」

明るく締めた彼女も内心心臓を落ちつけようとしているかに見えるた。

拓は冒険に足を踏み入れる直前と言わんばかりに顔をほころばせ、裕也は興味無さそうに空をみつめている。勿論オレは心のメモに書

き留めた。

どれほど信憑性の無いことでも、今なら信じられる。

間違いないことは、ラトルが事件の裏にあるということだ。短期間に何人もの証言が得られたのだから間違いない。

彼女はそろそろ行かなきゃと言って立ち上がった。

「何か手伝ってはいませんか？」

拓が嬉しそうに言う。オレも何かしてやりたかった。そして裕也も同じ気持ちであると判っていた。

顎に指先を当てて、演技のように上を見考えてから、彼女は言った。

「…じゃあ、人探しを頼みましょうか」

彼女は決心したようだ。少し明るみの増した顔で笑う。

「その人の外見教えてくれない？」

裕也がもつともな質問をした。オレも賛成する。

携帯を取り出して、彼女は写真を見せた。荒い画像ではあるが、しっかりと人物を見ることができた。

「送るから携帯貸して」

間もなく携帯に送られてきた画像を見て、オレはため息をついた。見つけるのが困難な普通の顔であったわけではない。

負けを瞬時に認めさせられるほど、格好のいい男性であったからだ。

母親がホットミルクを持ってきた。光る画面については何も言わない。

誠矢はあれから五時間が経過していることを確かめ、眼をこすった。

「…無理はしないでね」

まるで夫を気遣う妻の台詞だ。誠矢は一瞬よぎった考えを叩き出した。頭を拳で連打する。母親が出て行ったあとでよかったというものだ。

「馬鹿だ馬鹿だ…大馬鹿だ僕は…」

父のことは毎日考えなかつた。いや、考えないようにしてきた。だが、人の心はもろい。少しの油断で液体のように秘め事が漏れだしてくる。

誠矢はため息をのみこんで、画面に向かった。先程からさほど変わらぬ市場へアクセスする。

オーナーがどれほど株に通じているかは図りようがない。しかもう少し検討するべきだった。彼はあらゆる株主を操り、今の資金を手に行っているのだから。

誠矢が異変に気が付いたのは二時間前の、午後三時のことだった。丁度休憩を終え、オーナーの逆襲に備えようとした時、事は起こった。

ひと段落つき、少しずつ回復を見せるかに思えた企業は、二度目のチェンジの暴走に食い荒らされた。

誠矢もこれには対応ができなかつた。どうやらオーナーは策を変え、結託した株主と多方向から株を買い漁り始めたのだ。

次々と周りの株価が急落する中、誠矢は呆然と見ているだけだっ

た。何故なら肝心の オーナーにあまり資金が入ってこないからだ。音をたてて崩れ落ちた数多の会社、ニユースは速報で埋まることだろう。

時間にして六分、同級生が持久走を走る間に株市場が一変してしまった。

裏で金を回収しているであろうと予想した誠矢は暗記したパスワードを打ち込み、チェンジの資金を確認した。

同時に見た株価は、エラーが引き起こしたとしか思えぬ額を示していた。

明日から全ての店で価格が高騰するだろう。

無差別な株の買いあさりは、商業工業農業すべてに影響を及ぼすであろう。誠矢は動けなかった。

自分が引き金を引いてしまったのだ。日本中のマスメディアが、新聞がニユースが、間接的に自分を責め殺すだろう。

指の震えがキーボードに伝わった。

「強敵なんかじゃなかった…敵何て呼べる場所にいなかったんだ」
母が持ってきたミルクは、静かに湯気を立てていた。

大きく息を吸い込み、頭をフル回転へと持ちかける。

（こんなんじゃないだめだ。自分が仕掛けた勝負だろう、最後までやりとおせ）

カップを掴み、中身を飲み干す。軽快な音と共に体が潤ってゆく。部屋中に響くほど勢い良く息を吐いた。体中がリセットされる。

「再開」

誠矢は前髪を払うと、パソコンの電源を切った。

短い間だったが、混乱と一緒に味わった会社の悲鳴が追いつがるように耳についた。

ネットの世界ではもはや歯が立たない。誠矢はそう確信していた。自分の武器としていただけに、その現実には痛いものだった。

午後五時、まだ外出が許される時間だ。

誠矢は母との門限だけは守っている。勿論、パソコンの使用許可と自分の口座を持つことを交換条件にして、誠矢が飲んだのだ。

父が残したキャップをかぶり、スニーカーを履く。

水音がして眼をあげると、去年露店で買った金魚が空気を求めて泳ぎ回っていた。

誠矢はフツと笑った。

身近なことに笑うのはいつ振りだろうか。誠矢は引きずりながら靴に足を押しこむと、合いカギを指にかけてドアを開けた。

後ろに母が立っていたことにハツとしたのは、出ていく寸前だった。

「いつてらっしゃい」

夏の新緑を連想させるワンピースを着た母は、淋しく微笑んで重いドアに消えた。

何処に向かっているのだろうか。自分でも誠矢はわからなかった。

いったい何をしているのだろう。誰に会おうとしているのだろう。

「誰に…… ああっそうだよ」

突然目的が浮き上がった。はっきりと会すべき人間が思いついたのだ。

けれども、誠矢は電信柱に腕を掛けて急停止した。滑りにくいスニーカーが煙を上げる。

「何処に行けばいいんだっ」

独り言は好きじゃない。軽蔑している方だ。観察していると、人間はよく独り言を言う。だが今知った。独り言とは無意識に出るのだ。

そして自分の現状を確認し、励まそうとする。

冷静に考えたところで、誠矢は悩み始めた。

考えるという日常行為と違い、悩むことは苦手だ。出口の無い迷

宮のように、行き場の無い不安が湧き溢れてくる。

「ううああああああっ」

久しぶりに叫んだ。それも電信柱にもたれ、地に向かって。馬鹿馬鹿しい凶だ。我ながら自分が主人公であるこの絵を今すぐ破りたい。

「大丈夫…？ って君か」

聞き覚えのある声に顔をあげると、そこには…。

「一度会いたいと思っていたんだよ、ネットのライバルとしてね。休憩時間でよかった」

差し出される手に掴まれ、電信柱から引きはがされる。

できれば、一番近くにいたくない人物。バニラの香りが路地に漂う。二言目で、相手がすべてを知っていると感じた。

男の手を振り払って乾いた声で言う。

「株市場は放っておいても余裕ですか？」

「君が一番よく知っているだろう？」

誠矢は、怒りを込めてそこに立つ男性を睨んだ。

こいつがすべての元凶で、日本どころか世界中の市場を荒らした。だが、そんな誠也など気にならないように彼は続ける。

「私は君が気に入ったんだよ。その年でよくあれだけ奮闘したものだ」

笑って言うその顔はあくまで素顔でありながら、裏の顔をちらつかせる。

「まだ終わってませんよ、オーナー」

和人世はふらつきながら歩いていた。心臓を締め付けるように押さえ、横になる場所を求め歩く。

「道化だ…フツ…自分で踏み込んでこのざまだ」

和人世はこの胸の痛みの原因は予想が付いていた。休憩室の散薬、そして比坂が淹れたコーヒ―。

あのとき、うまそうに飲んでいた自分を絞殺しに行きたい気分に戻られる。

昼食の時であった。またも胸が痛みだしたのは。そのまま病院へ行こうと会社を出た途端、痛みが嘲笑うように勢いを増したのだ。

風は南西、微力、日光は日焼け注意。今朝の目覚ましニュースはそう告げていたであろう天気だ。

「三島、調べてくれてありがとう」

死ぬかもしれないと思った。誰にも看取られずに死ぬかもしれないと思った。

妻の不安そうな顔が目の前をよぎる。腕にはペチユニアが束ねられている。もう記念日は来ないのね、と唇が動いた。

横河が笑いながら歩道で書類をぶちまける。通行人に踏みつぶされる白い紙に、手をひらひらと振っている。ガラス窓越しに、松園は妻と一緒にテラスで外食をしている。

通り過ぎるすべての景色に幻影が混じった。

前後不覚に陥り、呼吸はリズムを忘れる。ふと、地平線のビルの端に赤い星が瞬いた。

「ばあちゃん…サソリ…」

意識が落ちる寸前見たのは、駆けよってくる美しい主婦だった。

重たく眼が開く。空気がこれでもかと乾燥させた眼を瞬かせて、

四肢の感覚を確認する。どうやら死んでいないようだ。頭を持ち上げる。

予想に反して自宅であった。首を回してみるが、誰もいないようだ。

目の前には、頭痛薬らしい錠剤とお粥が用意されていた。

置いてかれていた、という表現が適切だろうか。

「いただきます」

仄かな温かみと、蕩ける米の食感。夢中で蓮華を動かしているうちに涙がこぼれたきた。

体験したことのない、粒の涙。

死を間近に感じたのだ。一步先の奈落から逃れられないと覚悟したのだ。人生の眼をつぶってみたのだ。

だが、生きている。

「……美味しい」

思い返すと、朝食を食べてこなかった。妻は先に出勤していたのだ。

袖で涙を拭きながら、完食する。胸には違和感すらなく、体中から汗が飛びでんばかりの力が湧いてきた。

「生きてる！」

一生のうちきつと言わぬであろうと思っていた言葉を叫ぶ。鳥の声が返事をする。カーテンを通して木漏れ日が揺れる。

こんなに落ち着いた時間は久しぶりであった。

最後の記憶にあつた主婦の正体を確かめようと思いたすが、思い当たる女性はいなかった。仕方なくため息をつき、体を伸ばす。

だが、余裕を持った頭は一番考えなくなかった点を引っ張りだした。

「比…坂……………」

体が震える。燃え上がるような熱い怒りに体が振動する。

一つ不明なのは、これが一番大きいのだが、何故比坂が自分に毒

を持ったのかということだ。殺されるほど大きな恨みを生み出した覚えはない。

白いシーツを撥ね退け、確かな感触のする地に立った。

背広のまま眠ったせいかな肩が凝っている。

「昔は紗枝がマツサージしてくれたもんだ。あの下手な手つきで

…」

頬が自然に上がった。妻は頑張つて小さな手で和人世の肩を揉んでくれたのだ。

お礼にとマツサージした和人世に、妻は火山の如く、強すぎると怒鳴つたのだ。あれから二度と夫婦間でマツサージが行われたことはない。

時刻は二時。これから会社に行くつもりは毛頭なかった。和人世はこの地域に蔓延している噂を耳にはしている。

「ラトルのケーキを食べれば運命が変わる」

偶然か必然か、モンブランのケーキを買ったあの瞬間に胸が痛んだのだ。

比坂はあの店に絡んでいるかもしれない。それに気が付いているのは自分だけかもしれない。

推理小説を読んで身近なものを理論的考えるように、和人世は考えを巡らせていた。

結論、立ったままの足がしびれたところに浮かび上がったそれは、ラトルが何か秘密を握っているということだった。

「暴いてやつてもいいんじゃないのか？」

玄関のチャイムが鳴った。寸前の考えの所為で、正に死ぬほど驚いた。

玄関に向かい、履きやすい靴を選んでドアを開ける。久しぶりに見る顔がそこにあった。

「久しぶりだね、おじさん」

夏の背景に輝く甥はずいぶん背が高くなっていた。靴も厚底でなく、黒を基調とした現代のデザインだ。

和人は後ろに下がって彼を通した。

「仕事は休みですか？」

「死ぬより休んだ方がいいと思ってな」

クッションを脇によけ、長い脚を曲げるようにして彼は腰を下ろした。

和人は壁に肘をつき、そんな彼をみつめる。

「おじさんは死にませんよ。俺を投げたこと覚えてます？」

覚えている。あれはまだ彼が中学生のころだったろう。興味本位でタバコを吸おうとした彼を偶然見つけた和人は、高校時代の柔道を蘇らせて、彼を投げ飛ばしたのだ。

「あの後ラーメンでチャラにしただろ？」

「俺も安かったですよ」

二人は表情が柔らかくなった。和人もようやく彼の向かいのソファに腰掛ける。

脇のテーブルからコップと紙カップのコーヒーを渡すと、彼はすぐに飲み始めた。上下する喉を見て、本当に大人になったのだなと感じた。

一息で飲んだ彼がもう一杯つぎ込む間に、和人は尋ねた。

「で、突然どうしたんだ、大翔」

理解出来ないオールバツクの髪を掻いて、大翔は軽快に笑った。

「ハハハ。相談したいことがありますねっ」

コップがテーブルに触れると、コーヒーが波打つ涼しい音が響いた。

チャプター30 厨房の深部

ライトを落とし、外との温度差を感じさせる店内に客はいない。
(さて、どうしたものか)

目の前に立つ少年を見ながら、男は作業着を握りしめる。
内心未だ男は信じられなかった。自分を追い詰めた相手がこれほど小さな子供だとは。また、その子供がこの店の常連であるとは。若い茶に染まった髪は風を受け入れ、黒い眼の奥に蒼の瞳が光り、こちらを見据えている。年齢は十歳前後であろうが、錯覚するほど子供離れした雰囲気を持っている。

「…警戒もせずに観察ですか？」

無表情で言うその言葉遣いも、男にとっては興味深いものだった。もう少し早く出会っていれば、いや、こうして話す機会を作っていれば、敵意などなく協力できたかもしれない。

(あきらめるのはまだ早いかな?)

「声を出す方法を忘れたなら教えましょうか」

「安心してくれ、この通り話せるからな」

背後の厨房では、彼女が新商品の試作に取り組んでいる。この時間まで残っているのは珍しい。彼女は午前のみという条件で働き始めたのだ。この状況を楽しんでいるのだろう。そういう女だ。

男は首を左右に鳴らし、待機用の椅子に腰を下ろした。右手で少年に座るよう促す。予想と違い、素直に隣に座った。

「聞きたいことがある」

「一つですか？」

「一つともいえる。何故あんなことをした？」

少年は男を視界にも入れず、前を見つめ答えた。

「卑怯な質問ですね。全て答えなければならぬんですよ」

いったん区切ると、少年は呆れるように眼の力を抜いた。

「理解できるとは思えませんがね」

そこで、男は反応を見るため口をはさんだ。

「私の理解は問題じゃない。私は君をいつでも潰せるし、いくらでも方法はある。だが君は無力だ、口答えは無駄だろう」

空気が止まった。共に息を殺し、相手をつかがった一瞬だった。

先に息を吐いたのは少年。

「…知りたいだけだ。…あの事件が何で起きたのか、何故父は…去らねばならなかったのか。母の苦勞は何の所為なのか。人間はどこまで馬鹿なことをしてしまうのかをねっつ！」

話すごとに熱がこもる言葉は、他者を圧倒させる威力を放つ。先程までとは異なり息の荒くなった少年は、些か冷静さを見失ったようにも見える。

男は黙って待った。

「貴方も笑っているんじゃないやありませんか？ 人間が時に…常に起こす馬鹿な行動の愚かさ。気付いた時に、責任から逃れようとすると醜さ。その癖、優位に立とうと争う浅ましさ、卑しさ。…くだらない馴れ合い。…それなのに理解出来ない真相がある矛盾…いつだって真実は人間が作るくせに人間が隠してきた。ただそれが知りたいただけなのに、時と共に生まれる無数の障害共…」

今度は徐々に憎しみが込められてきた。男は静かに聞いている。

だが頭の中では、この少年の気持ちを感じていた。過去に理解出来ぬことがあったのだろう、それが許せぬことでしかし真相は決して現れず、探す日々を過ごしてきたのだろう。

男は笑みが漏れぬよう必死でこらえた。

(…こういう人材を求めていた)

素顔を気付かせぬよう、顎に手をあてる。少年は、今や自分を抑えようと必死に見えた。

厨房で金属音がリズム良く聞こえる。彼女が生地を泡立てる音だ。

「つまらなかつたよ。何にも出てきやしなかつたから。だから……」
少年は男の眼をまつすぐ見た。

「貴方は突然できた道だった。これに勝てば何か得られるんじゃないかってね」

前髪が眼にかかり、顔の半分は陰で隠れていたが、少年の表情を確認するには十分だった。そして話も十分であった。

「手口はすべて確かめたよ。よく私の暗証番号を見つけたものだから面白い作戦だったけど抜け道はいくらでも考えられた。知り合いの企業が配下で動いてくれたからね。あの企業は忠実に従った。勿論私は金に興味はないから、君が見失った差額はすべて分配したがね」

「大企業だけでなく中小企業まで巻き込んだのは、炙りだす為ですか」

「君をか？　そう考えるならそれが答えかもしれないな。私も暴走したわけではないが、正直焦っていたからな」

すべての言葉が真実ではない。しかし、ある程度信用してもらわなくては進まない。男はもどかしさを感じつつも、少年が気を許すまで話すつもりだった。

「そろそろ答えたらどうです？」

男は声色が変わった少年に寒気を覚えた。

「何で僕を此処に入れたのか」

ファンが止まる音がした。男が五時半に止まるよう設定していたのだ。まだ夏の本番ではない、夕方には温かみを演出するためだ。今、男は厨房の奥部に立っている。隣には少年がいる。

前に貼られた古い紙に、隣の人間は何を感じているだろうか。「くだらない」、そう一蹴で出来るほど冷静ではないと読んでいた。

「私にも上の人間がいる。彼は私に命じたんだよ」

「何を？」

急かすように尋ねる少年に男は笑いそうになってしまう。

簡単に教えると思っっているのだろうか。簡単に教えてやろう。

「この国のすべてを崩せ、とね」

息を呑む音でなく、息が漏れる音がした。それが理解を超えた者に対するものなのか、憐れみのものなのかは測りかねた。

「貴方はできるだろうね。小さなケーキ店で訪れる客の人生を変え、株市場でのほんのお遊びで世間を揺るがし、こうして余裕持って秘密を明かしてしまうのだから」

笑って済ませられる言葉ではない。この少年はやはり私を観察してきたのだ。男は急に不安を覚えた。幼い子供が気付いたならば、他にも気付くものは出るのではないか。

不安はすぐに興奮に変わった。

（結構だ。立ち向かって来てみればいい）

男の口の端は持ち上がっていた。

「きづかれはしない」この言葉が崩れたことに、意味を感じてはいないのだから。

チャプター31 流れる気持ち

瑠衣は川沿いの遊歩道を歩いていた。

小一時間前いた青年達と別れ、ようやく熱が冷めてきたのだ。

「なかなか面白いことになってきましたな」

先日見たドラマのワンシーンを真似てみる。嘲笑の笑いが後から生まれた。あれは主人公の女刑事が、犯人に裏を掻かれる寸前の台詞であった。

余裕を見せたから逆に突かれたのだろう、瑠衣はそう思ったのだ。潤いのある風が水をすり抜け吹きあがってくる。瑠衣の丸みを帯びた髪は柔らかく毛先を浮かせた。

赤いヒールが何かに引つ掛かり、ゆっくりと瑠衣はこけた。

「痛い…なんなの？」

左足をさすりながら、自分を転ばせたものを探す。眼に入ったのは籠のバックだった。小さいとはいえず、これに躓いたとは恥ずかしく、顔が火照った。

バックの先に人影があった。艶のある髪が風を受けて美しく靡いている。何処となく、瑠衣は見覚えがある気がした。

不意にその人が振り向き、髪でほとんど隠れた顔から声を発した。

「瑠衣…じゃない？」

それは喫茶店で聞いた時の声だった。

籠のバックを持って道脇の斜面を下りるのは、至難の技だった。ヒールを脱いで降りることも考えたが、意地でもそのまま行きたくなったのだ。

「偶然…よねえ？」

「つけられたとでも言うんですか」

時は訝しげな眼をしながらも、赤い唇を持ちあげて笑った。側に

立った瑠衣は改めて彼女の魅力に目を奪われた。

「丁度よかったわ、瑠衣に見せたいものがあったの」

そう言うと瑠衣の手からバックを取り上げる。時は慣れた手つきでバックの中を掻きまわし、目当てのものを探し当てた。それは一冊の日記に思われた。

「証拠よ。母が綴ったもの」

恭しく瑠衣はそれを受け取り、日焼けしたページを一枚一枚めくった。

そこには、毎日に感謝して楽しく過ごす一人の女性の生活が記されていた。同時に生々しいとも感じられ、瑠衣の背中に悪寒が走る。

「八月二日を見てくれる？」

「ほぼ一年前ですね」

最後に向かつてめくり続けるのは奇妙な感覚だった。早送りでの人生を眺めているようだ。

つまらない日だったわ、彼女の終わりの一日はその言葉から始まっていた。

欄外にまで溢れた文はこの日の重要性を示している。本が好きな瑠衣にとって、運命のページを読み終えるのに一分もかからなかった。

しかし、内容から何かを得ようと十分かけて読み返す。

「どう？」

時はほつりと言った。

「…普通です。あまりに普通で、怖く思える」

瑠衣は正直に感想を述べた。

八月二日。

つまらない日だったわ。

朝から嫌な雲が家を隠しちゃってて、洗濯物も安心して干せなかったの。チラシもないから買い物にも行けなかったわ。

トキから昼に電話があってね、仕事は上手く行っているみたい。

私に似て人にも好かれやすくだろうからね。

お隣の紀山さんがヒマワリをくださったわ。でも、その時紀山さんから聞いた息子の愚痴は耐えられなかったのよね。ヒマワリもしぼんでたんじゃないの？

おやつのかな粉ドリンクもまた悲惨だったのよね。きな粉が足りなくって、甘ったるい牛乳の味だったんですもの。

でも夕飯は上手く出来たわね。あの子はもっと凝ったものを作れって言うけれど、私には十分なのよね。

明日はビデオでも借りに行こう。レタスと牛乳が切れているし。テレビは見ちゃだめね。

嫌なニュースばかりで頭痛くなってしまつもの。じゃあ、明日の買い物忘れずにね。

「母は日記でも口調が仰々しくてね、私はからかったけど直さなかつたわ」

(雲、チラシ、電話、ヒマワリ…何も結びつかないなあ)

瑠衣はじっくりと考えていた。先程まで相談していた身の自分が、今こうして相手のことで悩んでいるとは思議だ。

下流の方で子供のはしゃぐ声と水音がする。道を超えた広場ではボールが飛んでいる。

突然、時が日記を瑠衣の手の中で無理やり閉じた。困惑する彼女に向かつて強気な口調で言い聞かせる。

「今すぐ解決できるわけないんだから、そうやって苦しそうに悩まないで。あたしもいきなりで悪かつたわ。また、喫茶店で会ったときにでも話しましょう」

瑠衣は時が、私とあたしを混合して使っていることに気が付いた。そしてもう一つ思い当った。

「ちよつと待って下さい」

そうして携帯を取り出し、赤外線準備をする。それを眺めていた時が鋭く言い放った。

「アドレスも番号もいらなし渡さないわ。貴方に深く関わってもらう気はないの。今まで一人で調べ続けてきたんだから」

瑠衣が淋しく目線を落とすと、時は慌てて付け加えた。

「もう猶予もないの、あたし。だから中途半端にかかわったら今後あなたに蟠りが残る。それはやなの。大丈夫、たいていあの喫茶店にいるから。それに、この数日で解決するわよ」

「何を根拠に……？」

明るく言う時に違和感を感じ、瑠衣は尋ねた。迷うそぶりも見せずに答えられる。

「比坂に明後日会うの。約束したの」

時の眼にはゆるぎない決心の炎が見て取れた。

チャプター32 陽炎と共に

日が下がってくると少し涼しくなる。オレは腕を伸ばして息をついた。最近鍛えてない血管の浮き出た手が目に入る。

「で、今なにしてんの」

拓は不満げに口をとがらせている。それももつともだろう。

一丁目から四丁目まで隈無く探し続けて、やっと出来た休憩は何もない丘の上。小さな大名の城跡らしいが、人気の無さが全て物語っている。

オレは裕也を探した。二分前に何も言わず全力疾走してから行方が判らない。

（あいつは憧れだが謎が多すぎる）

拓と手遊びを始め、お互い携帯をいじるだけになった頃裕也は帰ってきた。

「来い！」

開口一番それですか、オレ達は返事をする暇すら与えられずに後に続いた。拓はあからさまに汗を拭っている。真似して額を拭うとじつとりと濡れてしまった。

「裕也様ー、せめて一言謝って下さってもよろしくなくて」

オレが茶化しても裕也はそっけない。顔も向けずに言い放つ。

「何で謝るんだ？」

「オレも知らねーよ」

走ってばかりだ。半年前に買ってかなりフィットしてる靴のお陰で走り心地は悪くない。

「暑い暑い暑い暑い。疲れた」

しかし、後ろの拓青年は口に衣を着せようとしなない。多分、この言葉の意味すら知らないだろう。学力テストで二百番以内に入ったことがないのだから。常に一桁の裕也を見習え、声を出さずに毒づ

く。

相変わらず寡黙の裕也は余裕ある走りどころかへ向かっている。この不安定な気持ちは他人に指示されているからだろう。

（命令に従うなら海に飛び込んだ方がマシ）

親父が残したこの言葉はオレのモットーに引き継がれた。だが今は海はない。

「…見つけたんだ」

誰を、と訊くほど鈍感ではない。拓もその常識はあるようだ。単に聞こえなかったただけだとしても。

オレは次の言葉を待つて腕を振り続けた。本当はポケットにでも手を入れて軽く走るのが好きだ。そんなこと言ってる状況ではない。三本の分かれ道にきた。裕也が突然止まる。

「いねえ」

ちよつと待つてくれ。ここへ来てそれはなくないか。選択肢は一つだろう。

「俺右行くねー」

一番遅かったくせに拓はもう右手へ消えた。オレと裕也は顔を見合わせる。

一瞬早くオレが先手をきった。

「オレ真ん中がすきなんだよ」

裕也はニヤリと笑って、真ん中の道へ走り出した。

「じゃあ左行けよ」

（あいつは悪魔だったのか）

開きかけた口を閉じて、オレはポケットに手を入れゆっくり左へ向かった。

初めて来る場所だった。左に杉の木々が立ち並び、右は閑静な住宅街だ。いつの間にかのんびりと自分が歩いていることに気が付く。

「いけねーいけねー、いや、別に走らなくなっただけだよな」

言い訳を呟きながら歩いてみると、六度目の分かれ道に行き当たった。勿論前の方にある路を進む。

二十分は経つただろうか。遠くに人影が見えた。輪郭からして男らしい。オレは焦らずに近づいた。それこそ口笛でも楽しむかのよう。

男の顔が明らかになってくる。日によって陰が出来たその顔は見覚えがある。

「あんたさ…」

オレはこの間抜けな行為を一生恨むだろう。手を伸ばして警戒もせずにオレは言ったのだ。

「福原部長とか…言う？」

男は顔を上げた。写真と同じ顔だ。オレはその黒の眼にひるんだ。男は背広姿で日陰に休んでいたようだ。

「瑠衣か…」

聞き返す間もなく、男は素早く動いた。オレの首筋にしなる手首を打ちつけると、ふらつくオレを横目に走り去ったのだ。二秒とかんなかっただろうな。

首をさすりながら目で追っても無駄だった。男は陽炎の中で消えるように行ってしまったのだから。オレはただ立ちつくして携帯を開いた。

「バツカじゃないの」

息が切れているにも関わらず拓は罵った。あれから直ぐに携帯で連絡を取り、二人に男を追ってもらったのだ。帰ってきた拓は明らかに苛ついている。

「やっぱり俺が左行くべきだったか」

「ああ、そうだよ」

裕也は呆れ顔で見下ろしてくる。何故か、彼は階段の二段上に居るからだ。見下ろされるのはたまにがちょうどいい、呑気な自分の頭を冷やしたくなる。

結局捕まらなかったそうだ。オレが唯一のチャンスだったかもしれない。

「コブラツイストでもきめてやりたいよ」

拓はそう吐き捨てる。オレは本気で頭を下げて謝った。やりかねないからな。

「一応容姿はつかめたんだ…」

「写真と同じだったか？」

裕也は冷たく切り返す。神社の横で叱られるって言うのは、何とどうかやりきれないな。

「…ああ」

惨めな自分の声が聞こえた。

裕也は階段にどっかりと腰を下ろすと、どこからか煙草を出して火を点けた。白い息を吐く姿はモデル並に格好良い。だが今は取り巻く冷気の所為で近寄りがたい。

「何も言う気が起こらねーな」

暖かい息とは裏腹に口からは鋭い言葉が飛び出す。拓も怒鳴り散らす気すら出てこないようだ。

「…悪い」

気まずい時間が流れる。裕也がやっと吸い終えた煙草を足で踏みつけた時、拓が叫んだ。

「肝心なときにリード出来ないんだなっ阿呆」

拓は興奮が抑え切れていない。オレはとりあえず言ってみた。俗にいう言い訳、自分を守るために役立ちそうなことを並べる。

「奴さ、去る前に一言、瑠衣かって言ったんだよな。彼女がやってるってばれてるぜ。それに手刀、使える」

言葉の効果を待っていると、タンクトップの襟を掴み上げられた。相手は拓でなく裕也だ。

「言うのがおせーよ」

心なしか、裕也は笑って見えた。身長差により浮くことはなかったが、かなり苦しい。蹴り技を決めようと決心固まった時、裕也が

降ろしてくれた。落とされた、の方が適切だろうか。

裕也はもう一本煙草を出すとオレに投げつけて、走りだした。拓も俺も置いてけぼりだ。と思ったら、拓も走りだしていた。

「なんだよ全く……しゃあねえな」

オレは煙草をポケットに入れると、軽く足首を回して追いかけた。今日の裕也はおかしすぎる。それ以上に今日のオレの胸騒ぎが異常だ。

チャプター34 二人の女性

誠矢は地面を軽く蹴飛ばした。小さな石が跳ね返り、膝に当たる。

結局オーナーから有益な情報はそれほど得られなかった。どちらかと言えば、不気味なあ女性のの方が使えるかもしれない。ラトルの方を振り返る。

（馬鹿なオーナー。まだ味方にもなっていない者に秘密をああも話すなんて）

誠矢は体に震えが走るのを感じた。不快ではない、気持ちのいい震えだ。

来た時よりは薄暗い路地を、軽い足取りで進む。頭の中は溶岩のように絶え間なく動き続け、さまよい続けている。

しかし、目標の定まった今、この状況は決して悪くはないものだ。もうすぐ母を苦しみから救いだせるかもしれないんだ。眼を鋭くさせるとその視界に、ひらひらとした服が映った。

「ちよつと、用があるのよね」

忘れるはずの無い声が降る。誠矢は足を止めて、顔をあげた。カールした髪が艶やかに揺れる、若い女性が見下ろしていた。

「喫茶店に来てくれないかしら」

彼女が指さした先には古びた建物があった。読めない英単語が書かれているが、意味はないだろう。

「サラダがあるなら行ってもいいですけど」

誠矢は彼女を待たず右足から歩きだした。

喫茶店は興味深いものだった。明らかに日本製とは思えない小物が立ち並び、デザインの良いカウンターが店の空気を調節している。

「飲み物はコーヒーで良いかしら」

女性が奥からカップを持って出てきた。従業員だったのか、エプロンを纏っている。

「苦いものは好きじゃありません」

誠矢はむすつとして言いのけた。彼女の顔に明るい笑みが一瞬広がる。栗野はあまりに美しい笑顔に、目を奪われてしまった。そんな自分に侮蔑の言葉をぶつける。馬鹿じゃないのか。

「じゃあ、夏ミカンジュースにするわ」

一分後、少年はオレンジ色に輝くコップを口に付けていた。あの男達と行った喫茶店の飲み物とは比べ物にならない、上品な甘さに感心する。

まあ、母のジュースほどじゃない。

気分を落ち着けて、前を見た。カウンター越しに藍色の眼が光っている。

横目で見ると、少し薄暗い切り取られた世界が浮き上がっていた。楽に足を伸ばすと、自分から声を出した。

「ラトルについて何が聞きたいんですか」

「そりゃ、ラトルから出てきた直後に声をかけられればそう思うわよね。でも違うの。あたしが聞きたいのは比坂のことよ」

頭に疑問詞が湧く。

「誰ですかなんて言わないことよ。貴方は何度か接触しているはず」

栗野は椅子から飛び上がる速さで立った。過敏な神経が冷や汗を促す。

頭が痛かった。目眩がする。己の過ちとくだらなさに笑いすら口を閉ざした。

「まさか…貴方達は同一人物ではなかったんですね」

走馬灯のように、夏の昏間の映像が蘇る。声を掛けられたのは喫茶店を出た時だった。そして、オーナーと戦う術を与えられた。

双子か…もしくは他人の空似と言う奴か。

観察してきたんじゃないかなかったのか、僕は。見分けすらつかなかったのか。

腑抜けた顔であろう自分に、彼女は心配げな声を掛ける。

「同一人物ってどういうこと？比坂について聞いてる…比坂とあたしが？」

はっ、気味が良いほど驚いた顔だ。

「…本当に気が利きすぎる子よね。瑠衣とは大違いだわ」

迷う間が空く。欠伸も出ない。

長い溜息が耳についた。と同時に彼女がカウンターからこちらへ飛び込んできた。

美しい軽業に口笛が出そうだな。カウンターに手をつくると羽の如く足を振り上げ飛び越えたのだ。

顎を掴まれる。なんで、こんなことされなきゃいけないんだ。

「確かにあなたの予想通りよ。あたしと比坂は気が付かないほど似ているかもね。勿論同じ服で髪型がそっくりならの話だけど。ええ、ええ双子ですよ」

声色が変わった彼女を一瞥する。

誠矢はポケットから細い金属を取り出すと、彼女の腕に刺した。皮膚を貫通はしないものの、かなりの激痛が期待できるはずだ。

案の定、顎は解放された。腕を抑える女性がよるめいている。

「…っ頭がいいのね。護身用の武器まで隠し持ってるの？」

「武器とまでは言いませんが、死んだら今までの経験が無になりますからね」

誠矢は尖ったUSBカードを手の中で転がした。

「僕は比坂と言うその人に助けられました。双子の貴方も知っているかもしれませんが。僕よりあなたの方が彼女については詳しいのでは？」

「あたしはトキ。母を殺された。比坂を…この世から消す女よ」
面倒くさいことに巻き込まれそうだ。

それで僕に情報提供を頼むのか。十歳の少年に何を期待している

んだ。

教師と言いこの人と言い、見かけで判断するのはやめて欲しい。

「あんたは、比坂の秘密を知っているはずよ」

「ええ、ラトルの従業員ですとか。オーナーの暗証番号を何故か知っているとか。変装が得意とかですかね」

机が揺れた。思い切り彼女が叩いたらしい。

「あたしは本気なの。比坂の弱みが欲しいの。さっきあんたは何を聞かされたのよ」

耳が痛いし、目も痛い。この人に掛ける言葉は何だろうか。

過剰な期待もいとこだ。僕は第三者だぞ、それだけ感情を見せてどうするつもりだ。

ドアが勢い良く開き、中年の男が入ってきたのは突然である。

今は閉店中だと言うトキに、男は冷たく言い放つ。

「悪いが、立ち去らせたければ力づくで頼む。俺からは出ていけないんだ」

なんで、面倒なことは積み重なるのだろう。

誰も僕の行き先に立ってくれるな、忌々しい。

和人世は背の高い甥と共にパソコンに向かっていた。

元々和人世が大翔に機械関係は教えてきた。初めに彼が教わりた
いと言ったのは、電卓の使い方だった。四歳の時だっただろうか。

まだ習っていない筈の計算どころか、六桁の掛け算まで意味を理
解してやってのけたので、随分驚いたのを思い出した。

大翔が声変わりを果たした声で言った。

「ここだよ、おじさんの会社も載っているだろう」

彼が示したのは、株市場ではなくあるリストだった。見覚えの無
いもので、黒い画面に白い文字で浮き出された数多の会社は不気味
なものがあった。

「何：のだ？」

大翔が髪を撫でつけながら答える。よく見ると少し金色が混ざっ
ていた。

「俺も詳しくは知らないんだけどさ、最近出てきたアブナイ会社
『チエンジ』なんて比較にもなんない位のでつかい奴。で、調べて
みたらかなり怖いところだったんでさ」

隣のタブを開くと、奇妙な条文が美しく並べられていた。内容は
笑えるものだったが、唇が持ち上がることはなかった。

「多分これ書いたのが、今回騒ぎを起こさせた張本人だろうね」
ページの一番上に、血を連想させる赤で打ち込まれた名前。

目眩を呼び起こしたのは、その名前に見覚えがあったからだ。
和人世はふらつきながら、テーブルに向かった。そこに置いてあ
るコーヒーはもう人肌になっていたが、一気に飲み干す。

大翔はコーヒーの淹れ方に関してはプロであった。だが、その濃
厚な味わいも今の和人世に届くことはなかった。

「…何人に言った？」

大翔は予想していたように切り返す。

「誰にも。俺が信用してんのはあなただけだからさ」

大翔はその間にも次々とフォルダを開いていった。共通して並ぶ文字がある。あまりに単純で、恐ろしさのかけらも感じさせないある単語。

(モンブラン)

和人世はテーブルに着いた腕の間からそれらを見ていた。

今日は止まることを勧めたが、大翔は丁重に断って退出した。和人世は何度も礼を言った。真実を教えてくれたことに対してと、今夜一人にさせてくれることに対して。

「よく話し合ってくれよ、おじさん。じゃなきゃ何のために此処に来たのか」

大翔は茶化したように付け加えて、繁華街の方へと去って行った。

「あんまり首を突っ込むなよ大翔……」

もう聞こえるはずもない距離で、和人世はつぶやいた。重いドアを閉めて、我が家を見渡す。

靴を脱いで上がると、壁に掛けたカレンダーの隣に、去年の写真があつた。

妻、紗枝と行った海外旅行の時写したものだ。何の気なしに眺めていると、鍵を開ける音が背後から響いてきた。

無機質な音の重なりが途絶えると、愛する女性がそこに現れる。

「あら、道理で鍵が開いていたと思つたわ。もう帰っていたのね」
紗枝、和人世は口を動かした。彼女は買い物袋を二つ持ち、いつもと同じ目線で自分を捕えている。

(いや、同じはずはない……)

つい一週間ほど前までにはあつた、ロマンチックさをうかがわせる輝きが欠けていた。

しばらくの間、二人は無言で見つめあつた。

そして口火を切つたのは、妻の方であつた。

「お帰りなさい、早かつたのね」

「ああ、聞きたい事があるんだ」

リビングの机を挟み、これから何を話せばいいのか和人世は決めかねていた。だが、妻はそれを感じ取ったらしい。

まっすぐと自分を見詰め、話し出すのを待っている。伸びた睫毛の毛先も自分に向けられている。

「…あー、あるサイトを見てな」

もっと強気な声でも良いだろう自分、そう思いたくなる声だった。

「そのサイトには、今回の株騒動の首謀者らしき人物の名前が出ていたんだ」

妻の眼が艶やかに動く。その視線はピタリとパソコンに定まった。

「あたしの名前でも載っていたのかしら？」

その言葉はパソコンを射抜き、跳ね返って和人世を貫いた。

心臓の鼓動が速くなる。また比坂の薬が働いたのか、と呼吸を落ち着ける。

「何故そう思うかは分からないが、お前の名前はなかった。代わりに…」

紗枝は感づいたようだ。目を見開き、口元が力なく開く。

「今お前が予想している人物の名前が載っていたんだよ」

大きな音と共に椅子が倒れた。勢いよく立ちあがった妻は、椅子など脇目も振らずに寝室へ飛び込んだ。

去った時と同じように突然帰ってきた彼女は、手紙の束を抱きしめていた。

震える声が真実を告げる。

「あ、あ、あなたには黙っていたけれど、実はあたし…あの人と…」

紗枝の腕の中からパラパラと手紙が落ちる。どの手紙にもある花の切手が添えられていた。

「ペチユニアか」

泣きそうな目で妻が顔をあげた。和人世も椅子を引いて妻の下へ

近寄る。

久しぶりにゆっくりと見た彼女は、細い肩を震わせて折れそうなくらいか弱く見えた。

だが、やってきたことは何処にも弱さを感じさせない秘め事の集合だ。

「俺は責めないよ」

慰めるつもりが最大の攻撃となってしまうらしい。がくと崩れた紗枝は、生気の無い眼で紙の束を見下ろした。

もはや束とも言えないそれらは、妻からすべてを奪ってゆくかに見えた。

「あたしはね、ねえあなた。こんなことになるなんて思わなかったわ」

家の照明が一段と暗くなった。何も言わずに妻を抱きしめる。

愛する妻とケーキを食べようと思ったんだ。

あの夜に。あの記念日に。

それが発端となったのだろうか。

なあ、紗枝。どう思う。

裕也はやはり尊敬できる人だ。

オレは裕也の後から店をのぞきこんでそう思った。

裕也が走った後を追いかけて三十分、そろそろマラソンのフィニッシュだろうと思いついた頃、裕也がこの喫茶店に飛び込んだのだ。路地を曲がる時、確かにこのドアに入って行く見覚えのある背広は見えた。

だが、何で裕也が一発で見つけられたんだ。

「お初にお目にかかるな、福原部長だっけか？」

オレの思考は裕也の台詞に中断された。少し人より低い彼の声は、無駄に迫力がある。

店内には、探していた中年と見たことない女性と、何故か誠也がいた。

誠矢は呆れたと言わんばかりに、この状況を客観視している。あきれているのはどっちか考えて欲しいもんだな。

「まさか君たちにまで見つかるとはな」

福原部長とやらも、なかなか良い声の持ち主だった。オレは余裕を持ちたくてくだらないことを考える。

不自然に腕を抑えた女性は、オレ達を親の敵のように睨む。

（なんなら、お手上げしてやるよ。少なくともオレは被害者だぜ？）

拓が意外にも口を開いた。

「あんたさあ、レディを心配させすぎなんじゃないの？ おれだつたら殴りつけてるぜ、あんたみたいな男」

成長したな、好青年拓。オレも何か言うべきだろうか。

だが、オレの口を閉ざしたのはあの誠矢だった。

「あー、うつとおしい。うつとおしい。誰もじゃべしないで。僕が説明する」

恐ろしく的外れな発言な気がしたが、とにかく全員が黙った。

誠矢がカウンターの椅子に座ると、少年を除く全員がその周りに立った。

なんかおかしな光景だとかは、この際無視だ。

「さてと、まずは僕とこの身勝手な女の説明からするよ」

身勝手な女は、今にも殴りかかるほどの殺気を発したが、ただ誠也を見ただけだった。

「僕がこの女に出会ったのは今日が初めて。そして僕はこの女によく似た人を知っている。色々裏がありそうな比坂っていう店員だ」
全員が反応した。

(なるほど、集まるべくして集まったやつらか)

「今さっき聞いた話では、比坂とこの女は双子らしい。そして、この女は比坂を敵か何だか殺したがっている。まあ、想像づくに人を殺されでもしたんだろうね」

少なくとも人生で出会った女性方の中で頂点に立つ美女は、俺には理解しようがない過去を持っているようだ。

「まあ、復讐だのなんなのは当人に任せる。それで次に兄さん方が探していたこの男だけど」

裕也が唸った。福原はそれを見もしなかった。

「何だか知らない組織に動かされてるらしい。僕の予想じゃオーナーだろうね。それで、片桐瑠衣に会わなきゃいけないらしい」

拓が鼻息を漏らした。至極、不満そうに。

「じゃあ、会えば良いじゃん。瑠衣さんがどれだけあんたを探してんのか知ってるの？」

誠矢がゆっくりと拓を見た。あの蒼の眼で。

それだけで場の空気が凍り、話が元に戻った。拓は少し表情を固くした。

誰かこの少年の眼を解剖して見せてくれないか。

「で、この男の話を聞いている間に兄さん方が入ってきたってわ

け」

オレは頭を掻いた。髪の毛の中にアズの毛が一本混じっていた。もう一度頭を整理する。誠矢の話術は巧みで、随分シンプルにまとめられてあつたが、状況が状況なだけにやはり混乱する。

「しゃべっていいか？」

拓の二の舞を踏んでも時間の無駄なので俺は慎重に尋ねた。

誠矢が無関心に頷く。

「オレはただの仕事って立場からものを言うけどな、結局俺らでオーナー倒せばいい話じゃねえの？ そしたらこの部長も自由に瑠衣さんに会えるし、あんたも復讐がやりやすくなるんだろ？」

「兄さんって結構バカ？」

久しぶりに聞く侮辱だな。

「倒すの意味から確認しようよ。勿論殺人なんて言わないよね。そんな美しくない無駄な事に加担する気はないからね、そしてオーナーがすべてを握ってたとしたらなおさら倒しちゃダメでしょ」

その通りだ、全くオレは馬鹿だな。

空気を止めてすまなかった。

しかし、そんなオレに助け船を出したのが裕也だった。

「いや、そう否定することもないだろ。今の俺達に出来る事ってちまちまオーナーの客の尾行じゃねえよ。やっぱりなんか行動しなきゃなんねえんだよ。そして、こんだけ人材がいりゃ出来るんじゃないかねえの？」

反論が唯一の女から放たれた。

「ストップ。行っとくけどあたしは比坂さえこの世から消せればいいの。オーナーは邪魔だけこの際関係ないわ。利用できるならしたかったけど一筋縄の相手じゃないしね。あたしを巻き込まないで」

そこで冷やかな突っ込みが入る。

「あんたが僕を巻き込んだのは柵に上げるってことかな」

誠矢がジュースの入ったコップを壁に投げつけた。その横顔は温度が感じられなかった。

ガラスの破片が部屋中に散る。回旋するファンにぶつかり、窓辺の小物達に降り注ぐ。

「ドイツ製のグラスよ？」

「弁償は五個で良いですか？」

誰かこの賢者たちを止めてくれ。どうやら誠矢とこの美女は似た性質を持つようだ。

オレの願いもむなしく、現れたのは救いではなく混乱だった。

喫茶店のドアが開き、新たな七人目の客が現れる。

「あつれー、あんたらもいたんすか？ 一晩暇を過ごそうかと思つたのに」

髪を撫でつけて入ってきたのは大翔だった。けだるそうに店内を見渡す。

彼はこの状況をすんなり受け入れて輪に入った。

「今面白いことが起きてるんすよね、ネット上で」

びくんと動いたのは誠矢だ。

「その部長さん、あんたも自分の会社をちつとは心配した方がいいっすよ」

福原部長が腕を組む。何で部長って知っているのかは触れないでおこう。

「…どういうことだ？」

大翔はグルんと眼を回した。その仕草は道化師のようだったが、オレはぞくつとした。

「姉さん、パソコンくらいあるでしょ？ 貸して？」

丁寧に、請うように、甘えるように、しかし押さえつけるように大翔は頼んだ。

彼女は一瞬悔しそうにためらったが、動き出した雰囲気になんてそれを持ってきた。はやりの赤のノートパソコンだ。

大翔は慣れた手つきで、奇妙なサイトを広げだした。

その隣で呼吸が荒くなるのは誠矢と部長。

(ふうん、オレの知らないことを知っているやつがいるのか)

オレは脳内でペンを構えると、鋭い眼で画面をなぞり始めた。

おかしな夜が始まるな、それも大人数でパーティみたいに派手な夜だ。

チャプター37 袖子の弾力（前書き）

最終章の入り口となるので、大分量がオーバーしましたが、この先はこのくらいの目安となります。ご了承ください。

チャプター37 柚子の弾力

時と別れた後、コンビニにやって来た。瑠衣は新商品の塩チヨコレートを手に、三十分店内を彷徨っていた。

店内には客は自分と主婦だけだった。なるべく同じ通路に居合わせないようにしていたが、突然その女性がじっと見てきた。

瑠衣は丁度、夏限定ゆずグミに興味を示していたが、無視できずに見返した。

女性が遠慮がちに口を開く。

「そのグミを一つ頂きたいのですが」

「えっ。ああ、申し訳ないです。どうぞ」

瑠衣は拍子抜けした気分だが、同じグミを気に入ったその女性に、些か親近感が湧いた。

女性の方も未だ用が済んでいないようで、瑠衣の側を離れようとしない。

淡いピンクのTシャツと細い黒ズボンを着こなしている。丸くカールした髪は綺麗なブラウンで、俗に言う天使の輪が美しく光っている。

「突然で失礼かもしれないけれど、あなた…前にラトルにいましたでした？」

瑠衣は一瞬気が遠のいたかと思った。今日はよくラトルと言う単語を聞く。

「ええと、あなたは…？」

女性が可憐に微笑んで、軽くお辞儀をした。

「栗野美里といいます。あのラトルさんにはお世話になってまして。あなたのことを何度かお見かけしていたのですよ」

瑠衣は頬がいつもより熱くなるのを感じた。

「ケーキが好きなんです」

やっとそれだけ言葉が出た。美里は髪を揺らしながらくすくすと

笑う。

「私もケーキが好きなんですの」

瑠衣は思っていたことをようやく尋ねることに成功する。

「まさか美里さんで、誠矢君のお母さんでしょうか？」

美里は、少し目を見張って応えた。

「ええ、そうですか？」

瑠衣はもう一度気が遠くなる気がした。

美里と並んで歩きながら、誠矢について話した。流石にランドセルは拾ったと表現したが、自分の怪しさを拭うことは不可能に思えた。

「それで、うちの誠矢は一度もこんなお姉さんに出会ったなんて言っただけだったわ」

瑠衣は反応に困る。二人がいるのは六丁目で、ラトルは眼と鼻の先だ。

「でも、うちの子っていつもそうなのよ。私なんて眼にも入らないみたいで、いえ、あの子は父だけを見ているのでしょうね」

アスファルトが独特のマーブル模様を誇る中、美里の買い物袋が音を立てている。口の中ではゆずが爽やかな味を演出している。

「父って？」

二人の間に風が吹いた。美里はその風を追うように見送ると、一人で公園に入ってしまった。

六丁目の公園に来るのは初めてだ。園内はシンプルで、ペンキの剥げた滑り台と、どこか懐かしい木造りのブランコが音をたてて揺れていた。

それと砂場以外は何もない。

瑠衣は美里の隣のブランコに腰かけると、木々の匂いに包まれるから返事を待った。

「そうね、あれは四年前かしら。私の夫は誠実な商社マンでした。人一倍活力があつて欲の無い人、そういう夫でした。ある日、突然

父が不可思議な行動に出たのです」

美里の話が途切れると、葉のこすれる音だけが響いた。

既に日が山の中に隠れ掛けているので、大人が二人ブランコにいても目立つことはない。

瑠衣は体を後ろに持ち上げて、足の裏で砂に波を立たせていた。ざりり、と音が鳴る。

瑠衣が聞いているのを確認するように、美里は瑠衣の足元を一瞥する。

「これは他人に話すようなことじゃありませんでした、ね。忘れてなんて身勝手ですけど、今度もし会った時の為に取っておきますわ」

にこりと笑った美里は、清純でいて脆く見えた。一粒グミを取り出し舐める姿も、無垢であった。

「私は片桐瑠衣って言います。あなたの夫に何があったのか今は知りませんが、私の尊敬する人も今不可思議な行動をとっているんです」

そこで瑠衣はうつむいた。さつそく美里は気遣う声を掛けてきた。

「瑠衣さん、言うことで助けになるなら、お聞きしたいわ」

瑠衣は笑みを張り付けた顔で起き上がる。泣きそうな顔に酷似していたかもしれない。

「じゃあ、あなたの夫のことを聞かせてもらえませんか」

二人は無言のまま見つめあった。お互いに相手を試している。

心を許すか許さぬべきか見定める。結論が出たのは、太陽が完全に姿を消したその時だった。

乾いた眼を瞬かせると、美里が言った。

「いなくなっただけですの。私たちの前から」

瑠衣は舌の上で溶けるグミのことを忘れていた。

今この場がどこなのか、足元は砂なのかアスファルトなのか、風

は何処から吹いているのか、すべてがどうでもよかった。

今日の前にいる女性は、私の写し鏡のようだった。

「夫が姿を消したのは、此処に来て一年立った四年前。まさか、誠也の誕生日だったのよね。誠矢は父からものを教わるのが大好きで、そんな誠也を父も認めていましたわ。二人の絆は親子と言うより親友みたいで。お陰で今十歳になったあの子は大人に負けない度胸を手に入れたんでしょね。可愛くなくなっただわ」

おどけるように口をすぼめて、美里は眼を細めた。

「もつとね、二人を見ているんだっただわ。何を考えて行動してるのか、何をたくらんでるのか、とかですね。あの頃は私も仕事に没頭してたから、家族で出かけることすら少なくて」

瑠衣は指を無作為に動かしながら聞いていた。

「毎年のように、プレゼントを抱えた夫が帰ってくると思ったらね、誰も帰ってこないの。誠矢すらね。警察に電話しようか本気で迷いだしたとき、ずぶぬれのあの子が戻ってきたんですの。そして一言、ええ、あの一言だけは忘れられません。『僕が父を見失っちゃんたんだ』」

フツと息の漏れる音がした。自分のものか、彼女のものかは分からない。

「可愛いわね、って。あのときは何故か穏やかにそう思いましたわ。涙なんて二歳で卒業したあの子が、ぼろぼろぼろっていじらしく泣くんですもの。そしてわかったの。この子は自分が父を理解出来なかったことが悔しいんだな。今思えば、二人は親友じゃなくて、天敵同士のようだったかしら。いつも二人の回りには独特な空気が出来て、私には入れないの」

瑠衣の耳に部長の声が聞こえた。同僚の若い男と楽しそうに話す声が。

瑠衣には判らないスポーツの話少年のように盛り上がって話す彼の姿が、公園の向こうで幻想みたいにかすんでいる。

部長、唇を動かすと涙がこぼれそうになる。美里の話が再開し、

焦って拭う。

「夫はね、普段から気まじめだったけど、あのときは極端にすごかったわ。クレジットカードや会員をすべて消して、戸籍の死亡届まで出しましたわ。私の気が付かないところでいろいろ準備を進めてたのね。そして、何故かあの日に、きれいさっぱり何にもとらわれなくなつた体で出て行つたの。誠矢に一つ置き土産をしてね」

「置き土産？」

「何だと思う？ USBカードよ。笑っちゃいましたわ。何でも残すんだろって。でも知ってまして瑠衣さん？ あれって、大容量記憶装置って呼ばれてますのよ。何を詰め込んだんでしょうね。一週間は誠矢がパソコンから離れなかつたわ。見せてくれなかつたけれど、私も見る気はありませんでしたわ」

そう言つてまた美しく微笑む彼女は、マリア像の如く優しさを讃えていた。

最後の一粒のグミを口に放りいれる。ゆっくりと舌に辿りついたそれは、全身を使って甘さを引き立たせ、その身を揺らせて自らを削る。

眼をつぶつて味をかみしめっていると、美里が立ちあがつた。

「あなたの番ですわ、と言いたいのですがすごく虫が多くなつたので、また会つたときに訊きましょうか」

そんなわけには、と言いかけたが、美里はもう出口へ歩き始めていた。丸い髪の毛のシルエットが、暗闇の中で存在力を増している。

瑠衣は親友が出来た気分で見つけた。歳の差は八歳ほどだろうかと考えながら。

明日は、時の大切な日で、部長が消えて七日目だ。

明日部長は見つかるだろう、何故か瑠衣は確信した。

口の中でグミが弾ける。匂いが弾ける。美里と別れた後、瑠衣は幸せな気分で帰路に着いた。腕を元気に振りながら歩く。

ヒールの音がこだまする音に、久しぶりに注意を傾けてみる。

「悪くない気分だ」

残り二つとなったラーメンを、野菜炒めと一緒に食べようと思った。

満腹になろうと思った。

チャプター37 宴の開始

どうしてこんなことになったのかな。

何で思った端から面倒なことに巻き込まれるんだ。僕が望むのはシンプルで、素朴なものなのに。障害が多すぎる。

重い頭を回して辺りを確認した。

「随分物騒な顔ぶれじゃないすか。今さらですけどね」

大翔と名乗った男がそこに立っていた。上体を傾け、カウンターに置いたパソコンを操りながら、その顔ぶれを観察している。

頭が痛い。

彼が開いているのは、つい最近焼けつくほど記憶にある映像だ。

黒い画面に浮き上がる白い文字。そして、サイト全体からの不穏な空気。

ポケットの中で銀色の物体を転がす。父の記憶をなぞるように。

「はつきり言って、俺には何の事だかさっぱりだな」

圭護と言う名前だったと思う。頭をいらただしげに掻くその仕草は、ぎこちなく見えた。この空間で、僕がいるこの空間で、何かを繕うことなど不可能なのにな。

「こっちのページを見るよ、その部長さん」

福原が額を指で押さえながら近づく。背広を完全に着こなしている姿は、悠然としている。少しぼさついた髪も、余計に魅力を引き立たせているようだ。

眼を見開く。一歩足が下がる。目が細くなる。

面白いくらいに感情的に動く人だな。全部他の人にアピールしているのと同じだ。

「知らなかったなんて言わせないっすよ。あんたは自分の会社を放置した」

大翔の声が冷やかに刺さる。まとめあげた髪は異彩なオーラを発し、それがさらに圧力となっている。将来は髪を伸ばすのもいいか

もしれない。

敢えて栗野は黙った。

自分の情報をただでくれてやる気はさらさらないし、自分に利益がないとすれば尚更だ。

「俺は…ただ、足が動く方に動いただけだ」

馬鹿馬鹿しいいいわけに思えるけど、福原が言う正義の言葉に聞こえた。非の打ちどころがないほど、決意に満ちていたからだ。

しかし、納得しないのは男性陣ばかりではない。

「あんたね、勝手すぎやしない？ そりゃあたしが言える立場かは分からないわ。でもね、瑠衣ちゃんはずっと走りまわって探していたし、うちのコーヒー飲みに来る客もみんな今の時勢に四苦八苦してんのよ。そんな中あんたは一人で気ままに歩いてたってわけ？ こんだけ企業が揺れている中で、部長と言う立場のあんたが会社を抜け出したわけ？ 狂っているわ」

頭が痛い。

理論性に欠けた言葉は頭痛を起こす。しかし、福原を追い詰めるには十分だったようだ。

何も言わずに、男性陣を抜けて、逃げ出したんだから。

さきに割れたグラスのかけらが、きらきらと光っている。トキとか言う女が照明を明るくしたのだろう。いくら夏と言えど、そろそろ七時に差し掛かる。灯りも必要になる。

福原が出て行った、小さなドアはその余韻でキイキイ揺れていた。

「っなんだよ、あいつ。結局逃げんじゃん。卑怯者、裏切り者、度胸なし…」

ゆっくりとその声の主を目で捕えると、声は消えた。

「仕方ねえだろ拓、どうせあいつは此処にいても何も協力はしなかつただろうさ」

「だからってこの瞬間に逃げることはないだろ、トキさんが言うのは最もじゃん」

「黙れ、拓」

一番冷静な青年がその場を制した。前々から気になっていたが、裕也は最も気に食わない男だ。存在が奇妙で、感情を押し殺す演技をしているみたいだから。

それに、あの冷めた声も好きじゃない。

思っていることが伝わったのだろうか。裕也がこちらを見てきた。

「なあ、誠矢。お前は株市場で何が起こったのか知ってたんだろ」

それだけじゃない、他にも隠してるだろ、そう言えよ。頭が痛い。

「じゃあ、僕が言ったら全部信じちゃうんだ。ふうん、面白いことを教えてあげようか」

圭護が身構える。見慣れたものだ。

「さっきの部長さん、オーナーとは無関係だよ」

裕也は一瞬目を一回り成長させた。ぞくぞくする顔だった。そういう反応は人間が面白いと思えるものの一つだ。

大翔が髪を撫でつけながら近づいてくる。足音が妙に大きい。

「俺はお前さんが誰かは知らねえ。だけどな、その情報の真偽くらいはわかるぜ。こいつらも必死だ。嘘は言わないでくれないか」

こっぴどい人間も好きだ。

挑発する気はないが、わざと唇を前に突き出して言う。

「だって僕の言うこと全部信じるって言ったから」

大翔が力強く僕の頭を掴んだ。

(やめろ、誰がそんな権利を持つてるんだよ)

間近で見た大翔の顔は、遠目の時の輝きがなく、ひやりとした。

目の奥が真っ暗で、唇は無表情だったから。

「いいか、その演技もやめろ。俺はお前がオーナーと接触したのを見ていたし」

そこで区切ると、僕にしか聞こえない声でつぶやいた。

「ラトルってのはお前だったってことも知ってる」

言い終わると、手を離して二、三步遠ざかった。

髪がぐしゃぐしゃだ。その上、頭の中もぐしゃぐしゃになってし

まった。

ここに集まったやつらは何なんだ一体、偶然にしてはピースが揃いすぎてはいないか。

笑いがこみあげてくる。そつと掌でそれを隠し、怯えた眼付で周りを睨む。此処にいる奴らは全員使える。全員だ。

トキが爆発を抑える声を絞り出した。

「この店さあ、あたしのなの。閉店させてもらえないかしら」

誰がはいと言っただろうか。多分誰もが首を振るか、静かに見つめ返しただろう。今御開きなど誰も望んでいないのだから。

けれどもこんな思い空気では話せることも話せなくなってしまう。誰か気の利いた事をしてはくれないか。

「トキさん、五万で飲める酒ありつたけ出してくれる？ んで、みんなに振舞って」

気が利いたのは大翔だった。ポンと、万札を並べるとトキは渋谷カウンターの奥へ消えた。勿論、僕以外は未成年ではないから、目を輝かせた。

これで話しやすい空気が出来た。だが、何から話して誘い込むべきか。

「一応あたしも商売人だから、手は抜いてないよ」

トキが持つてきたのは、バーにふさわしい洋酒の数々だった。その中に懐かしいものを見つけた。レモンビールだ。父さんが大好物だった。

それに手を伸ばしたのは、拓だった。少し許せない。

そんな視線に気づかない様子で、拓は旨そうに舐めている。

「じゃ、皆さん落ち着きましたかい？ これから誠矢君から重大発表があるんで静かにお酒を飲みながら聞いて下さい」

大翔が見下ろしてくる。圭護ほどではないが、一八〇近い身長は迫力がある。

やるじゃないか、やっぱりこういう人間は好きだ。予想外のこと

を放りこんでくる。

深呼吸をして場に緊張感を生む。もう一つくらいしようかと思っ
たが、睨んでくるのは一人じゃないからやめた。

何処から話そうか。いつそ一言にまとめてしまった方がいいかも
しない。

「チエンジ作戦第二弾に参加して欲しいんだけど」

大翔の驚いた顔が傑作だった。それ以上にあの記者三人の惚け
顔も良かった。自分が笑ってはこの場を切り抜けられない。とにか
くシナリオを作るんだ。

父さんに繋がるシナリオを。

「さつき、オーナーを倒すとか言ってた人がいるよね。根本は僕
も賛成だ。それで、一度厨房に入ったことのある僕は、オーナーが
取引に応じてくれそうな物の在りかを知っている。それは、紙切れ
なんだけど、奴にとっては価値の高いもので、僕らの強力な武器に
なる」

一呼吸置く。どの程度効果があるか確認する。つまらないことに
全員息をひそめて続きを待つのみだった。一息に喋ると怪しいか、
そうでもないだろう。

「オーナーは人生に変化を起こすのが趣味だ。変人だね。そこで、
オーナーにも同じ目にあわせてやれば、隙は必ず生じる。いい？

これは明日にでも行わなきゃならない勝負だ。だから、今日のうち
に行動しようと思う。その三人」

記者三人組が揃って肩に力を込める。

「あとで、協力して欲しい」

真剣な目線と、了解の合図が返って来た。

「あとは、トキさん」

「なによ」

こっちの反応の方が面白い。必ず僕に向ける目は、理不尽な怒り
に満ちている。

「店は閉めないで欲しいんだ」

「言つとくけど九時過ぎたら小学生のお子さんは入れないの」
頭が痛い。

それでも五秒ほど睨めっこをしてあげたら、承諾してくれた。これに負けたことは一度もない。

さて、最後だ。

「大翔さん？」

大翔は店の端の出窓に移動していた。そのでっぱりに腰を掛けて、店内を見ている。スポーツ用のシューズが紫に輝き、存在感を増している。

「俺はいいなりにはならないがな、素晴らしい作戦なら付き合つてやるよ」

いつでも裏切るがな、が聞こえなかった。

「それでいいよ、ただ一つだけお願いがあるんだ」

大翔が意外だと言わんばかりに、肩をあげる。

「明日、ラトルにケーキを買いに来てくれないかな」

これで準備は整った。まずは今夜この三人組と成功しなければ。条例に引つ掛かる時間帯、少年は青年三人とラトルの前に立っていた。

チャプター38 不揃いな役者

紗枝と話を始めて何分が過ぎたのかは分からない。

ただ気付いた時には、街が暗くなり、部屋は闇に包まれていたのだ。スイッチを求めて立ちあがると、改めて見下ろした妻の小ささを知った。

「私は、間違ったかしら…ねえ、あなた」

返事を考えながらスイッチを入れる。パチンと音がした。

「俺は、正しいことを知らないから」

紗枝は自虐に似た笑い声をあげた。聞きようによつては機械音声みたいな、悲しい声。

「あなたらしいわ」

席に戻ると、紗枝は顔をあげた。涙にぬれて、少ししわの寄った顔だ。彼女の美しい指が、机に並べられた手紙の一つを台にしている。

指の腹を、なぞるように滑らせたかと思うと、ゆっくり涙を落した。

「付け加えることがあるの」

声色が変わった。

記憶の断片と、紗枝の話をつなげるとドラマが仕上がった。そのドラマは、あまりに不格好で視聴率など取れそうもない。だが、確かに意味が込められていた。

中心人物は紗枝の友人、以前よく家に来ていた女性だ。必ず来るたび一度笑顔を見せる彼女は記憶に色濃く残っている。

彼女は去年から狂気に満ちた計画を始めた。

きっかけは、記憶に新しい株の大暴落だ。今回の騒動とはケタが小さいものだが、当時は世間を恐慌に巻き込んだ。自分の会社に影響は出なかったというのに、紗枝が動揺していたのを思い出す。

通称「アンデイリー」非日常。

発端は一人の男の無謀なテロだった。確か犯人の名字は栗野だった。国会議事堂を狙撃し、捕まることもなく姿を消した勇敢と言っ言葉でしか表わすことのできない男だ。

その後は一切ニュースにも出ていない。

しかし、妻はその裏で繋がりのある人物と関わっていた。

栗野と言う男に劣らぬ、無謀な女性とだ。

その女性の名前は明かされなかったが、大翔に見せてもらったサイトに乗っていた人物で間違いない。彼女がああのチェンジ騒動を起こした張本人だ。

その目的は、紗枝から聞いたが現実味がない。

「日本を根本から変える…?」

「そう言ったのよ」

天才と馬鹿の考えることは凡人には理解できないと言う。ならば、彼女は天才か馬鹿かどちらなのだ。多分狂人だ。

「私が警察に言えばよかったのよね」

紗枝が髪を優しく掻き上げながらつぶやいた。

「いや、俺がきみなら言わなかっただろうね」

何故なら止める権利など彼女以外持てないからだ。

「付け加えることがあるの、あなた」

何を言われても驚かないだろうと、笑顔を張り付けて構えた。

「ねえ、和人世さん。これから一緒に真相を確かめに行きませんか？」

驚きと共に紗枝の目が輝き始めていた。

確かめることはある。全て確かめることなど無理だと言えるほどに。

だが、紗枝は何と言った。何をすると言った。

「真相」とは何だと思って言ったんだ。今、コートを羽織る自分は正気か。

紗枝はあまり着ないレザースーツを着込んでいる。その鮮やかな革の色が美しく、一瞬息をのんでしまった。

「行きましよう、あなた」

先程までの泣き顔が消えている。罪悪感が、勇気に変換されたのだろう。私はその顔の方が好きだ、紗枝。

二人同時に扉を抜けて、紗枝の愛車に飛び乗った。ドアの開閉が綺麗に揃っていた。顔を見合せて笑う。何より整った妻の笑顔があった。

「運転は君でいいのか」

「任せて。カードの色は普通じゃないから」

安心と不安どちらを覚えればいいのか分らなかった。

確信しているのは一つ、妻の運転を見たことは一度きりだ。結婚した当初、仕事へいく彼女の車を見て、戦慄した。あまりのテクニクと、その粗さに。

シートベルトを締めたからといって安心する者が何処にいるだろうか。私は知らない。レバーを倒すと同時に、ぐいとシートに押さえつけられて、頬が引きつる。

エンジンスタートと共に、走り出した車体は平衡感覚と言つ言葉を知らずに走り続けた。体は地面を忘れて揺れる。車窓の風景のなんと早いことか。

今がどこかすらも知りえない。知ろうとするたび体が先に倒れて、焦点が狂う。

「次曲がるわ」

何処に曲がると言っのたろうか、残像しか見えない世界で。タイヤの音はしなかった。その代わり恨みを持って打ちつけてくる風の音が耳をつんざいた。

「何処に向かつて…こんなに急ぐんだ？」

思わず叫んでしまった。そうでなければ伝わらないと思った。紗枝は涼しい顔で答える。

「あなたが、一番気になっているところよ」

そんな物一つに絞れるはずがない。いったいどこを目指す。

永遠に思われたカーチェイスが終わった先は、心理戦の会場だった。

「ラトル…」

さつと車から降りた紗枝は、コンと私の窓を叩いた。仕方なく下りると、ふらりと全身が崩れた。紗枝に肩を借りて、情けなく思っている、妻が言った。

「おかしいの、先客がいるわ」

その視線をたどると、丁度人影が動いたのが見えた。四つ。

一つは嫌に小さかった。そのシルエットに見覚えはなかったが、目を凝らして確認すると全員男のようだ。

「あなた、此処つて無断駐車にはならないわよね」

きつと答えなど眼中にないのだろう。紗枝は首を振る和人世を見もせずに、すたすた歩き出した。新婚当初はあのような女性だっただろうか。思い出せない。

誰かの家に謝り、玄関を塞ぐことをわびてから、後を追った。

ラトルは明かりが消えている。時計を見ると、九時過ぎだったから、当然だ。

「あなた、あれ」

一人の影が腕を素早く動かし、空気を震わせた。

それは口笛だったのかもしれないが、超音波に近かったので確証はなかった。

影はそれを止めると、他の者と一緒にそそくさと建物の間に隠れて行った。

「どうすればいいと思う？」

「家に帰るべきじゃないか」

「お願い、歩いて帰ってね」

「本気で言っているのか？」

「あなたこそ置いてく気？」

負けた。和人世は敗北を悟った。少なくとも妻は自信に満ちている。いいことだ。

落ち着いて、夏の夜の空気を肺いっぱい含んだ。味などわからないが、後に残る余韻はすっきりとしたものだった。

「俺も真相が知りたいよ」

「じゃあ、行きましょう」

紗枝がにこりと笑って、手の平を差し出した。一瞬で意図は汲みとれたが、次の動作に動くのには勇気がある。大体にして、最後に手をつないだのは二年以上前だ。

「あなた」

和人世は決心して、妻の手に手を乗せた。紗枝はにこりとまた笑う。あの美しく、整った、淋しげな顔が自分に向けられている。

今夜は眠れそうにない。妻は眠る気などさらさらしない。

真相に辿りつくのは今夜出ないと直感が告げるが、今夜妻と行動しなければ辿りつくことは一生ない気もする。結局選択肢はもとよりのない。

「これが終わったら、お祝いしましょう。あなた？」

「何の祝いだ」

「なんでしょうね」

やはり紗枝は教えてくれない。和人世は「その日」が来るのを待つのみだ。

「ね、あなた」

「ああ、そうしよう」

外灯の下で内緒話をするのは趣味じゃない。

「で、次はどうするんだよ」

裕也が不満げに言った。元々光を浴びるにふさわしい彼にとって、夏の夜に電信柱の影でこそめいているのは心外なのだろう。

今日だけは我慢してくれ。

「まずはね、オーナーの家の確認をしようか」

誠矢がラトルを指さす。さらりと揺れた髪が、月明かりを反射した。

「無論、大切なものをしまう厨房には防犯センサーがある。面倒なのは、赤外線じゃなくて音波ってつことなんだよね」

拓が柱に手を突きながら尋ねる。

「逆に楽に聞こえるけど」

誠矢は大げさに溜息をついた。何故か年を越えて似合っで見える。

「音波って言ってもね、足音を拾うとかじゃないんだよ。ここ」

トンと指で押したのは胸だ。拓も自分で確認する。

「…心臓の音？」

驚いた顔だ。多分オレも同じだ。

「そう。だから厄介なんだ」

裕也はしれつと言いのけた。Tシャツを夜風に吹かせて立ちながら。

「無理じゃねえか」

沈黙が漂うとの予想は見事に外れた。少年がはっきりと返したからだ。

「無理じゃないよ、この人の口があればね」

示された好青年は、可愛いくらいにおどおどとしていた。

拓が小声で確認する。

「ここで吹けばいいんだよね？」

ラトルの裏口に立ち、怯えている。勿論オレはそばにいるが、気が気じゃなかった。というのも、先程聞かされた計画は、無謀にデコレーションしたものだっただ。

「お前が音を出さずに口笛を吹けば、それで解決。センサーが壊れてしまうそうだ。万歳だ」

「万歳じゃないよ圭護、何で俺がこんなことすんの？」

素朴な疑問ほど答えにくいって知ってるか。つまり、答えられないよ。

「とにかく頑張れ」

誠矢は店の反対側、ラトルの正面で結果を見守っていた。流石に道路の真ん中に立つ馬鹿じゃないが、この時間に少年が道脇にいるのもどうかと思える。

誠矢が軽く背延びをした。合図だ。

「いけ、た…」

拓の回りの空気が徐々に震え始め、津波を起こす気配を見せた。

オレは初めて、すごい口笛ってものを見た。

音が出れば確かに口笛と認められる。しかし、本当にすごいのは音が出ずに口笛だと判らせることだ。今の拓がそれだった。

口にあてた二本の指を貫通して、鋭い波が発する。オレの鼓膜が揺れる前につき破られた。そこに痛みは存在しない。あるのは、何かが通り過ぎた余韻だけだ。

蝙蝠の超音波。

一度テレビで見たそれと類似している。拓が静かに目をつぶり、長く続けた。

永遠の時がたったかに思えた時、遠くで欠伸の音がした。二度目の合図だ。誠矢が歩いてくる。ゆったりと。

オレは、いつになく緊張して尋ねた。

「成功…したか？」

誠矢がクスリと笑う。前髪が目にかかり、蒼の眼が強調される。

「それより大変なことが起きたよ？」
言い返す前に異変に気が付いた。憧れの人が消えていたのだ。

拓が初めに怒鳴った。

「裕也はどこだよ、お前は一緒だったんだろ」

計画では、誠矢と裕也が入り口で反応を見守る手はずだった。何でこんなことになってしまったんだ。誠矢が澄まして囁く。

「僕もよくわからないんだけどさ、あの人たちが関係すると思う。そつと指をさした先には、二人の夫婦が立っていた。どうも外食帰りって雰囲気ではない。それに、女の方が喫茶店の主人を思い出すような剣幕で迫ってくる。」

「さあさああ、圭護。どうするよ」

「知らねえよ」

正直何もかもがどうでもよくなる瞬間だった。人間、訳の分らぬことが連発するとおかしくなってしまうのかもしれない。

夫婦が目の前に来た。誠矢を見て女が反応する。

「まさか、あなたがいるとはね」

誠矢の方は素知らぬふりだ。言葉を黙殺すると、男の方に向かって笑いかけた。

「僕たち今、人探しをしてるんですけど何か御用ですか？」

少年らしさに満ちた声だ。清々しさに溢れ、微塵にもとげがない。「誠矢君、栗野誠矢君でしょう？」

誠矢が空気を止めた。暗闇でよくわからないが、無表情だ。何もかもが凍てつくような、感情の無い眼だ。月の光が暗く見えた。

「あたしよ、紗枝。あなたのお…」

「黙ってくださいませんか」

誠矢の眼が闇で光った。地下深くから這い出た蒼の光が紗枝に襲いかかる。蒼い眼はしばらく宙に止まり、紗枝の言葉を続かせなかった。

静寂に包まれる。誠矢はふと視線を外した。

「どうも」

そつげなく誠也が礼を言った。オレは何をしていたか、ただ止まっていた。

裕也の行方を尋ねる暇もなく二分が過ぎたところで、オレは意を決した。拓と目くばせすると、その役を買って出たのだ。

「なあ、誠矢。裕也はどこに行ったんだ？」

誠矢からは無音の殺気が発せられ続けている。オレは冷や汗が伝うのを嫌に感じた。

十回は瞬きしたと思う。

「連れてかれたよ」

だからこそ、その返事に素早く対応できなかった。

「は？」

夫婦が惚けて立つそばで、オレは頭をフル回転させる。フルにだ。「待てまあ待て。裕也が誰にどうやっていつさらわれたのか教えて」

あくまで強気で行くしかない。下手すればパートナーが失われてしまう。元をたどれば誠矢の計画だ。こちらに落ち度はない。

「女の人に来てね、裕也の方からついて行ったよ」

理解が出来る日本語で、理解が出来ない内容だった。拓と二人で目を合わせる。

そう言えば、口笛の効果はどうなったんだろうか。

誰も答えを明かさなかった。

チャプター40 最後の一人(前書き)

長らくお待たせしました。やはり連載を重ねるのは危険ですね…更新を注意します。では、終章に突入した変化をお楽しみ下さい。

チャプター40 最後の一人

マンションの階段をゆっくりと上る。ライトに照らされたそこは、さながら底の無い橋のようだ。

瑠衣は自宅のキーを出しながら最後の一段を踏みしめた。

一息ついたときに、足音が聞こえた。後ろから、静かにと。

嫌なニュースの絶えない今日、瑠衣は震えが始まる前に振り返った。

赤いポーチが名残惜しそうに回る。ヒールが鳴った。

「…よう」

左手を上げるその人物は、ライトに照らされ輪郭しか掴めなかった。

「ぶ…部長？」

半信半疑が言葉通り表れた言い方だった。瑠衣は手の中でキーがカタカタ鳴るのを感じた。

人影がライトの真下に来る。その顔がはっきりと陰影を持った。

「悪いな。部長じゃないんだ」

ひゅつと息を吸い込む音がした。人影は一つではなかった。すりとした男女が一组。

「裕也…君？ と、あなたまさか」

黒いシャツを着た裕也の後ろから、麗しい女性が現れる。カールした髪は月光を反射してうねり、空気を支配している。

紅の唇がそつと開いた。美しい動作だった。

「比坂と申します。姉がずいぶんお世話になったようでかちりと音がして、キーが地面に跳ねた。」

リビングの電気をつけると、簡易な部屋が浮かび上がった。

裕也と比坂は無言でテーブルの余白に座りこむ。初めて招き入れ

た客の異様さに、瑠衣は立ちつくしてしまった。

上目遣いで見上げてくる二人に耐えかねず、瑠衣も正座に落ちつく。

「突然で悪いね、本当に」

テーブルの角に骨の透けた肘を当てて、彼が謝った。比坂も合わせてお辞儀する。

高貴な容姿の二人がすると、こちらが悪いと思った。

「お二人は…関係は」

「遠い血縁です」

有無を言わさぬ口調で押さえつけられる。比坂は髪を耳に掛ける続けた。

「裕也は私の母の妹の子供です。当然トキも知っているはずですが、あの子は母の死と同時にすべての親戚と縁を切ったから…知らないでしょう」

時の顔が蘇る。瑠衣は、そうですかと相槌を打った。膝を締め付ける両手がこわばる。

目の前にいる女性は、時が明日会うのだと言った人であり、時が憎む人だ。瑠衣は自分の態度をどう示せばいいのか戸惑っていた。

否、この状況すべてに対することなど不可能だった。

「とにかく、俺は圭護たちを置いてきたから手短に済ませたいんだ、恵利叔母さん」

外見年齢は二十七だろう彼女に、その呼び方は酷く浮いていた。

「裕也、あなたから話しなさい。言いたい事を全部ね」

目を湿らせて比坂が裕也を流し見た。三人の間の空気が固くなる。

夜風が珍しく音を立てて窓にぶつかっている。

裕也は髪の毛をすべてくしゃくしゃにすると、ざっと整えてから話した。

「今日じゃなきゃ間に合わなかったから、今日来た。午前中にな、

あなたの言う部長さんを見つけたんだよ」

「なっ」

「そしてな、ついさっきまで喫茶店で一緒だった」

瑠衣は意味なく口を動かした。横髪が頬を軽く打つ。

「今は、今は部長はどこに!？」

「まあ、待つてくれ。その用じゃないんだ」

比坂は凜としたまま黙っていた。

「あなたの出番は今夜にも準備されているんだ」

窓が軋む。カーテン越しにネオン街を見た。

「呼び出しに来たんですか？」

「そういうことだ」

裕也がくつろいだ姿勢のまま小さく笑った。

「不思議なことに、あなた以外は揃ってしまっているんだよ。部長さんも圭護に拓も。トキさんだって誠矢の所為で…で、あなたがいない」

知っている名前が次々出てきたことに当惑した。冷たいフロアリングに熱を奪われてゆく。

「あなた…誰？ 私は何をすればいいって言うつもり？」

勇気を絞り出した台詞だった。瑠衣は痺れてきた足から意識を離すと、彼の眼を正面から見た。初めて気付いたが、深い藍色だった。

「俺は福原裕也。どっかで聞いた名字だろ？」

時計の針が確かに止まった。

秒針の音が耳に戻った時、瑠衣は割れ物を扱うように言葉を紡ぎ出した。

「あなたは、部長の年の離れた弟で、私にこの騒動を止める切り札を見出したと」

「そんな感じだ」

やっと悟った気がした。裕也の口調はどことなく部長に似ていたのだ。しかし疑問はわだかまりを残す。

「じゃあ、じゃあなんで。何で相談した時に言ってくれなかったの？ 今になって言い出す意味はなんなの？」

裕也は肩をすぼめて見せた。細い眉がわずかに上がる。

比坂が引き継いだ。

「順序が決まっているのよ。あなたには理解できないかもしれないけれど、私達の血族はねそう言うのに縛られているの。かといって最近のあの人が過激すぎるから、裕也と連結を頼んで仲裁に出てきたのよ」

静かにラーメンをすすりたくなった。けれども、自分が主役の話題から抜け出すことは難しい。

「判り易く目的を言っして下さい。じゃなきゃ家まで上げたのが無駄ですから」

二人が小さく笑った。

「本当に選ばれただけある面白い方ですね。私達の目的は一つ。狂った計画を止めるだけです。そのために絡まった三人の人生を解いてね」

何の説明にもならぬ言葉だが、瑠衣は不思議とのめり込んでいた。

「三人とは？」

「それを教えるのは明日」

「決められているんですね」

そういうこと、と美しい彼らは微笑んだ。

体中が外に出たいと悲鳴を上げる。それらの好奇心を力強く鎮め、瑠衣は肝心であろう今夜の予定を尋ねた。

答えを買って出たのは裕也だ。

「まずは俺と来て下さい。この瞬間に最も荒れている場所へ連れて行きましょう。そこであなたは今回絡んだ人たちの裏の繋がりを知るはずだ。いや、知ってもらいたい」

スツと立った彼に腕を掴まれ、無意識に拒否してしまった。

裕也は淋しげに手を離すと、秘め事のようにつぶやいた。

「福原部長が好きですもんね…」

瑠衣は冷や汗をとどめつつ、俊敏に立ち上がった。比坂が後ろに続く。

「ちよつと待って下さい」

「何かしら？」

比坂を眼の前になると目眩が自然と引き起こされた。ラベンダーの香りが頭を包む。

「あなたは時に何をするつもりでしょうか？」

女王の笑みが部屋に光る。

「誤解を解かせて憎しみを取り除くつもり」

本心は判らなかつたが、ホツと息がつい出た。

玄関で既に靴をはき終えた裕也が呼んでいる。瑠衣のヒールをきれいに並べると、彼は一足先に出て行った。

「行くの？」

意外だと言わんばかりに比坂が囁く。

「順序でしょう？」

瑠衣は気持ち良く笑うことが出来た。部長がいなくなってから始めて頬が緩んだ気がした。不思議な来客は、確かにやるべきことを示してくれたのだ。

それがとてもありがたく感じた。

マンションから出て、裕也と比坂の乗りこんだ軽自動車を眺める。

窓から二人が手招きした。断れる人がいるだろうか。

「…どうも」

「恵利叔母さんの運転は安全だから安心しな」

助手席から裕也の声がした。独特の車の匂いを嗅いでいた瑠衣は、単にうなずいただけだった。

「見えねえよ…」

「あつ、はい！」

奇妙な組み合わせを乗せた車は、役者たちが待つ現場へと走り出
した。

チャプター41 揺れる遊具

あるたとい話がある。

糸が絡まりすぎて解けなくなったものを渡されたでしょう。大抵は三パターンに分かれるそうさ。

一人目。何とかほどこうと工夫をし、最終的に解ける者。
二人目。少しほどこうと努力するが投げ出してしまう者。
三人目。最初からほどこうとせずにハサミで断ち切る者。
さて、僕はどれに属するだろうかね。

人間なんて分けようと思えば簡単に分けられちゃうもんだ。今この場にいる奇妙なメンバーもね。

「誠矢君、いったい何が起こったっていうの？」

「多分返事無いでしょうからオレが答えますよ」

「圭護、まずは自己紹介から始めてくんない？ 裕也もいねえし

…何この状況」

「紗枝：此処に来たのは理由があつたんだよな？」

疑問詞の列が伸びていく。勿論僕はこの混乱を解いてやる気はないね。ハサミを持って微笑みながら機会を待つだけだ。

拓とかいうのは完ぺきに一人目のパターン。突然現れたこの女性もね。多分よく知らないこの男は二人目だな。

圭護とか言つたこの男は一見二人目だけど、実は三人目に思えてならない。

「すべての要はこいつが握ってるんで説明させます」

ほらね、こういう駆け引きに慣れているんだ。

ラトルから少し離れた公園に集合している。

既に沈みつつあるつきの弱弱い光が辺りを包みこんでいる。夏の湿気は太陽の残り香の如くしつこく漂う。

「誠矢」

全員が誠矢を見る。

公園の脇にあるブランコを囲んだ柵にもたれかかる青年二人。不
安げに手を握りしめ合う夫婦。

のんびりと彼らを見回して、誠矢は唇を持ち上げた。

「さつきも言った通り、裕也って人は女の人が連れて行ったんだ。
暗かったからよくわかんないけど、あれってもしかしたらラトルの
従業員かもしれない」

和人世を除く全員が反応した。拓は柵から勢いよく立ちあがった
せいで足をつったようだ。案の定、これだけの人数の手前、痛みに
耐えながらも文句をぶつける。

「お前って何考えているのか分んねえよ。ラトルのオーナーの秘
密を暴くんだったら普通止めるだろうがよ」

圭護が察して拓に座るよう促す。拓の赤いスニーカーが滑る音が
した。

「あつという間だったんだもん、二人とも打ち合わせでもしてた
みたいに」

圭護の表情が暗くなる。

(へえ…知ってるんだ)

誠矢はわざと反応を待った。秘密と言うのは自分から話すよりも
聞きだす方が何倍も嬉しい。

紗枝は先ほどから誠也を見ていたが、その視線は誠矢の意識に届
くことはなかった。ブランコを軽く揺らしながら、少年は頬づえを
つく。

重い沈黙が下りてきたときに、とうとう圭護が口を開いた。

「拓からいつてくんね？」

何と卑怯者な。

「何のこと？」

無駄だったみたいだ。

圭護はあからさまに当惑する。目の前の青年の無邪気ゆえの無知
を、呆れを通りこして恐れているかのように。

顎を搔く仕草がまたそれらしい。

「裕也の名字だよ」

拓が足をさするのをやめた。全員の視線が彼に集まる。彼は青年離れした純粋な笑顔でそれらを受けとめる。

「何が？ 福原だよ…あ」

「どうやら当人も含め時が止まったようだ。

僕以外。

事情を呑みこめていない和人世をしり目に、拓と紗枝は慌てふためいている。

「福原って、福原って瑠衣ちゃんあの部長…っていうより私の部長」

「えええ、裕也まさかあの男と家族…うわ想像できない」

「拓今頃かよ…」

静かに、静かにと二人を見詰めた。

誠矢の蒼い眼は彼らの心に冷たく浸透していく。会話がやんだ。

「それで、圭護は何を言うつもりなの？」

ちらりと見上げた先の男は、月を背後に立っていた。放射状に立った髪はシルエットとなって浮き上がる。骨格だけで男らしさが伝わる影だ。

「オレさ…」

誠矢は舌打ちを我慢した。

こうした勿体ぶり方は憎むものの一つだ。

夜風が五人の間を通り過ぎる。和人世が短く咳をした。

「オレさ、裕也とオーナーって仲間だと思っただよな」

「あり得ないね」

言ってしまったから誠也は後悔した。早すぎる否定ほど肯定に近いものはない。圭護が自分を見詰めているのを感じる。

「知ってたんだな、誠矢」

大人びた声が聞こえる。誠矢は両足でブランコを揺らす。

錆ついた音がこだまする。

しばらくその余韻を楽しんでから、少年は狂ったように笑い始めた。

幼い口をゆがませて、背中を震わしながら。

「フフハハツ、アハ…ハハ…だったら何か変わったの？ ハハ…」（だったら何が出来たの？）

紗枝がゆっくりと和人世から離れ、誠矢に近づいてきた。

それに気付きながらも圭護と相對する。圭護は笑っていなかった。ただ、目の前の少年を見下ろしていた。誠矢はまだ低く嗤っている。

「誠矢君、貴方のお母さんのことを話させて」

笑い声が止まる。

紗枝はうなじに何か突き刺さる気がした。

「…いやですよ」

誠矢は顔を上げた。随分と愉快な面が並んでいる。Ｔシャツの襟元の乱れを正すと、ブランコから立ち上がった。

紗枝がハツと息をのむ。

茶色い前髪のカーテンの向こうで、彼女は身をすくませた。

「母の出番は明日なんです」

フツと顎を引いた誠矢は道化師の神秘さを秘めていた。

圭護は無言だった。拓も言うことが見つからずに呆然としていた。その中で一人、無知ゆえに勇気が絞り出せた男がいた。

「栗野美里だろう？ 君の母親は。いったい今回の事件に彼女がどう絡んでいるのか説明してくれないか？ 私は比坂に毒殺されかけた。大翔がいなければ事件すら気付けなかった。君たちに会うことなど予想もしなかった…だが、出会ったのは何か働いているせいなんだろう？」

誠矢は口元を拭った。

こういう人間は嫌いじゃない。

「事件、毒殺、策略、騒動、変化、色々な名前を生み出してきたねオーナー…でもね、オーナー何か比じゃない位すごい人がいるんだよ？」

和人世の冷や汗が流れる音が聞こえる。

紗枝は自分を直視できないようだ。

「勿論比坂よりもね」

圭護が柵に腰かける。頭をくしゃくしゃに搔くと、整理できたのか一言言い放った。

「裕也は悪か？」

久しぶりに答えにくい質問だった。

思案する時間を稼ぐのも忘れるほどに。

「正義なんじゃない？」

声の主は、美しい女性だった。

公園の出口に近い所かららしい、三つの人影が寄ってくる。

（へえ…来たんだ）

順序を大切にする血筋にしては綺麗じゃない登場だ。

和人世が後ずさった。圭護はにやりと人影に笑いかける。

「比…坂っ…」

「今晚は、良い夜ですわね」

「よお」

「待つてたのか、圭護」

比坂は白いストールをひらめかせていた。裕也は先ほどと同じ格好だ。

そしてその後ろには、ラトルで何度か見かけたことのある女性が腕を組んでいた。

「ここに来ればいいって…言われたんだけど」

どうして誠矢君がいるのかしら、そんなつぶやきが聞こえた。

（良いよもう…面倒くさいけど説明役に回ってあげるよ）

ポケットの中のUSBを指で転がしてから、誠矢は比坂に声を掛

けた。

「何からしましょうか？」

星空の下で女性は髪をすいた。流れるようにそれは背中に落ちつく。

「今宵の順序の説明から」

艶やかな唇はそれ以上言葉を生み出そうとはしなかった。

チャプター42 道化師の夜

説明人が現れたと言う。それも少年だ。

随分とありがたい。紗枝もそう思っているに違いない。

だが、少年と比坂にかかわりがあるのがどうにも引つかかる。比坂は私に毒薬を与えた張本人のはずだ。いや、まだそれは確認されただけではない。

だからと言って今この場にいる彼女と普通に会話することなど不可能にしか思えない。帰宅後着替える時間もなかった背広姿のまま、和人世は脳を回転させていた。

「今宵の順序…ね、あなたらしい卑怯な言葉だ」

誠矢がぼつりと皮肉る。答えるように比坂は前に出た。

「いいよ、必要ない。どうせあんたはオーナーの側についてたやつだ、僕より頭は良いんでしょ」

すねた口調で誠矢は続ける。

「明日は何の日？」

小学生が先生におどけて尋ねる、その雰囲気がある一言だった。各人その質問の意義を考えだしている。

和人世はと言うと、祝日の名前を次々並べているだけだ。

「オレらの締切日？」

「あ、確かにね。やばいじゃん」

大学生らしい彼らがまず言った。後から来た裕也青年はその二人の方へ寄る。

「圭護、下書きはどの辺よ？」

「未だ構成図ぐらいかー、まあネタは上がってんだけど裏が取れてねえしな。裕也？」

次に紗枝が囁いた。

「明日はあの日じゃない…」

何の記念日だっただろうか。そもそもこの時期に記念日など重な

つていただろうか。妻は八年目にして記念日を猛烈に意識し出したが、その細かさには畏敬の念すら覚える。

しばらく考えても何も思いつかなかつた。

「紗枝、何の日だ？」

「教えない」

即答だつた。

誠矢が中心に立つ。

今この場で顔を見たことがあるのは、正直妻とその友人の片桐瑠衣のみだつた。

疎外感を覚えずにはいられない状況だ。自分以外はお互い認識があるようなのだから。否、妻も大学生三人組は知らないようだ。

「それで？」

比坂が促す。

比較することは禁忌だが、紗枝に比べると妖艶な印象を持っている。

視線に気づいたのか、彼女がこちらを向いた。一瞬、一週間前の仕事を思い出す。コーヒーを持ってくる彼女の揺れるスカートから慌てて目をそらしたあのときを。

そして、にこりと微笑んだ。妻とは異なる秘め事の多い笑み。

「て言うかさあ、俺の口笛って結局何だつたの？」

拓と言った青年が怪訝そうに誠矢にぶつける。言われた本人は何でもないかのように受け答えた。

「失敗だつたみたいだね」

裕也が残念でした、とからかう。

「なんだよつ、お前がどっかいつてなきや順調に進む予定だつたんだろ？ ラトルの美人さんと一緒にどこ行つたんだよ？ その上瑠衣さんまで連れて来てさ」

瑠衣が仄かに顔を赤らめた。

敏感にそれに気付いた若者たちに熱気が取り巻く。

「裕也つてめ…抜け駆けか？」

「兄の思い人にか？」

「そつか…福原部長さんは裕也のあ…になのお!？」

よくわからない話題で盛り上がる青年達だ。紗枝を見ると、比坂が気になつて仕方ないようだ。

星の光を程よく受けて光るジャケットは、普段の彼女には似合わない魅力を発している。今気付いたが、靴もそれに合わせた黒皮だった。

涙の痕はさつぱりと消えている。妙に安心した。

「はい黙つて」

全員が口を閉じた。いったいこの少年が何だと言うのだろうか。

よく見ると誠矢の両眼が光っているように思える。夏の夜に。あり得ない話だ。

「オーナーの大切なものとするつて話、あれは嘘ね」

どうやら随分と酷い言葉だったらしい。圭護と拓はいきり立った。咄嗟に制した裕也を押しつけて、拓は関節を鳴らす。指、手首、首の順に。

「いくらなんでもさあ、小学生におちよくられるのはよくないんだよね」

純粋な外見とギャップある迫力だった。たとえるならば、新人に右ストレートを入れられて怒りに支配されたボクサーだ。多分この後は新人が消えるだろう。

違った。

圭護が拓の両手を背中にまわして押さえたのだ。

「なにしてんの、圭護？」

「オレもムカついてたままないけどよお…こいつに傷付いたら何もかも分ないまんまで終わらせられそうだからな」

拓の全身から怒りが抜けた。

無性にタバコが欲しくなる。

だが、禁煙をしてもう長い。背広にはライターしか携帯していない。

そんな中で、裕也が口にタバコをくわえたのは嫌がらせにしか受け取れなかった。銘柄はスターザリック。若い時は世話になったものだ。

「言い方悪かったかな、ラトルの厨房にその貼り紙があるのは本当だよ。でも、音波とかより大変な防犯装置があるの」

「元々不可能なことをやらせたってことか？」

少年は肯定の仕草をした。

何人ものため息が聞こえる。だが、自分にその権利はない。

「何でかって言うと、君達三人だけと話をしようと思ってるね」

突然居心地が悪くなった。自分は邪魔なようだ。

瑠衣が進み出る。

「それ今言ってるつもり？ 大体ラトルのことなら私が一番知ってるわよ」

比坂がくすりと笑った。彼女は従業員なのだから当然だ。

誠矢も呆れたように顔を緩ませる。

「言つとくけど、あんたが一番部外者だよ。何で此処につれてこられたのかも分かっていないでしょ？」

これほど少年らしからぬ生意気な言葉をかけて聞いた事があつただろうか。

一度ある。

日本には珍しいテロのニュースで、インタビュールされた街頭の人間でこんな感じのことを言った者がいた。後に彼が容疑者となり、世間を騒がせたのだが。

「部長が関わっている時点で部外者じゃないわ」

裕也がひゅうと息を漏らした。

良い音を立てるヒールを鳴らしながら、瑠衣は中心に来た。誠矢の正面だ。

「明日何が起こるっていうの？ 私はさつき裕也君と比坂さんに聞いた少しのことしか知らない。部長には明日会えるの？ あなたがこの騒動を巻き起こしたって本当？」

どれほどいرونなことを経験してきたんだ彼らは。自分が生死をさ迷った問題すら小さく思える。

「全部答えてもらえば満足？」

どうにも少年が上手なようだ。

瑠衣はふらりと下がると、一息吸って吐きだした。

「順序通りならね」

紗枝と似て強い女性らしい。

誠矢もこれには予想外だったようで、一瞬目を大きくした。

それでもすぐに無表情に戻り、ポケットに手を入れた。何が入っているのか分らないが、それを握っているようだ。

「この三人にしか言うつもりはなかったんだけどねえ」

この三人は不意に呼ばれてびっくりとした。

「一つだけ答えてあげられる。騒動を起こした中には僕もいるよ」
瑠衣の眼に戸惑いが浮かんだ。紗枝から聞いてはいたが、彼女の会社も被害が大きかったようだ。株と言うのは経済の要。影響しない方が珍しいだろう。

「圭護、何か言って」

「お前に任せるよ、我らが好青年」

「誰それ？」

比坂が細い腕を綺麗に組み、左の指で腕を叩き始めた。日本人共通の合図、先へ進めと言うことだ。

「えーっと、僕らはなんによって集められたかっていうと、ラトルだね」

全員がうなづく。和人世もつられて首を振った。

「それで、ここにはいないのもいるけど、オーナーを止めたいって言うのが方針としてある」

「部長を探すつていうのも…」

「含んでいるから黙つて。ただ、ネットの世界じゃもう勝てないことが判明している。それについて細かく言うつもりはないね。付け加えるなら君らが何しように興味もないね。ただ、明日にはすべてが解決するとだけ言っておくよ。さあて、今から何すべきか分つた？」

疑問詞が浮かぶのを止められない。

しかし、比坂には何かが感じ取れたようだ。薄暗い中、顔が輝いている。

瑠衣は真剣な表情で話から外れて行つた。これ以上聞きたい事もないと言つように。三人の若者は裕也を真ん中に話しこんでいる。

隣の紗枝の手を握ると、彼女も握り返した。

「一つだけ聞きたいんだ」

「なに？」

紗枝と誠矢の声が被つた。和人世は苦笑する。

「悪い、比坂にだ」

少年が心外だとばかりに顔をしかめた。女神の如く存在感を振りまいていた彼女が、そつと歩み寄る。

記憶と同じ、ラベンダーの香りが流れた。

「眼が見えなければよかったですか？」

「いや、見えててよかったですよ」

比坂は満足げにカールした髪をなでた。

「あのな…俺に淹れたコーヒーに何か入れたか？」

返事は期待していなかった。答えは欲しかった。

「貴方がそう思うのでしたら」

そうか、そうならいいんだ。

紗枝は何の事かと目で訴えてくる。誠矢は既に意識の外らしく、ぶつぶつと口を動かしていた。

赤い星が高く上がった。

「紗枝、用は済んだか？」

「全然」

それでも、彼女は腕をからませてきた。

少年を一瞥すると、紗枝は最後に言葉を残した。

「明日には、貴方のお母さんについてすべて答えてもらおう…誠矢君」

少年は顔をあげなかった。小刻みに肩を震わしただけだ。

紗枝もすぐに振り返ると、車へ和人世をせかした。奇妙な会合が終わった。

解散だ。

明日に向けて。

チャプター42 道化師の夜（後書き）

書き始めから大分話が絡まってしまった気がします。でもそれはいのかなあ…彼らは同じ方向へ向かっているみたいですし。とうとう終末の日が来ますね。淋しくなります。

チャプター43 グラスの秘密

キイとドアが開けられた。ライトアップされてもなお薄暗い店内に、外の街灯の明かりが差し込む。一人の男が星空を背にして入って来た。

「よお」

カウンター越しにトキはため息をつく。先程まで飲んでいたレモンビールの香りが広がる。トキは人差し指でドアを閉めるよう促した。男、福原も静かにそれに従う。

奇妙なアンティークが月明かりを反射する中、まるで見張られている心地で福原はカウンターについた。

「多分あと二〇分で生意気なガキがやってくるわよ」

ハツと自嘲の笑いを加える。しかしトキの眼は不愉快さを浮かべてはいなかった。

「実は、俺としたことが悩んでてな」

「女？」

福原は幼馴染の顔を見て、顔を緩ませた。

「高校時代は何にも経験なかったからな」

「大学もでしょ」

「悪かったな」

二人はなつかしき青春時代を思い出し目を細めた。

「よせつけない、って感じだったのにな。女子とか目に入らないみたいだな」

「ロツクとかにはまったからな。ようやく硬派が何たるかを学び始めたんだろっよ」

馬鹿みたい、トキはカールした髪をいじりながら福原を見上げた。目線の差は大きく、ただでさえトキは猫のように背を丸めていた。

「瑠衣ちゃんをもてあそんじゃだめよ」

トキはこの三日間を思い出していた。誠矢のランドセルを持って思案顔をしていた瑠衣。その後の生意気な対話。川辺で会ったこと。母の日記に初めて本気で耳を傾けてくれたこと。

福原も同様に瑠衣のことを考えていた。

菓子に関しては誰にも譲らぬ性格で、部長と言う立場の自分を尊敬するどころかあしらってきた彼女。最近短くした髪型に胸を騒がせながらも平穩を装った毎日。思わず連れ出してしまった昼休み。

「大丈夫だよ」

「え？」

トキが笑顔で続ける。

「あんたは瑠衣を美里のようにはしないさ」

沈黙が流れる。福原はトキの紅が混ざった眼に吸いこまれそうになっていた。そうしていつの間にか、かつての記憶にとらわれ始めていた自分に気付いた。

「顔に…でてたか？」

「マジックで書いてあったわよ」

二人は低く笑った。

すこしの沈黙の後でトキがつぶやく。

「あいつらさあー、他人にはもう見えないわ」

この短い間に会話を交わした全員のことだろうか。それともラトルに泳がされ続けている者たちのことだろうか。

「明日は見守ってあげる」

トキは片手で瓶を二つぶら下げ奥に行ってしまった。

「そうかい」

その背中に向かってやさしく言う。

しばらく空のグラスを眺めていると、グラスの底に何かが見えた。カウンターの奥に首を伸ばして、気配が感じないのを確認すると福原はグラスを上にあげてみた。予想通り一枚のメモが入っていた。結露で湿った、だが字がはっきりしたメモをはがし取る。

カウンターの奥から水音が聞こえた。どうやら仕事の片づけをしているらしい。カチャカチャと食器の音も聞こえる。

福原は髪を撫でつけながらメモを読んだ。

美しいその筆跡に目を走らせた。

（貴方のことを許してはいません。貴方のことを憎んではいません。貴方のことを助けようとは思いません。でも明日だけ、お話を一度しましょうか）

「そうだな」

ただただ水音が響く店内で福原は嗤った。

チャプター43 グラスの秘密(後書き)

はい

引っ張ります

一か月以上待たせてすみません！

チャプター44 蝙蝠の告白(前書き)

半年…もうそんなに経ちましたか。長らくお待たせしました。主護
の最後のチャプターです。彼らの姿を目に焼き付けて下さい

頭の上を何かが飛び去る感触の後に、ムササビのシルエットが街頭の方へと向かうのが見えた。久しぶりに見たそれを、圭護は目で追ってみた。しかし、街頭の上を旋回したかと思えば、夏の星空に紛れて消えた。

「あ」

「何だよ、拓」

隣、オレと裕也の間を歩いてきた拓が宙を指差す。その横顔は、初めて動物園に行った子どもみたく輝いている。

「蝙蝠だったよな、今の。蝙蝠！ 見たか、今の？」

「ムササビだろ」

裕也が冷たく修正する。先程公園を出てから黙りこくっていたのだが、突然いつものテンポに戻ったようだ。

「蝙蝠とムササビって何が違うんだ？」

何となく裕也の答えが気になって反応を待つ。どうしてもシャツのシワを伸ばしたいという仕草をしながら。

「……」

やけに長い沈黙に、拓が無視されたのだと拗ね始めた頃、裕也が発言しようと思息を吸った。月明かりが顔に陰影を作り、その口元が怪しく歪む。

「蝙蝠の方が無様なんだ。ムササビと違ってバタバタと羽を羽ばたかせてな。しかもその飛び方は危なっかしい」

「散々だな」

拓は心底蝙蝠に同情しているようだ。依然として俺は月を眺める振りを続ける。

「散々だろ？」

月の円を何かが横切った。俺は叫び声を押し殺して、神秘的なシ

ルエツトに胸を高鳴らせた。多分一人はあの姿を見ていない。魔女なんかよりずっと、ずっと月が似合う、あの獣を。

オレ達三人は帰りもせずに土手を歩いた。また長い無言タイムが包み込む。夜に見る川は、天の川に似ている。ネオンが反射して、キラキラだ。

(何を言ってるんだオレは)

拓がいきなり駆けだし、追いかける間もなく踏み込んで舞った。両手をつき、勢い良く体をひねり回転する。軌跡があまりに美しく、オレも裕也も目を奪われて立ち止まっていた。

連続して側転もキメた拓は、十メートルほど先で某キャラメルのマラソン選手よろしく両手を伸ばし、静止した。

茶髪が風に靡く。今なら、拓が実は精霊なのだと言っても信じられそうだった。何故突然器械体操を始めたかとか、思いつきもしい。ただ、凄えなと感心していたのだ。

「長嶋拓う！ 片桐瑠衣に恋に落ちました！」

口笛と同じく、よく響く声の持ち主が告白した。当人でないオレが慌てて周りを確認するほど大声で。

クツと笑いが裕也から漏れた。

「あいつは阿呆だ……」

拓はピンと伸ばした両手で、月でも掴まんばかりだ。たった今の大胆な行動に一切赤面せず、堂々と。

(格好いいな)

オレの中で、拓が裕也を超えた瞬間だった。

「俺も本気だ。瑠衣を愛してる」

そして、裕也が追い抜き返した瞬間だった。

裕也の声は拓を貫くようによく通った。何の変哲もない土手が、ドラマの舞台に変身したみたいだ。遠くで振り返った拓が、拳を拳げて言う。

「負ける気がしねえ！」

不覚にもオレは吹き出した。急いで口を押さえ、拓が背負い投げをしようところらに向かつてきてないか確認する。

そのオレの横を、裕也が通り過ぎた。

「お前が俺にどの点で優れてるって？」

今や二人は対面し、いつでも殴りかけられる距離にいた。流石にオレの顔から笑みが消える。

「行動力だよ」

拓のその一言は、痛々しいほど静寂に響き渡った。

裕也はあくまで余裕を漂わせる微笑を浮かべていた。反対に、拓は童顔に血管を浮かばせている。

「裕也、お前こそ兄ちゃんに何一つ勝ってねえじゃん」

オレの人生の中で、最も憧れの人物の表情に亀裂が走った。

「福原部長。瑠衣さんに会ったときに気づいてたくせに何も教えなかった。卑怯だろ？ お前は兄ちゃんが相手じゃ勝ち目ないから、瑠衣さんに本当のことを言わなかった、だろ？」

「だから何だよ」

「はあ？」

空気が明らかに凍っていく。

「勝ち目なんて無いと瑠衣さんから知らされてたろ。俺も拓も圭護も」

（待て、何を勝手に）

「じゃあ、早く部長を瑠衣さんに会わせりゃ良かっただろ」

裕也の眼が細くなった。そこから感情は読み取れない。

「…訊かせるよ。拓はさ今の告白、面と向かって言えんのか」
生ぬるい夜風が川下に吹く。

「言っよ」

「あ？」

つい口を出してしまった。

「明日、裕也の兄ちゃんの目の前で言っつてやるよ」

遠くで電車の音がした。

裕也が土手を降りて行く。オレは何も言わずに見守った。地面に座り込む拓も同じように、細い背中を見つめている。

「おれ、言い過ぎた？」

素直な質問だ。

「いや、良かったと思うぜ」

裕也は水の近くで立ち止まり、座った。

（オレが行くべきだよな、やっぱ）

「拓、帰れ」

「なにいきなり！ 帰んねーよ、待ってる」

駄々こねる彼は、さつき威勢良く啖呵を切った男と同一人物に思えない。膨らませた頬がムカつかない、いつものガキだ。

「…わかってるよ」

（お前が帰んねーことくらい、わかってるよ）

ユウゴのＴシャツの裾を握り締めて、オレは土手を下った。自由に伸びた雑草が足に絡みつくが、歩く速度を変えさせることはなかった。

裕也の背後にたどり着くと、その背中が一ミリたりとも弱さを表していないことを悟った。勿論、長年の付き合いでコイツが打たれ強いことくらいは知っている。

だが、改めて自信溢れる後ろ姿に、特別な何かを感じざるを得なかった。

「圭護はどうする？」

予想外に先手をとられた。振り返った裕也の顔には、やはり微笑が貼り付いていて。

「明日、どうするんだ？」

ゆっくりと質問の意味を考えさせられる。瑠衣さんについてなのか、この一連の事件についてなのか。

川上から吹く風が冷たく肌を撫でる。

「オレは…何も」

「何も、なんだよ」

裕也は半笑いしながら訊いた。

「何も変わったことはしねえよ。ラトルの記事仕上げて、原稿書
いてまとめて、出版社持つてく。それだけだ」

（あ、それだけなんだ）

オレは自分の言ったことに驚いてしまった。オレは、それだけし
かしないんだと。

「ふうん。俺よりつまんないな」

「バアカ。大切なことなんだぜ」

「知ってる。でもつまんないよ」

「何が何でも否定したいのか？」

「否定じゃない」

裕也は手元の軽石を水面に平行に投げた。無造作に見えたが、石
は軽やかに水上を跳ね、川の中央ほどまで行ってしまった。

「拍子抜けしたただけだ」

「何にだよ」

「圭護さ、瑠衣さんといるとき…笑えるくらいに顔赤いんだぜ」

裕也は川を眺めて言ったが、その笑った瞳は確かにオレを捕らえ
ているようだった。

暫くして裕也は立ち上がった。骨の浮き上がった細い手で雑草
を払い落とす。

「なんで告白しない？」

ストレートな問いだ。

まるで高校時代の昼休みトークみたいに自然と、興味ありげに。

「お前もしないんだろ」

「俺は関係ない。圭護の話だ」

「お前がしない理由を教えてくれるなら、言ってやってもいいぞ」
オレは伸びをしながら裕也の反応を待たずに答えた。

「面倒だからだ。瑠衣さんは確かにドストライクな人だけど、今の生活に必要かつついたら違う。玉砕しようが成就しようが問題じゃない。ただ、面倒なんだ」

暗闇の中でも、裕也の両目がわずかに大きくなったのに気がついた。二人の側では川が無言で流れている。

「さ、お前の番だ」

さつき裕也を卑怯だと拓は言ったが、こんな手を使うオレのがよっぽど卑怯だ。

「…蝙蝠だからだ」

確かにそう聞こえた気がした。ただ、本当にそうだったか聞き返すのも馬鹿らしく、オレは一言「そうか」とコメントした。そうか、散々だなと。

裕也はこちらを見ずに肩を震わした。笑ったのか、呆れたのかはわからないが、乾いた声でこう言った。

「ああ、散々だろ」

拓は柴犬みたいにお利口さをアピールして待っていた。正確には胡座をかいて頬杖をつき、疲れた眼をこちらに向けて、だ。珍しい可愛らしいというより可哀想という印象を与える。

「なにジロジロ見てんの…」

「あ？ ああ、睫毛伸びたなあって」

「彼女か。気持ち悪い」

「どつちかつつたら彼氏じゃねえ？」

裕也はオレらの幼稚なやりとりを妙に温かい眼差しで包み込んでいる。

「だったら、おれは裕也のがマシ」

（おおっと、裕也の表情が変わったぞ）

「悪い、瑠衣さんにしか興味ないんだ」

素晴らしい切り返しだ。裕也はやはり憧れの人物だ。作文を書け

そうな位に。

三人は誰が先とも言わずに歩き出した。

チャプター45 隠された夜

圭護達が帰路についたところ、誠矢はのんびりと両開きの扉を開けた。無造作に左肩で押しながら。月明かりが差し込む店内には、湿気とはかけ離れた空気が漂っている。

誠矢は背後で金属音と共に扉が閉まる音を聞きながら、木の床を踏みしめて歩いた。右手はポケットに突っこませたまま、その冷たい眼を待ちうける女に向けて。

「おかえり、とても言つて欲しいわけ？」

「いいませんよ。そんな偽物の言葉など」

トキは相変わらず不機嫌そうに、煙草を吸っていた。黒のキャミソールと紺色のジャージを履いた彼女は、不思議とその化粧をまとった美しい姿が逆に際立つて見えた。眼をつむり吐き出した灰色の煙が行き先を戸惑うように宙で揺れる。

「さつきまで、誰かいた？」

誠矢はカウンターまで来てつぶやくように訊いた。先刻の椅子の配置をすべて記憶していたわけでもないが、間違い探しと同じように”異変”に気付いたのだ。トキが煙草を落とすようになるのを見て、少年は静かに微笑む。

（素直な返答で）

誠矢は福原のグラスが置かれていた場所を幼い指でなぞる。僅かに水分の残るそこから過去の映像でも読み取るうとしているようだ。トキが固唾を呑んで見守る中、誠矢は自分の中にこもって推理に入った。先程の全員がいた空間が脳裏によみがえる。圭護、拓、大翔、裕也、そして福原。

全ての会話が耳の奥をよぎる。その中で不必要な情報を次々と削除していく。

（オレはただの仕事って立場からものを言うけどな、結局俺らで…）

削除。

（ストップ。行つとくけどあたしは比坂さえこの世から消せればいいの。オーナーは邪魔だけこの際関係ないわ）

削除。

（随分物騒な顔ぶれじゃないすか。今さらですけどね）

削除。

（俺は…ただ、足が動く方に動いたただけだ）

誠矢はスツと目を細めた。福原だ。

圭護達が駆けつけてくるまでの彼との会話を思い出して、誠矢はくすくす笑った。そんな姿を見てトキは訳も分からず戦慄する。

「あんたって、本当に小学生なの？」

口に中てていた手を外して答える。

「生物学上は。ただの記号ですがね」

計算通りに大翔が入って来た。見るからに怒ってますと言うアピールをしながら。

「なんだよさっきのは」

「…つけてたんですか」

大翔は様々な考えをはらうように、髪を乱暴に掻いた。綺麗な曲線を描いていたオールバックが崩れる。

「お前があのおたちと何かするつつたからな。で、見てみればなんだ？ 失敗も何もあれに何の意味があつたっていうんだ？」

くだらない。

誠矢は感情が抑えられない目の前の男を軽蔑した。自分を抑えられない者が他人を抑えつけられるとでも思っているのだろうか。

大翔はコツコツと音を鳴らして部屋の中央まで歩いてくる。目線はせわしなく、どの一点を見つめれば心を落ち着かせられるのか本気で探しているようだ。

彼の背の高さでは、暗い店内の中でその顔の表情が隠されてしまふ。誠矢は少し不利に感じながらも、この状況を面白がっていた。

こんなに分かりやすい人間など、なにをしようが会話において失敗することなどないからだ。

誠矢は相手が止まるのを待って、からかう口調でこう言った。

「大翔さんには、わからなかったようですね」

床の木目を睨んでいた彼は、重々しく顔を上げながら誠矢に照準を定める。

「あ？」

「わからなかったみたいですね」

相手が冷静になるのを邪魔するように誠矢はわざとらしく繰り返した。トキはカウンターの途中で溜息をつく。これからの流れを想像して頭が痛くなったのだ。

否、この誠矢という少年が関わることで自体に嫌気がさしたのかも
しれない。

「成功、失敗。そんな物にこだわっているからさっきの出来事が何一つ理解できていないんですよ。大体、ラトルに忍び込めたとして、僕が何をしようと思っただけですか？ オーナーを意気消沈させて出てくるとでも思いましたか？」

「お前なあつ…つとにムカつく餓鬼だ」

話すのはそちらの番だ。

誠矢は迫りくる沈黙を退ける。

お前が話す番だ。

少年の気迫を感じ取り、大翔はかすかに冷や汗が流れるのに気がついた。

（俺が…十歳も年下のガキにびびってる…？）

確かに先刻の状況とは変わっていた。少なくとも対等以下の立場にいたこの少年が、今自分を追い詰めている。大翔は足が震えるのを必死で抑えた。

誠矢の冷たい両眼が自分だけに向けられている。

「あ…くそつ。俺は…」

トキは哀れなものを見る目で大翔を見守った。煙草を口にくわえ、

緩慢にその味を舌先で転がす。頬で揺れる髪に手を当てて、この事態を見守った。

「ハハハハハハッハハッハハハハハハハハハハハ」

いきなりのことだった。あまりに突然の笑い声に、誰もが脊髄の反射に應對できず硬直した。そして、おそろおそろ笑い声の主を見つめた。

少年を。

「ハハハ…ククツ…あー、本当にバカな人たちばっかだね、この街は。くだらないよ。くだらなさすぎ。滅びればいいよ。株の大暴落も止められないくせしてさ。個人に至っては子供に反論すらできない。弱い弱い奴等ばっか。ハハッハハハハハ。あーあ、貴方が来るのに期待してただけどなあ」

(期待と言うより、来るのがわかりきってたってことだけど)

「き、期待？」

大翔はまだ震えている空気の中で小動物のようにそつと尋ねる。腰の引けた姿からは威敵のかけらも感じられない。まるで人外の、理解を超えた存在を前にしているように。

「こ、れ」

ポケットから取り出したUSBを見せびらかすように回転させる。大翔が目で追うのを確認してから、手の中に包み込んだ。背後の時ですら緊張していることが伝わってくる。

「どうして僕がこんなことしているのか、わかりたいんでしょ？」

トキは直感的にパソコンを取りに向かった。深紅のそれを急いで持ってきたながら、トキは雰囲気壊さぬよう細心の注意を払った。

「なんでだ？」

「なんであなたに教えるかって？」

大翔は検察官になっっている気分だった。全てが疑わしい。

「つまらないですよ」

単純な答えだった。さらに突っ込むには勇気があるほど、強く単

純な一言だった。だが、誠矢が言葉をつづけたのにトキまで安心した。

「圭護は無理です。福原は危険です。大翔さん、あなたは……」
自分の全人格を決定されてしまうかと思った。大翔は身構えて続きを待つ。

「一番危害がないかなと」

「は？」

大翔はまともな返答もできなかった。誠矢はそんな彼を見て、鼻で笑う。

「あなたって過去を明かさないじゃないですか、素性も」

確かに、とトキは会合を思い出した。大学生三人組は簡単にペラペラしゃべっていた気がしたが、大翔は情報提供だけで自分のことは何も言っていなかった。

「だから、ですよ」

意味がわからないだろうなあ。あなたみたいな人には。

誠矢は蒼い眼を伏せて眉を上げた。小学生からこれほどかけ離れた表情を見るのは何度目だろうか。大翔は始めてあったところから抱いていた違和感を一層感じた。小さな手の中に秘められたたくさんの情報を、笑いながらいじる少年が恐ろしくさえ思う。

トキの持ってきたパソコンを自分の物を扱うように起動させ、パスワードをかいくぐりフォルダを開いて行く。トキはただ口を開くことしかできない。

「あ、そうだ」

誠矢が突然子供らしい声で言った。

「母が寝るのは十一時なので、それまでには帰りますよ」

二人は啞然としたまま、パソコンの画面と誠矢を交互に見るだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9778i/>

栗の変化

2011年12月11日17時50分発行